山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第125集

山梨県甲府市

# 音羽遺跡

OTO WA SITE

――音羽県職員宿舎建て替えに伴う発掘調査報告書――

（第１・２・３次調査）

1997・3

山梨県教育委員会

山梨県総務部

山梨県甲府市

# 音　羽　遺　跡

OTO　WA　SITE

――音羽県職員宿舎建て替えに伴う発掘調査報告書――

（第１・２・３次調査）

1997・3

山梨県教育委員会
山梨県総務部

# 序

本書は、山梨県総務部による音羽県職員宿舎建て替えに先立ち、1992・1995・1996年度の３カ年にわたり甲府市音羽町４番地内に所在する音羽遺跡を発掘調査した成果をまとめたものであります。

本遺跡は、甲府盆地を北西から南東に向かって流れる荒川によって形成された扇状地の左岸の自然堤防上に立地しておりますが、本遺跡の所在する音羽町一帯には弥生～古墳時代の遺物の散布が認められ、広範囲にまたがる遺跡として知られています。しかし、本地域において本格的な発掘調査が実施されたことはなく、今回の調査による期待は大きいものがありました。その結果、第１次調査として1992年度に行ったＡ区の調査では、弥生時代後期の住居跡２軒、奈良時代の住居跡３軒、弥生時代後期～奈良時代の土坑10基、溝状遺構７条が検出されています。遺物については、遺構には伴っていないものの縄文時代前期末・中期初頭・後期の遺物が検出され、周辺に該期の集落が存在していることが窺えます。弥生時代の遺物については、住居内から壷形・甕形土器の他に、磨製石鏃・凹み石・土製紡錘車なども出土しています。奈良時代においては、須恵器甕の破片を用いた転用硯が出土しており、県内ではあまり出土例のない貴重な遺物であります。1996年度に行ったＢ区については、弥生時代・古墳時代後期～奈良時代の住居跡３軒、土坑８基、溝状遺構11条のほか、集石３基、焼土跡１基などが検出されています。1995年度のＣ区の調査では、住居跡４軒、土坑４基、溝状遺構６条、ピット４基が検出されており、いずれも出土遺物から古墳時代後期～奈良時代に位置づけられます。また、Ｂ・Ｃ区の黒色粘土中から昆虫遺体・植物遺体が検出され、また、馬の歯も出土しており、本遺跡の古環境などを知るうえで貴重な資料が得られています。３カ年の成果として弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代の住居跡12軒、土坑22基、溝状遺構24条、集石３基、ピット４基、焼土跡１基などが検出され、弥生時代後期の壷形・甕形土器、磨製石鏃、土製紡錘車、古墳時代～奈良時代の土師器坏、甕、須恵器、高台付坏などが出土し多大な成果が得られ、本遺跡が弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代にかけての集落であったことがあらためて確認されました。

以上、本報告書の概要を述べましたが、これらの資料は古代史の学習や研究の資料として多くの方々にご利用いただけたら幸甚です。

末筆ながら本報告書が刊行されるまでに、調査・整理に従事された方々をはじめとし、御指導・御協力を賜った関係機関各位、並びに地元の皆様方に厚く御礼申し上げます。

1997年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

# 例　言

1　本書は、音羽県職員宿舎建て替えに伴う、山梨県甲府市音羽町に所在する音羽（おとわ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、山梨県教育委員会と山梨県総務部との委託契約に基づき、山梨県埋蔵文化財センターが３次にわたって実施したものである。調査期間は、第１次Ａ区の調査が平成４（1992）年11月27日から翌年の平成5（1993）年2月5日、第２次Ｃ区の調査が平成7（1995）年5月10日から同年7月7日、第３次Ｂ区の調査が平成8（1996）年9月11日から同年12月25日までである。

3　本書の編集は、高野玄明・田口明子がおこない、第Ⅰ・Ⅱ章を萩原孝一・米山　真、第Ⅲ章Ａ区の調査を高野玄明、第Ⅳ章Ｂ区の調査・第Ⅴ章Ｃ区の調査を田口明子、第Ⅵ章のまとめを高野玄明、弥生時代の布目痕について田口明子が執筆した。

4　現場における遺構写真はＡ区を高野玄明・橘田重男、Ｂ区を萩原孝一・田口明子、Ｃ区を田口明子・米山　真が撮影し、遺物写真は高野玄明・田口明子、埋蔵文化財センター調査員　平　重蔵が撮影した。

5　基準点設置は（有）東雲測量に委託した。Ｂ区Ａ－１Ｇ北東隅杭はＸ＝－36084.119m、Ｙ＝4280.470m、Ａ－８Ｇ北東隅杭はＸ＝－36115.846m、Ｙ＝4295.248mの数値である。

6　昆虫遺体の分析は、森　勇一（愛知県立明和高等学校教諭）、炭化材・種子同定の分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その結果は、附編の中に掲載した。

7　本報告書にかかわる出土品及び記録図面、写真は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

# 凡　例

1　掲載した図面の縮尺は、住居跡・土坑・溝状遺構が1/60、カマド及び微細図は1/30、土器実測図・拓本・石器類は1/3であるが、特殊な遺構・遺物はこの限りではない。

2　挿図中についてのスクリーントーンは次のとおりである。

▒ 石器使用面（A区）　■ 須恵器断面（A・B・C区）

▨ 焼土範囲（B・C区）

3　拓本で両面を載せてあるものは、断面右側が外面、左側が内面である。

4　遺構断面中のレベルポイント部分にある数字は標高を表す。

5　遺物図版挿図中のグリッド番号は出土位置を示す。

6　土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』（財団法人　日本色彩研究所　色票監修）に従った（B・C区）。

7　底部に布目痕を有する土器については、挿図中に示した数字は１㎝あたりの経・緯の平均本数を示す。（但し、資料により１箇所のみの計測値を使用した。また、小数点以下は四捨五入した。）

# 目　次

序
例　言
凡　例
第Ⅰ章　発掘調査経過 …… 1
　第1節　調査日程 …… 1
　第2節　調査組織 …… 2
　第3節　調査方法 …… 2
第Ⅱ章　環　　境 …… 4
　第1節　地理的環境 …… 4
　第2節　歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　A区の調査 …… 6
　第1節　基本層序 …… 6
　第2節　遺　　構 …… 7
　　1　住 居 跡 …… 7
　　2　土　　坑 …… 10
　　3　溝状遺構 …… 12
　第3節　遺　　物 …… 15
　　1　住居内出土土器 …… 15
　　2　土坑内出土土器 …… 17
　　3　溝状遺構内出土土器 …… 20
　　4　遺構外出土土器　縄文時代 …… 23
　　5　遺構外出土土器　弥生時代 …… 23
　　6　遺構外出土土器　奈良時代 …… 23
　　7　出土石器 …… 27
　　8　その他の出土遺物 …… 27
第Ⅳ章　B区の調査 …… 31
　第1節　遺　　構 …… 31
　　1　住 居 跡 …… 32
　　2　溝状遺構 …… 32
　　3　集　　石 …… 37
　　4　焼 土 跡 …… 38
　　5　土　　坑 …… 38
　第2節　遺　　物 …… 43
　　1　出土縄文土器 …… 43
　　2　出土弥生土器 …… 43
　　3　出土土師器・須恵器 …… 50
　　4　出土石器 …… 50
第Ⅴ章　C区の調査 …… 54
　第1節　遺　　構 …… 54
　　1　住 居 跡 …… 54
　　2　溝状遺構 …… 55
　　3　土　　坑 …… 58
　　4　ピ ッ ト …… 58
　第2節　遺　　物 …… 58
　　1　出土縄文土器 …… 58
　　2　出土弥生土器 …… 58
　　3　出土土師器・須恵器 …… 58
　　4　出土石器 …… 58
第Ⅵ章　ま と め …… 63
　附　　編 …… 65
　　音羽遺跡より得られた昆虫群集について …… 65
　　音羽遺跡出土植物遺体の種類 …… 71

# 第Ⅰ章　発掘調査経過

## 第１節　調査日程

音羽県職員宿舎の建設予定地となっている音羽遺跡について、山梨県総務部管財課との協議により事業によって直接影響を受ける部分の遺構・遺物に関する記録および保存を目的とした範囲確認試掘調査を実施した。

第１次発掘調査に先立って行われたＡ区の試掘調査では第１次調査予定地の全域にトレンチを設定して調査を行い、調査区のほぼ全体にひろがる黒色土層中より住居跡が確認されたほか、縄文時代、弥生時代、奈良時代の遺物が検出された。その翌年に実施された２度目の試掘調査では、旧宿舎建物４棟間の調査可能な箇所に試掘トレンチを設定して調査を行った。その結果、北側からは遺構とみられる黒色土の落ち込み及び、弥生時代の遺物が出土して遺構の存在が確認された。しかし、南側のトレンチでは遺構・遺物等の存在が認められなかったことから建設予定地における本遺跡の範囲が確認されたことから、この結果を受け、発掘調査は1992年から1996年の間、３度にわたって実施された。

第１次調査Ａ区　1992年11月27日～1993年２月５日（担当　高野・橘田）

第１次調査では、建設予定地内の約850㎡について調査を実施し、弥生時代後期、奈良時代初頭とみられる住居跡５軒、土坑10基、溝状遺構７条などが確認され、遺物も弥生時代の壷形・甕形土器、磨製石鏃、凹み石などや、奈良時代の須恵器高台付坏、土師器坏、甕、長頸壷などが出土している。また、須恵器甕破片を利用した転用硯が１点住居内から出土している。縄文時代については、前期末・中期初頭・後期の土器など出土しているが、該期の遺構は検出されなかった。

第２次調査Ｃ区　1995年５月８日～７月７日（担当　萩原・田口）

第２次発掘調査では今回の調査範囲で最も南側にあたる約400㎡について調査を実施し、古墳時代後期～奈良時代にかけての住居跡４軒の他に土坑４基、溝状遺構６条、ピット４基が確認され、遺物としては縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代にかけての土器・石器が出土したほか、昆虫遺体、種子などが確認された。

第３次調査Ｂ区　1996年９月11日～12月25日（担当　田口・米山）

第３次調査では第１・２次の調査区の中間部分の約1050㎡を中心に調査が行われ、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代の住居跡３軒、集石３基、溝状遺構11条、焼土跡１基、土坑８基を確認した。遺物としては縄文時代前・中期・後期、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代にかけての土器・石器などが出土し、昆虫遺体、種子・炭化物などが多数確認された。

## 第２節　調査組織

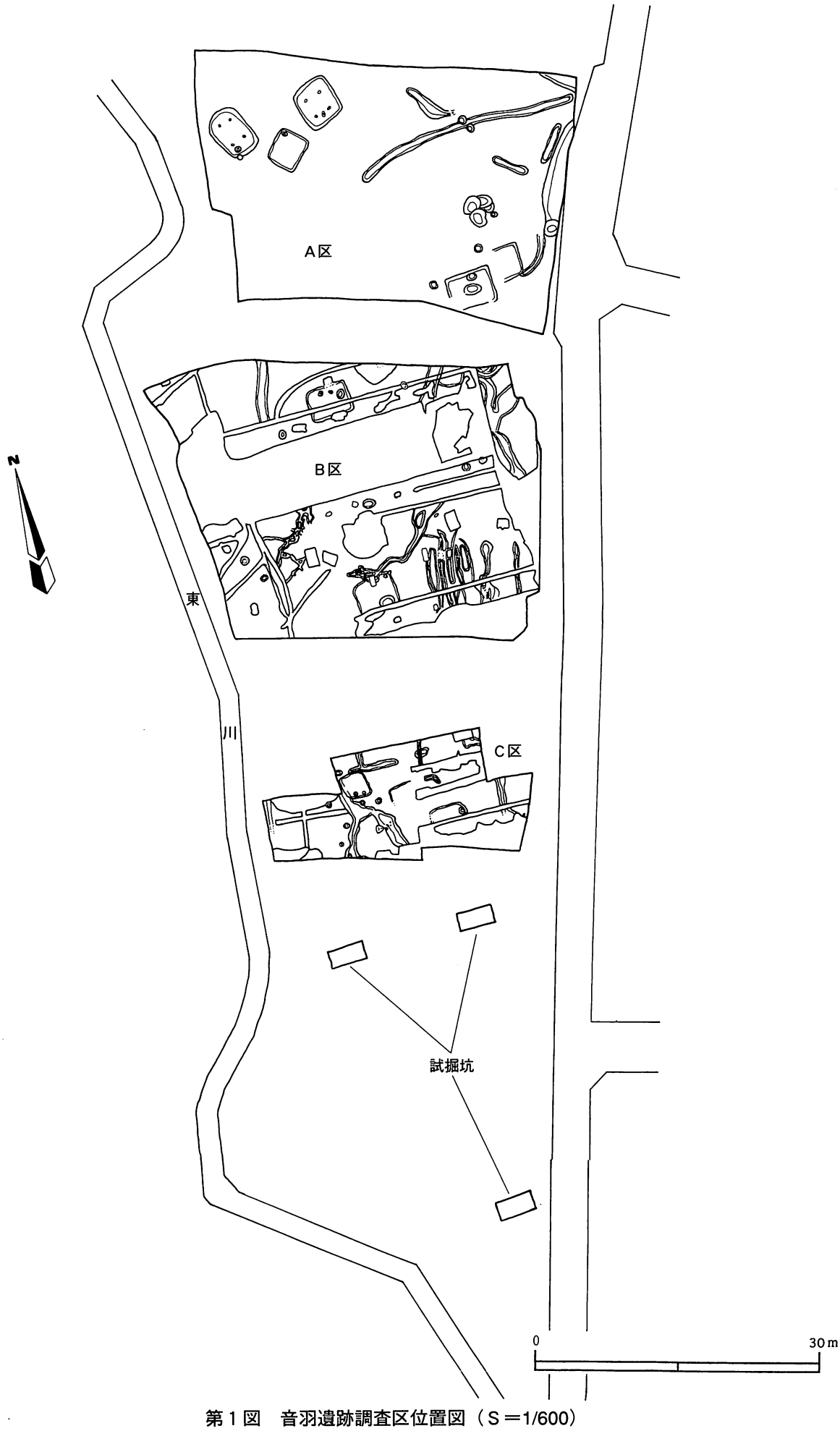
| | |
|---|---|
| 調査主体 | 山梨県教育委員会 |
| 調査機関 | 山梨県埋蔵文化財センター |
| 調査担当者 | Ａ区　第１次（1992）文化財主事　高野玄明・橋田重男 |
| | Ｃ区　第２次（1995）文化財主事　萩原孝一・田口明子 |
| | Ｂ区　第３次（1996）文化財主事　田口明子・米山　真 |
| 発掘・整理作業員 | 平　重蔵、青柳　清、森下　豊、太田てる江、細田正子、岡　仲子、滝田節子、石川弘美、北原和江、加藤智恵子、兼子よし子、小菅春江、山本多美子、高見暉子、花曲敬子、前田芳美、大久保發子、市川祥子、志村　悟、菅原ますみ、西　洋子、渡辺俊夫、中村喜代美、菅沼芳治、飯沼一美、早川紀子、平井政則、手塚盛明、手塚房子、向井袈裟春、長坂　清、平井信子、森本幸子、保坂敬美、石原沙織、清水栄治、八巻　協、八巻みはる、八巻和子、保坂秋蘭、名取みよ子、小中泰子、玄間千鶴、三好美智、渡邊泰彦、中澤信忠 |
| 協力者・機関 | 山梨県総務部管財課　甲府市教育委員会　音羽県職員宿舎　谷口一夫 |

## 第３節　調査方法

県音羽職員宿舎建て替え事業に伴い、1992年と1993年度の２回、当センターによって遺跡確認調査が実施された。第１次調査に先立って行われた１回目の試掘では、調査予定地の全域に重機による１ｍ×10～20mのトレンチを計６本設定して調査を実施し、その結果として調査範囲のほぼ全域から遺構・遺物が発見されたことにより、これに引き続いて第１次調査が行われた。２度目の試掘は建て替え予定地の前回未調査範囲、旧宿舎間の調査可能な箇所に重機による２ｍ×４ｍのトレンチを計６本設定して行い、１度目の試掘と同様遺構・遺物の確認を行うと共に、建て替え予定地全域における本遺跡のひろがりに関しても精査した。この結果、試掘調査範囲北側のトレンチからは遺構・遺物が確認されたが、その一方で南側に設定したトレンチからは遺物・遺構等が認められず、湿地の様相であったことから建て替え実施予定地のうち、北側半分程度が当該区域における音羽遺跡の範囲に含まれるものとして、1995・1996の両年度に第２・３次発掘調査が実施された。

本調査は1992年から1996年まで合計３度にわたって行われたが、各宿舎建設工事に先立って発掘調査が行われた事などから、調査区は調査実施の順と関係なく北から順にＡ・Ｂ・Ｃ区という設定が行われた。いずれの年度も調査区内には５ｍ×５ｍを基本とするグリッドを設定したが、第１次調査時は西から東へＡ・Ｂ～Ｊのアルファベット、北から南へ１・２～７の算用数字を付し、第２・３次の調査時にはそれぞれ年度ごとに西から東へ１・２～９の算用数字、北から南へＡ・Ｂ～Ｆのアルファベットを付した。そのため、各年度ごとの調査区をみた場合、グリッドの位置関係およびグリッド番号等が必ずしも一致していない事をご了承いただきたい。

表土から確認面まではまず重機によって排土作業を実施し、その後は人力（主にジョレン）を利用して遺構の確認を行った。ただし、周囲は住宅地で土置き場が設定できなかったため調査区を２つに分けてほぼ半分ずつ調査を行い、調査区の残り部分を土置き場とした。また、調査終了部分に関しては、早急に埋め戻しを行い、未調査部分発掘時の土置き場として利用した。




第１図　音羽遺跡調査区位置図（Ｓ＝1/600）

# 第Ⅱ章　環　　境

## 第１節　地理的環境

本遺跡は甲府盆地の北部に位置し、甲府盆地を北西から南東方向に流れる荒川中流の左岸に形成された標高約290mの微高地上にある。本遺跡の北側には湯村山・片山などがあり、甲府市北部一帯にかけての山間部と、盆地中心部以南に広がっている低地とのちょうど中間にあたる部分である。この地域は甲府市の中でも古くからの住宅地として宅地開発が進んだ地域で、今回の調査区域周辺も現在はほとんどが宅地となっている。ただし、荒川流域の中でも比較的水の便が良く、水はけもよい地域ということでかつては水田および畑地としての利用も多く、今回の調査区域に関しても職員宿舎が建設された昭和30年代以前には、水田あるいは桑畑であった事が知られている。

この荒川の流域は古くから定期的に大規模な出水があり、それに伴って土地の浸食および堆積等があったと考えられている。これは音羽遺跡においても基盤層に礫を含む砂層が、更に主な遺物の包含層である黒褐色（砂質）土層の上部にも砂層がほぼ遺跡全体に堆積していることからも明らかであろう。

その一方で、本遺跡自体が河川の流水による影響を受けていることも考えられる。実際Ｂ・Ｃ区の調査時にはそれぞれ調査区の北西側10×10mほどは削られたような状態で他の部分とも層位が異なっており、遺構・遺物や本遺跡内での遺物包含層とされる黒褐色（砂質）土層がほとんど確認されていないことをみてもその可能性は高いと言えるのではなかろうか。

## 第２節　歴史的環境

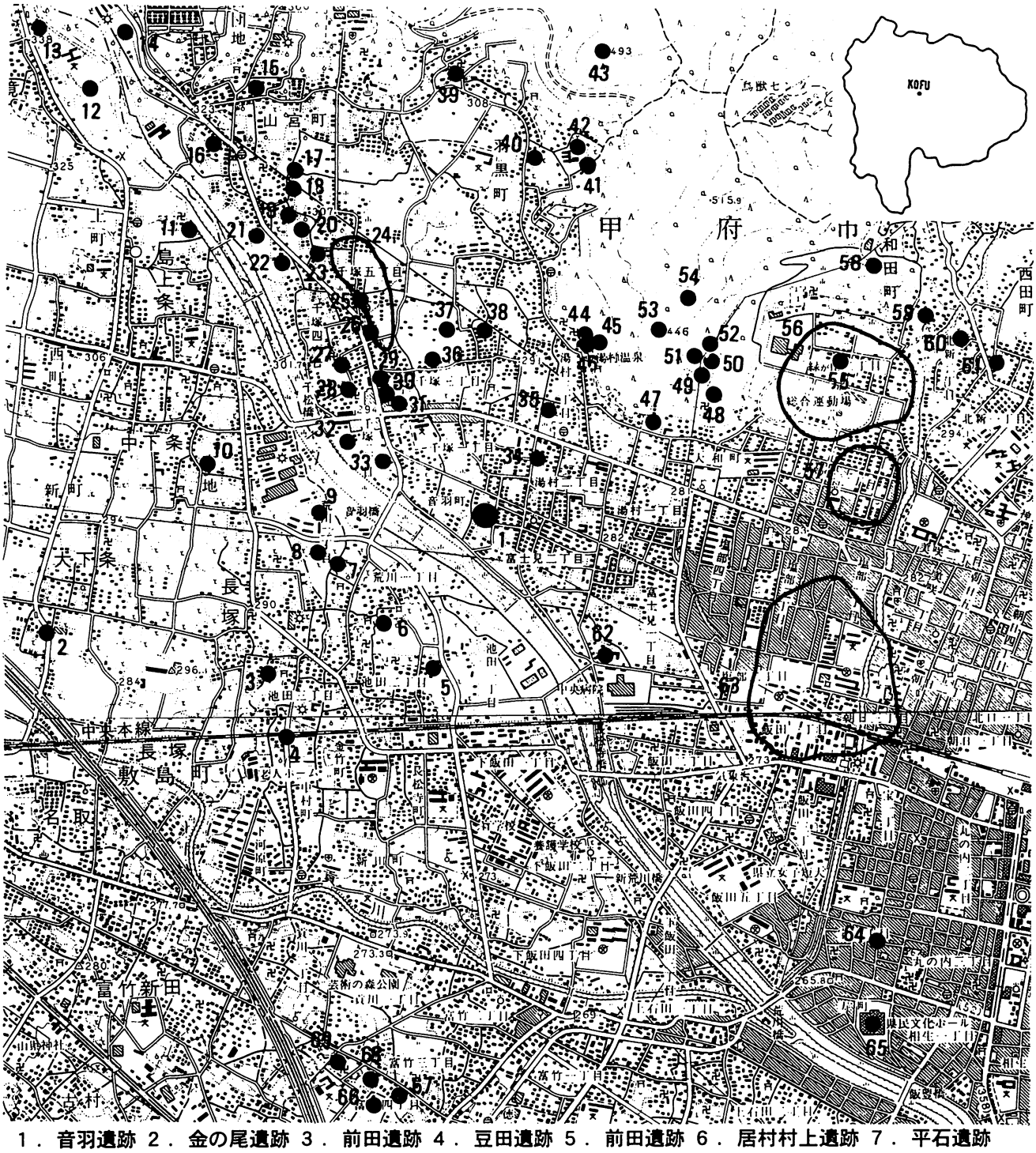
平成４（1992）年に甲府市教育委員会から発行された「甲府市遺跡地図」によると、甲府市内には250以上の遺跡が確認されているが、その中でも音羽遺跡は地理的・歴史的の両面において広範囲な遺跡として記載されており、今回の事業予定地も音羽遺跡の範囲内にあたる。

本遺跡と同じく荒川中流左岸に形成された微高地上には天神西、跡部、富士見などの遺跡が確認されている。これらはいずれも古墳～平安時代の散布地であり、現在まで具体的な遺構は確認されていないが、その周辺に広がる低地には本遺跡の北西約１kmに1992年に発掘調査が行われ古墳時代後期～平安時代の住居跡28軒、古墳時代前期の方形周溝墓４基などが検出されている榎田遺跡や、南東約1.5kmには1995年度に調査が実施され、方形周溝墓群などが確認された塩部遺跡などといった弥生時代～平安時代にかけての集落跡も存在している。

甲府市北部は、甲府盆地の中でも音羽遺跡と時期的に重なる弥生時代～平安時代頃にかけての遺跡が数多く確認されている地域である。まず弥生～平安時代までの遺跡として北側約500mのところに神田遺跡が、同じく弥生時代～古墳時代にかかる遺跡には北東500m程のところに八幡東・八幡前の両遺跡が確認されている。また古墳時代の遺跡は本遺跡から半径約1.5km以内に天神西、塚本、金塚西などの遺跡があるだけでなく、穴塚や加牟那塚などの古墳も確認されている。一般に甲府盆地の北部から北東部にかけての山沿いは、古墳時代後期に属する円墳や積石塚などが多数確認されており、音羽遺跡付近でも前述の両遺跡に加えて万寿森古墳や湯村山１～６号墳などが知られている。この地域は「千塚」という地名でもわかるようにかつては多数の古墳が存在していたが、現在は開発などでその多くが消滅し、現在確認されている古墳に関しても残存状況の良好なものは少ないのが現実である。

更に古墳～平安時代にかけての遺跡としては御蔵、天神北遺跡などが挙げられる。また、平安時代の遺跡は荒川周辺に多く確認されており、左岸一帯に鴨塚、大坂Ｂ遺跡が、また本遺跡の対岸には西河原、平石、居村村上、前田遺跡がみられる。

今回の調査範囲は音羽遺跡の一部であり、本遺跡の全体像をつかむには至っていない。しかし、本遺跡周辺には数多くの遺跡が確認されており、今後も開発などに伴い発掘調査が行われる可能性が高く、本遺跡は前述の榎田遺跡や塩部遺跡などと共に、甲府盆地北部の古代を考えていく上で大きな役割を果たすものとなるであろう。




1．音羽遺跡 2．金の尾遺跡 3．前田遺跡 4．豆田遺跡 5．前田遺跡 6．居村村上遺跡 7．平石遺跡 8．西河原遺跡 9．穴塚古墳 10．宮地遺跡 11．おさん塚古墳 12．大塚遺跡 13．宮前遺跡 14．米草古墳 15．山之神遺跡 16．鴨塚遺跡 17．天塚古墳 18．御蔵遺跡 19．天神塚古墳 20．天神北遺跡 21．無名1 号墳 22．天神西遺跡 23．子泣塚古墳 24．榎田遺跡 25．無名2 号墳 26．猪塚古墳 27．跡部遺跡 28．蛇塚遺跡 29．凧塚古墳 30．証文塚古墳 31．薬師塚古墳 32．大坂A 遺跡 33．大坂B 遺跡 34．八幡前遺跡 35．八幡東遺跡 36．神田遺跡 37．金塚西遺跡 38．加牟那塚古墳 39．若宮前遺跡 40．天神平遺跡 41．無名塚古墳 42．大塚古墳 43．天狗山（羽黒山）古墳 44．大平1 号古墳 45．大平2 号古墳 46．塩沢寺裏無名墳 47．万寿森古墳 48．湯村山1 号古墳 49．湯村山2 号古墳 50．湯村山3 号古墳 51．湯村山4 号古墳 52．湯村山5 号墳 53．湯村山城跡 54．湯村山6 号古墳 55．和田無名墳 56．緑ケ丘一丁目遺跡 57．緑ケ丘二丁目遺跡 58．三光寺山古墳 59．村之内遺跡 60．向田A 遺跡 61．向田B 遺跡 62．富士見遺跡 63．塩部遺跡 64．宝町遺跡 65．寿町遺跡 66．南河原C 遺跡 67．南河原D 遺跡 68．南河原A 遺跡 69．南河原B 遺跡

第２図　音羽遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）

# 第Ⅲ章　A区の調査

## 第１節　基本層序

第Ⅱ章で述べているように、本遺跡は荒川中流の左岸微高地上に位置している。A区については、調査以前は畑地として使用していたことにより、B・C区に比べて遺跡の残存状況は比較的良好であった。地表下70cmほどで、黒褐色粘質土が確認されており黒褐色土上面及び黒褐色粘質土中に遺物が包含され、黒褐色粘質土下部の白色砂質土を住居跡などの遺構は掘り込んでいた。以下、本遺跡A区についての基本層序を述べてみる。

Ⅰ層＝暗褐色砂礫層やや粘性あり

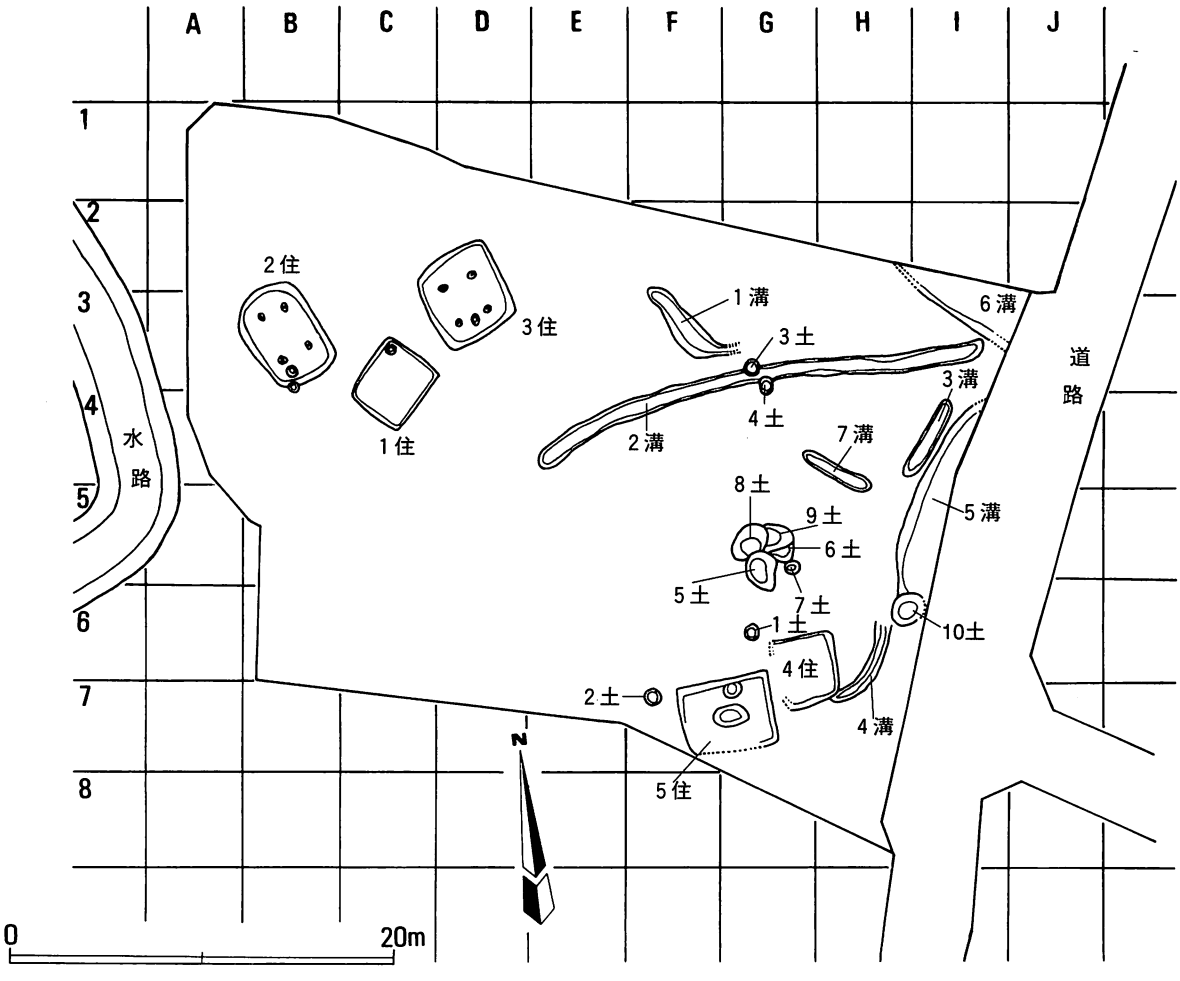
Ⅱ層＝灰白色粘質土（砂粒多く含む）

Ⅲ層＝暗褐色粘質土（　　〃　　）

Ⅳ層＝黒褐色粘質土（やや砂粒含む）※遺物包含層

Ⅴ層＝白色砂質土　※遺構確認面

以上であるが、A区についてはB・Cで見られるような氾濫によって削られた痕跡はみられず、安定した層序である。




第３図　A区全体図

## 第２節　遺　構

### １　住居跡

#### 第１号住居跡（第４図）

Ｃ－３・４Ｇに位置する。本住居跡は、試掘調査時に確認された住居跡で、長辺は東西方向が3.75m、短辺は南北方向3.35mの隅丸方形を呈する。覆土は、暗褐色粘質土が主体をなし、わずかに焼土・カーボンが見られる。床面は、地山の黄白色砂質土を呈し、貼り床や踏み固められたような状況は見られない。壁高は、0.10m強ほどで緩やかに立ち上がる。柱穴などの施設は検出できなかった。カマドは、住居跡北西側の壁の北側コーナー付近に構築されていたと思われ、若干の焼土とカーボンが検出されているが、残存状況はよくない。また、カマド右側には貯蔵穴と思われるピットが検出されており、規模は、長径0.6m×短径0.57m、深さ0.15mを測る。本住居跡からの出土遺物は、坏・甕などが数点出土している。（第12図１～５）。

#### 第２号住居跡（第５図）

Ａ－３、Ｂ－２・３Ｇに位置する。本住居跡は、長径南北方向5.65m×短径東西方向3.85mの楕円形を呈するが、南東側のコーナー付近においてプランははっきりしない。床面は安定した状況は伺えず、壁も0.20m程でだらだらとした立ち上がりが見える。炉は確認されていない。覆土は、暗褐色粘質土と黒褐色粘質土が見られる。本住居跡に伴うと思われる柱穴は、４基検出されている。ピット１は、長径0.26m、短径0.17mの楕円形を呈し、深さ0.20mを測る。ピット２は、長径0.22m、短径0.19mの楕円形を呈し、深さ0.48mを測る。ピット３は、長径0.25m、短径0.20mのほぼ円形を呈し、深さ0.38mを測る。ピット４は、長径0.18m、短径0.15mのほぼ円形を呈し、深さ0.30mを測る。本住居跡からの出土遺物は、甕形土器・壷形土器の口縁部・底部破片や（第13図）、磨製石鏃（第24図１）の未成品などが出土している。

#### 第３号住居跡（第６図）

Ｃ－２・３、Ｄ－２・３Ｇに位置する。住居跡の平面形は長辺4.70m、短径4.30mの隅丸方形を呈する。床面は、黄白色砂質土を呈し、安定した床面を持つ。壁高は、0.30mほどで緩やかに立ち上がり、比較的深い掘り込みがみられる。住居跡南側が入り口部と思われ、南側壁中央部分に、梯子受け穴と思われる掘り込みが検出されている。炉などの施設は検出されていない。本住居跡に伴う柱穴は梯子受け穴を含み、５基が検出されている。梯子受け穴は、不定形の平面形を呈する。ピット１は、長径0.18m、短径0.10mの楕円形を呈し、深さ0.20mを測る。ピット２は、長径0.35m、短径0.18mの楕円形を呈し、深さ0.25mを測る。ピット３は、長径0.25m、短径0.23mのほぼ円形を呈する。深さは0.20m程度である。ピット４は、長径0.20m、短径0.10mの楕円形を呈し、深さ0.26mを測る。本住居跡からは、比較的遺物の出土量は多い。甕形土器・壷形土器（第14図）、磨製石鏃、土製紡錘車（第24図２・３・８）、凹み石（第22図３・５・６）が出土している。

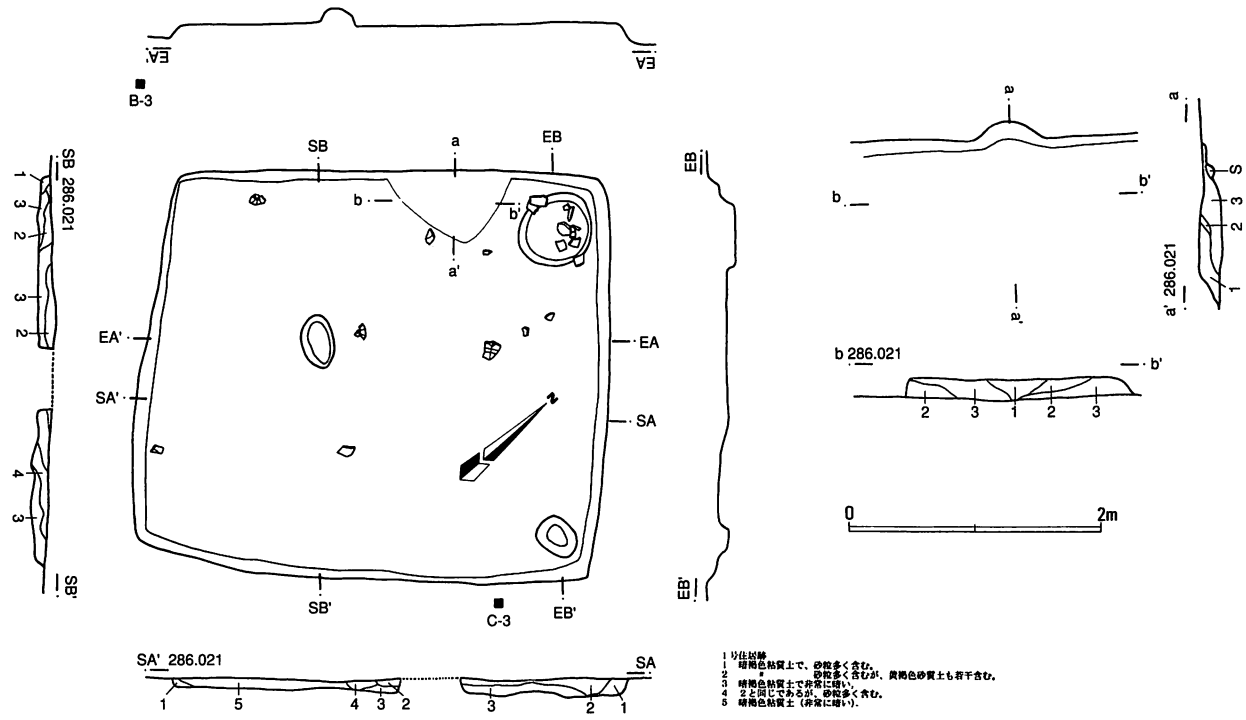
#### 第４号住居跡（第７図）

Ｇ－６・７、Ｈ－６・７Ｇに位置する。住居跡北西方向が攪乱により、遺構検出プランは不明瞭で残存状況はよくない。推定ではあるものの長辺3.45m、短辺2.8mの方形プランを呈する住居跡と考えられる。壁は、0.15mほどで緩やかに立ち上がっている。カマドや柱穴などの施設は検出されなかった。遺物は、須恵器高台付坏、土師器坏、甕（第12図６～14）などが出土している。

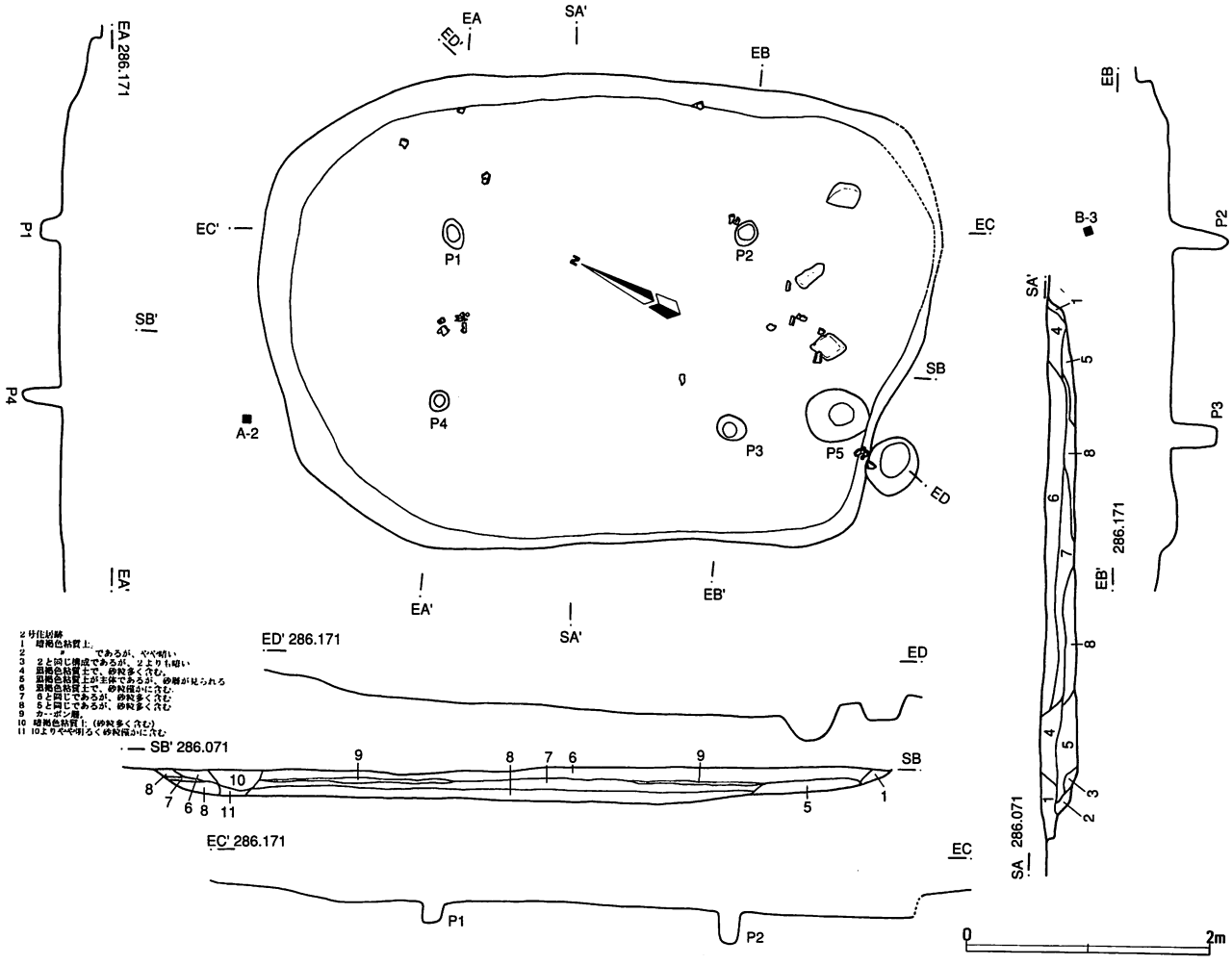
#### 第５号住居跡（第８図）

Ｆ－７、Ｇ－６・７Ｇに位置する。住居跡南側が調査区域外にのび、正確な形状規模は不明であるが、長辺4.96m、短辺4.1mの隅丸長方形を呈すると思われる。本住居跡の壁際には周溝が見られ、幅0.4～1.10m、深さ0.1m程度を測る。床面は、比較的安定した面が検出されているが、カマドなどの施設は検出されていない。

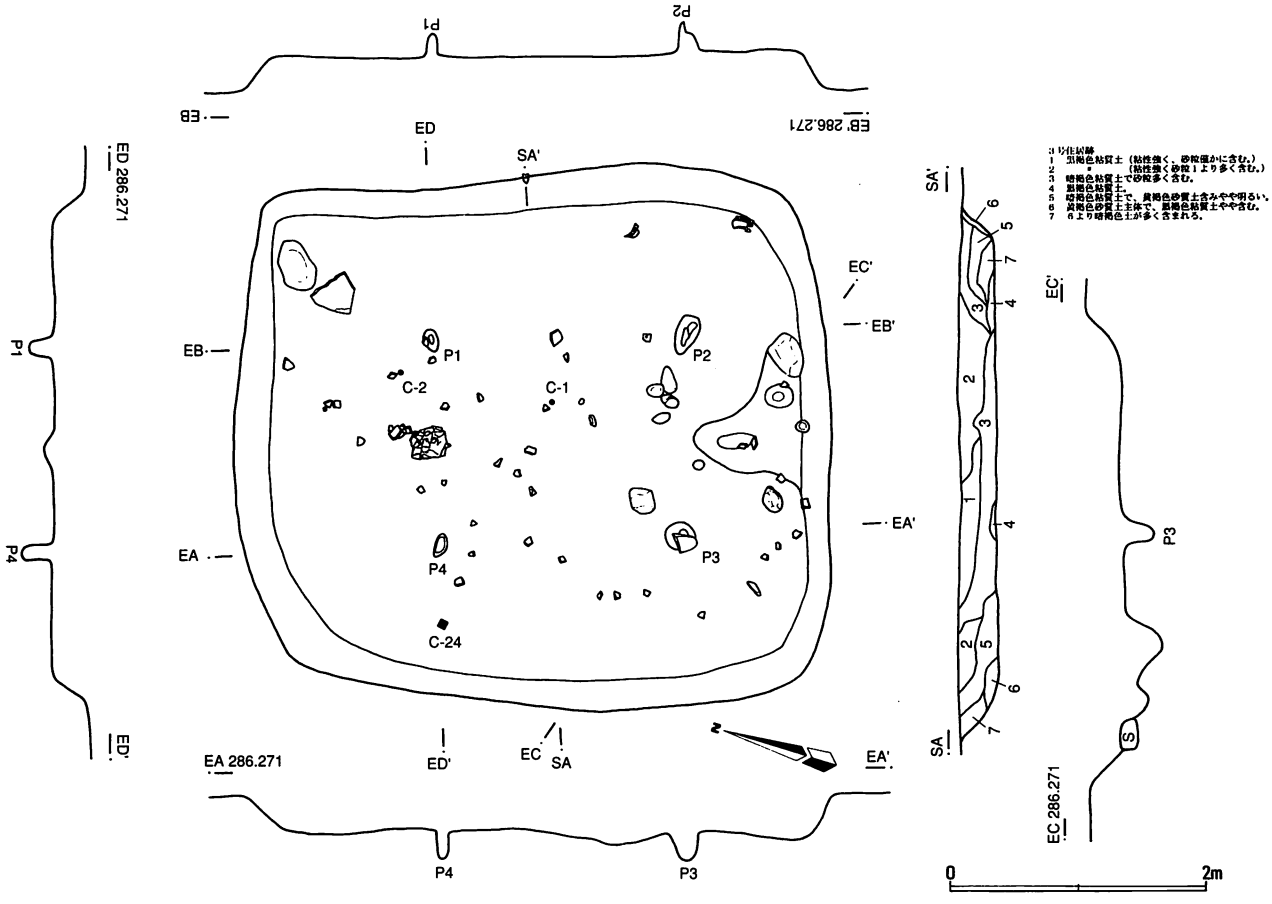
本住居跡から、須恵器高台付坏、甕、土師器坏（第12図15～20）や、石錘（第23図11～15）が、住居跡南壁際にまとまって出土している。また、須恵器胴部破片を用いた、転用硯（第24図９）が出土している。



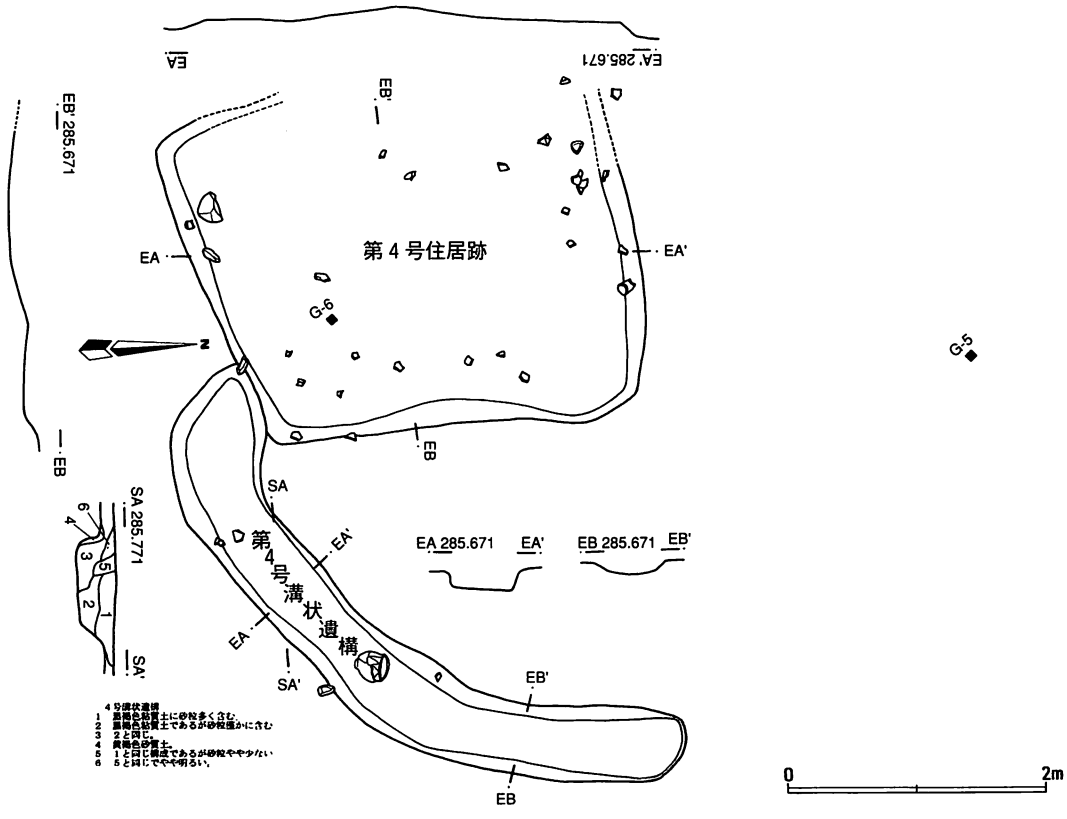

第４図　第１号住居跡平面図



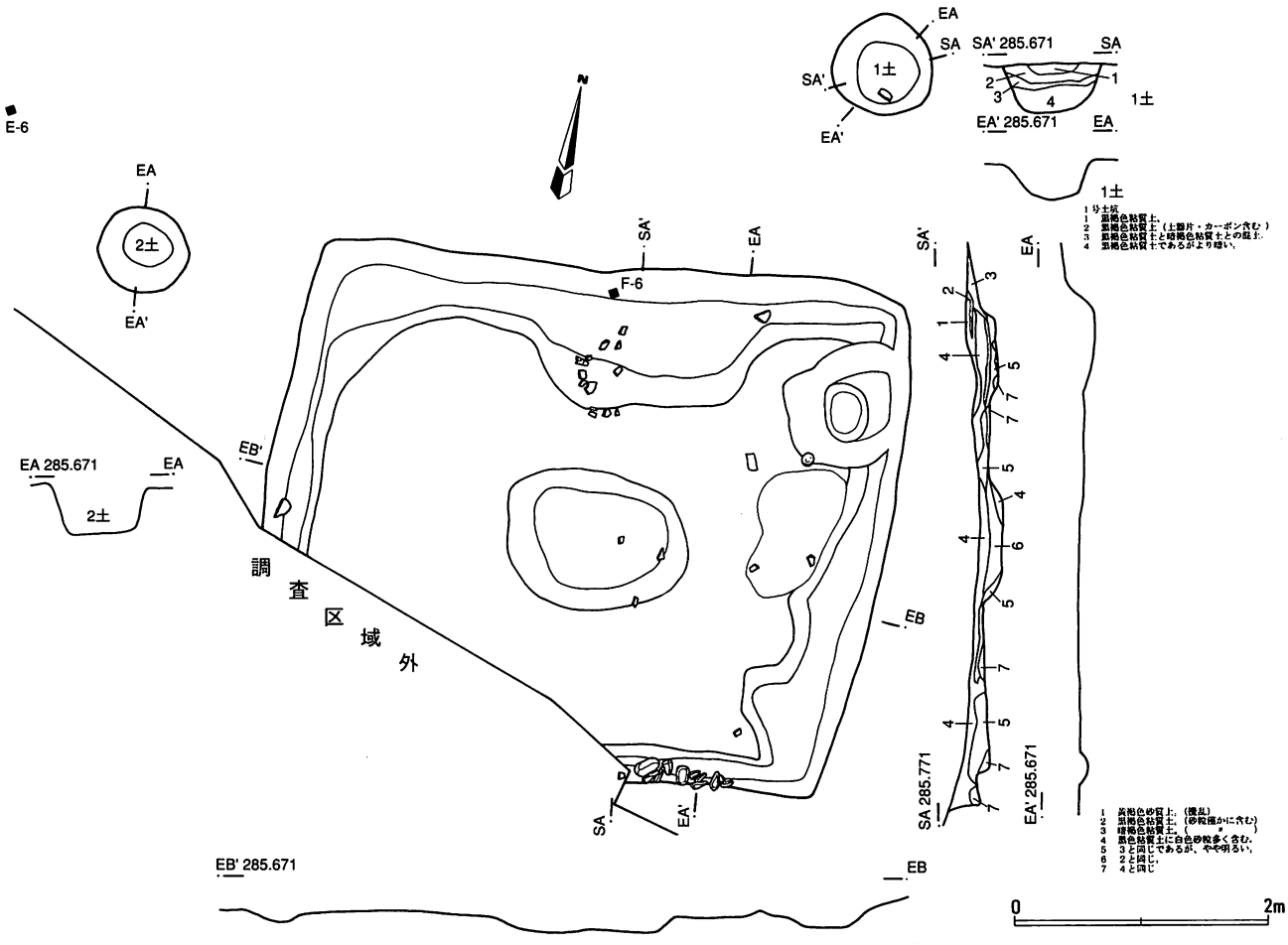

第５図　第２号住居跡平面図




第6図　第3号住居跡平面図




第7図　第4号住居跡・第4号溝状遺溝平面図




第８図　第５号住居跡・第１・２号土坑平面図

２　土坑

本区から、土坑は10基検出されている。土坑覆土中からは、奈良時代の土師器・須恵器坏や、弥生時代の壷形土器など出土している。

第１号土坑（第８図）

Ｇ－６Ｇに位置する。直径0.8m程の正円形を呈し、深さ0.33mを測る。断面形は、すり鉢状を呈し、底面は丸底になる。壁は、緩やかに立ち上がり、覆土は、わずかにカーボン含み、黒褐色粘質土が主体となる。
出土遺物は、検出できなかった。

第２号土坑（第８図）

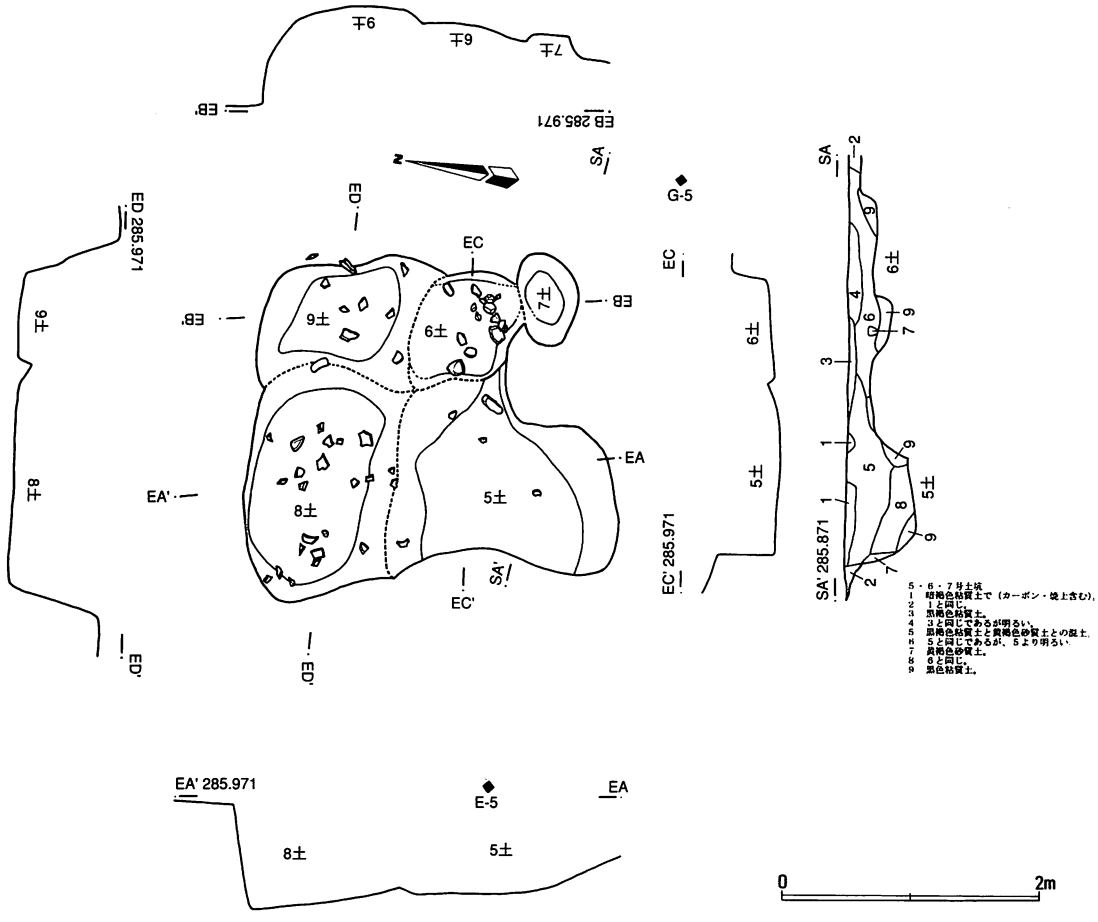
Ｆ－７Ｇに位置する。直径0.67mの正円形を呈し、深さ0.4mを測る。断面形は鍋形を呈し、底面は平底になる。壁高は、緩やかに立ち上がる。出土遺物は、検出できなかった。

第３号土坑（第11図）

Ｇ－３Ｇに位置する。第２号溝状遺構と重複しており、長径1.08m、短径0.84mのほぼ円形を呈し、深さ0.36mを測る。断面形は、鍋形を呈し、壁は北側において、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は、第２号溝状遺構と重複しているため、不明であるが、鍋形を呈するものと思われる。底面は、やや丸底を呈する。出土遺物は、確認できなかった。

第４号土坑（第11図）

Ｇ－３Ｇに位置する。第３号土坑同様、第２号溝状遺構と重複している。長径0.97m、短径0.85mの楕円形を呈し、深さ0.27mを測る。断面形は、台形状を呈し、底面は平底形になる。壁は、ほぼ直角に立ち上がる。出土遺物は、検出されていない。




第９図　第５～９号土坑平面図

第５号土坑（第９図）

Ｇ－５・６Ｇに位置する。第６・８・９号土坑と重複しており、正確な規模は不明であるが、長径1.85m、短径1.00mの不定形を呈し、深さ0.73mを測る。土坑西側はほぼ垂直に立ち上がるが、南側においては、緩やかな立ち上がりが見える。本土坑からは、奈良時代の須恵器坏蓋・須恵器坏・土師器坏など出土している（第15図１～３）。

第６号土坑（第10図）

Ｇ－５Ｇに位置する。第５・７・９号土坑と重複しており、正確な規模は全く不明であり、底面だけが残存している状況である。長径1.10m、短径0.83mの不定形を呈し、深さ0.65mを測る。断面形は、重複しているため不明で、底面は丸底形を呈す。出土遺物は、全く見られなかった。

第７号土坑（第９図）

Ｇ－５Ｇに位置する。第６号土坑と重複している。長径0.73m、短径0.48mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面形は鍋形を呈し、底面は平底形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物の、検出はできなかった。

第８号土坑（第９図）

Ｇ－５Ｇに位置する。第５・６・９号土坑と重複しており、正確な規模は不明であるが、長径1.90m、短径1.15mの楕円形を呈し、深さ0.7mを測る。土坑北側は、ほぼ垂直に近い立ち上がり見える。断面形は鍋形を呈し、底面は平底形を呈する。古墳時代後期～奈良時代の須恵器坏、須恵器甕の破片が出土している（第15図４～14）。

第９号土坑（第９図）

Ｇ－５Ｇに位置する。第５・６・８号土坑と重複する。重複しているため、正確な規模は不明であるが、長径

1.2m、短径0.8mの不定形を呈する。断面形は、すり鉢状を呈すると思われ、深さ0.8mを測る。底面は、平底形を呈する。出土遺物は、弥生時代の壷形土器、古墳時代後期～奈良時代の須恵器甕の破片が出土している（第15図15～21）。

**第10号土坑（第10図）**

Ｈ・Ｉ－６Ｇに位置する。第５号溝状遺構と重複する。長径0.7m、短径0.55mのほぼ円形を呈し、深さ0.13mを測る。出土遺物は、確認できなかった。

## 3　溝状遺構

本区から、溝状遺構は７条検出されている。

**第１号溝状遺構（第10図）**

Ｆ－２・３、Ｇ－３Ｇに位置する。ほぼ南北方向にのび、長さ5.0m、幅0.86～1.50m、深さ0.15mを測る。溝の南側において、立ち上がりが不明瞭な部分が見られる。本溝状遺構から、弥生時代の甕形土器破片や、奈良時代の須恵器高台付坏などが出土しているが、明確な時代・時期は不明である（第16図１～８）。

**第２号溝状遺構（第11図）**

Ｅ・Ｆ－４、Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ－３Ｇに位置する。調査区の東側中央部に東西方向にのびる溝で、長さ24.3m、幅0.65～0.95m、深さ0.20～0.40mを測る。断面形は、鍋形を呈し、底面は平底形を呈する。本遺構から、弥生時代の甕形土器や、奈良時代の須恵器高台付坏、土師器坏、長頸壷などが出土している（第16図９～17・19・20）。

**第３号溝状遺構（第10図）**

Ｈ・Ｉ－４Ｇに位置する。調査区東側の道路沿いに北東～南西方向に延び、北東プランが不明瞭である。長さ約6.0m、幅0.98～1.25m、深さ0.2～0.43mを測る。断面形は、鍋・浅鉢形を呈する。本遺構からは、弥生時代の高坏、甕形土器の破片が出土している（第17図21～28）。

**第４号溝状遺構（第７図）**

Ｈ－６・７Ｇに位置する。第４号住居跡の南東側コーナーと重複している。溝の北側プランが不明瞭であるが、長さ5.1m、幅0.55～0.75mを測り、深さ0.13～0.18mを測る。断面形は、鍋形もしくは、すり鉢形状を呈する。本溝から、甕形土器の完形などが出土している（第16図18、17図29～30）。

**第５号溝状遺構（第10図）**

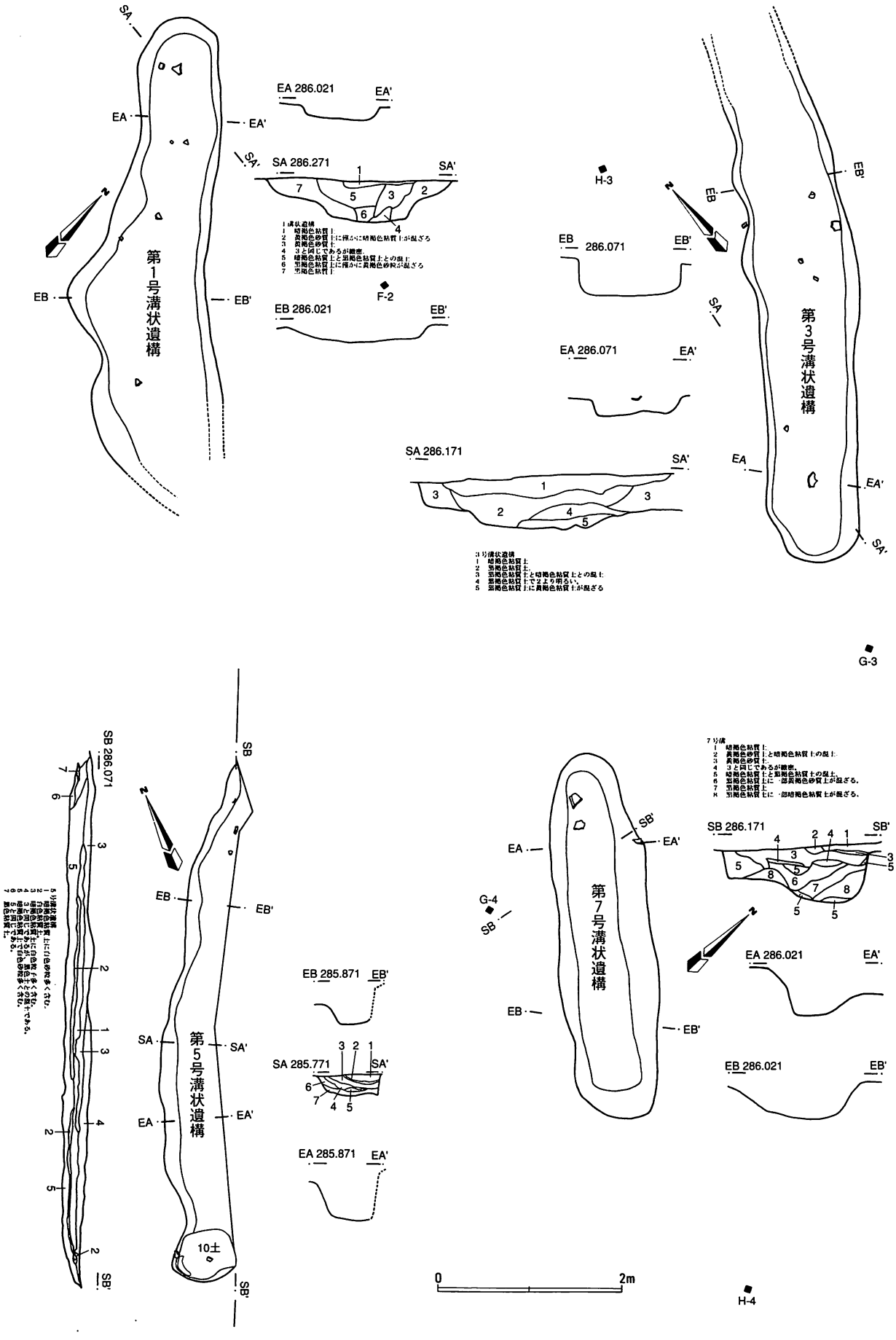
Ｈ－５・６、Ｉ－４・５・６Ｇに位置する。第10号土坑と重複しており、調査区東側の道路によって全体の形状・規模は不明であるが、現存長5.1m、幅0.4～0.67m、深さ0.2～0.4mを測り、断面形はすり鉢形状を呈する。本遺構から、弥生時代の壷形・甕形土器などが出土している（第17図31～33・35）。

**第６号溝状遺構（第11図）**

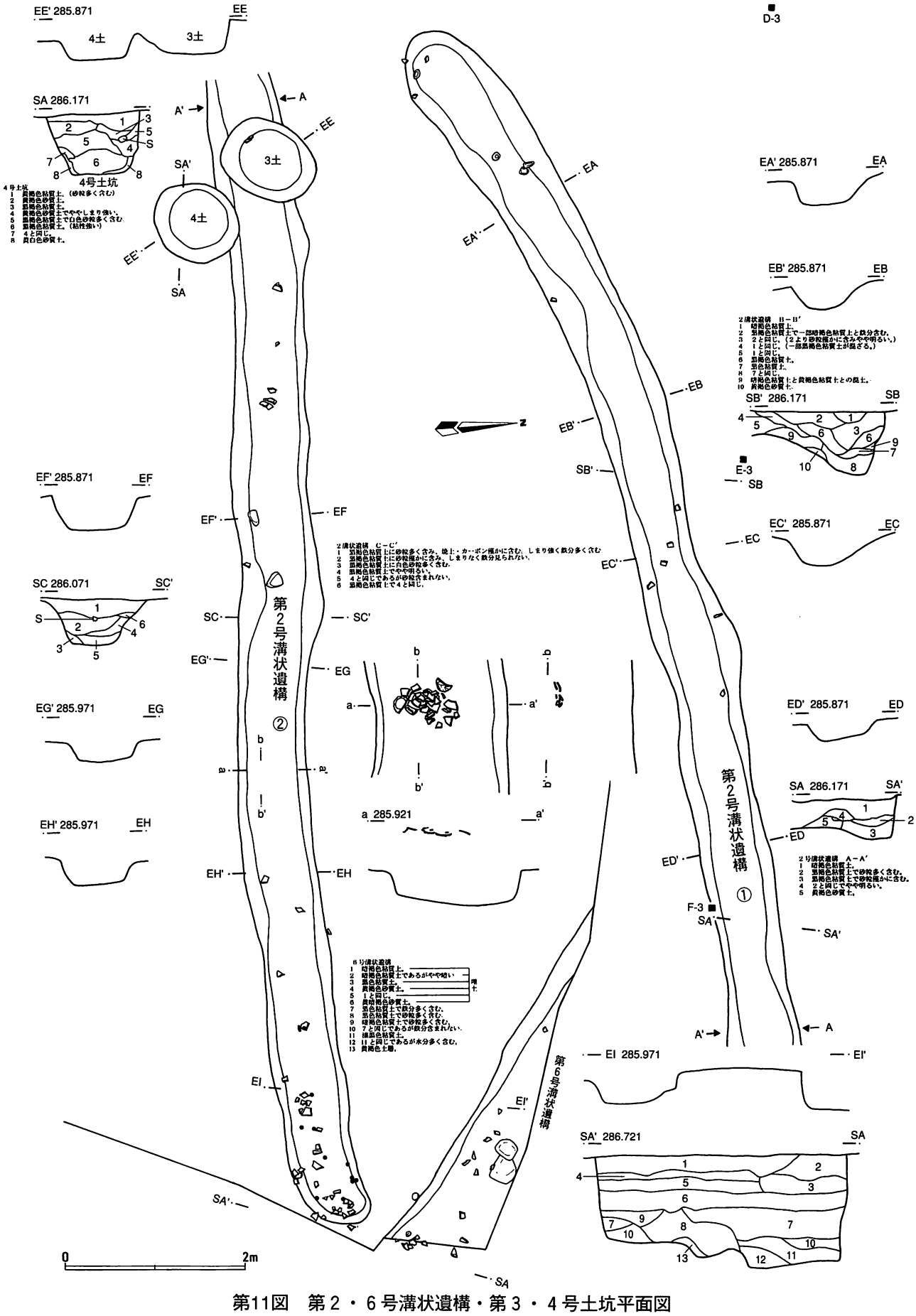
Ｈ・Ｉ－２、Ｊ－３Ｇに位置する。溝の北東側が調査区域外に延びるため、全体の形状規模は不明である。このため、ここでは溝状遺構として報告する。現存長4.25m、深さ0.4mを測る。断面形は鍋形状を呈する。
本遺構から、奈良時代の長頸壷、弥生時代の甕形土器の底部破片などが出土している（第17図34・36～39）。

**第７号溝状遺構（第10図）**

Ｇ－４、Ｈ－４・５Ｇに位置する。南東側～北西側に延びる長さ4.0m、幅0.9～1.1m、深さ0.4～0.53mを測り、断面形はすり鉢形状を呈し、底面は丸底状を呈する。




第10図　第１・３・５・７号溝状遺構・第10号土坑平面図




第11図　第２・６号溝状遺構・第３・４号土坑平面図

## 第3節　遺　物

### 1　住居内出土土器

#### 第1号住居跡出土土器（第12図）

本住居跡からは、坏・甕などが出土している。

1　土師器坏口縁部破片。推定口径12.7cm を測る。器壁は薄く仕上げられ、器体部は半球形を呈し、胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。器面調整は、胴部外面下半及び内面撫で調整、外面下半にはヘラ削りがみられる。胎土は、赤色粒子・砂粒を含み緻密。色調は、赤褐色を呈する。2　土師器坏底部破片。推定底径7.5cm。盤状を呈すると思われる坏の底部破片で、みこみ部はやや隆起している。胎土は、赤色粒子を含み緻密、色調は明褐色を呈する。3　土師器甕胴部破片。おそらく長胴形を呈する甕の頸部から胴部にかけての破片で、胴部外面には縦方向のハケ調整が施される。内面はほとんど剥離により不明であるものの頸部にわずかに横ハケ調整が見られる。胎土は、大粒の赤色粒子や砂粒を含み不良。色調は、内面暗褐色、外面赤褐色を呈する。4　土師器甕。推定口径27.6cm。口縁部が水平に大きく開き口縁部横撫で、頸部から口縁部にかけて横撫で調整、器体部外面に縦方向のヘラ削りが施される。色調は暗褐色、胎土は粗く砂粒多く含む。5　土師器甕口縁部破片。推定口径37.5cm。4同様頸部から口縁部にかけて横撫で調整、胴部外面には縦方向のヘラ削りが施される。胎土は粗く、砂粒多く含み粗い。色調は暗褐色を呈する。出土遺物から本住居跡は、8世紀第3四半期に位置づけられる。

#### 第4号住居跡出土土器（第12図）

本住居跡から、須恵器高台付坏、土師器坏、甕などが出土している。

6　須恵器高台付坏。推定口径14.6cm、器高3.7cm、底径12.2cm。内外面撫で調整。高台部は張り付け高台で、底部外面は、回転ヘラ削りが施される。色調は灰白色、胎土は、白色粒子含み緻密。7　須恵器坏口縁部破片。推定口径14.1cm。内外面撫で調整が施され、色調は灰褐色、胎土は緻密。8　灰釉壷口縁部。推定口径12.2cm。内外面灰釉が施される。色調は、暗緑色を呈する。9　土師器坏口縁部破片。推定口径18.0cm。胴部下半に稜を有する。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒含み緻密。10　土師器甕口縁部破片。推定口径19.2cm。口縁部内外面は、撫で調整が施される。11　土師器甕底部破片。推定底径6.2cm。内面にハケ調整が施される。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒、金雲母含みやや粗い。12　土師器甕口縁部破片。推定口径19.0cm。外面はハケ調整が施される。13・14は土師器甕口縁部破片で、いずれも底部に木葉痕が見られる。出土遺物から、8世紀第3四半期に位置づけられる。

#### 第5号住居跡出土土器（第12図）

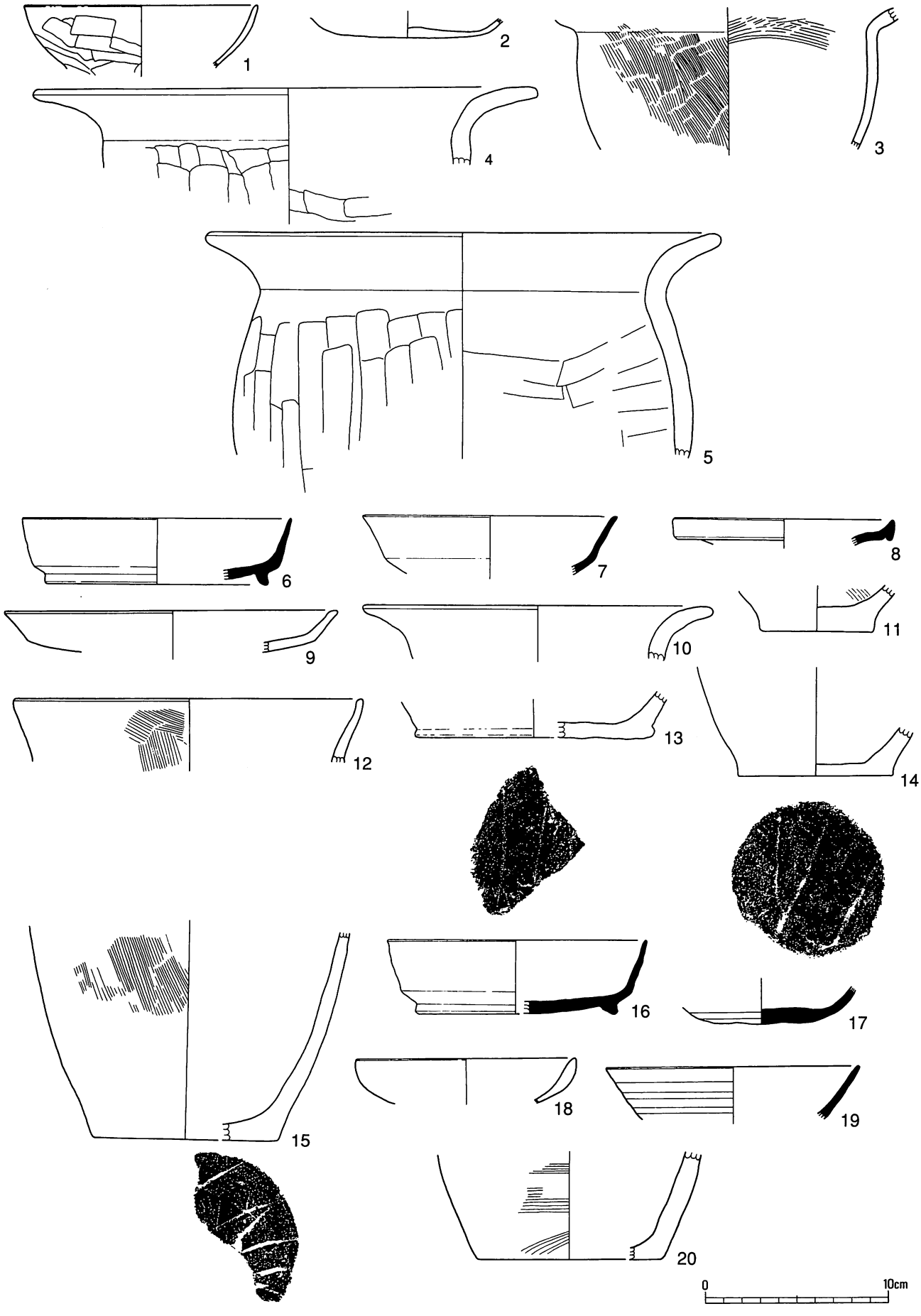
本住居跡から須恵器坏、土師器坏・甕、石錘などが出土しており、またおそらく須恵器甕の破片を用いたと考えられる、転用硯が出土している（第24図9）。

15　土師器甕口縁部破片。推定底径10.0cm。外面ハケ調整を施し、色調は、内面淡褐色、外面赤褐色を呈する。胎土は、砂粒多く含みやや良。底部には木葉痕がみられる。16　須恵器高台付坏。推定口径14.4cm、器高4.0cm、底径11.3cm。器体部内外面横撫で調整を施し、高台部は張り付け高台で、色調は、灰褐色を呈し胎土は緻密である。17　須恵器坏底部破片。推定底径5.0cm。内外面撫で調整を施し、胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は灰白色を呈する。18　土師器坏口縁部破片。推定口径12.3cm。内外面に撫で調整を施し、色調は淡褐色を呈する。胎土は緻密で、精選されている。19　土師器坏口縁部破片。推定口径14.0cm。おそらく盤状の坏の口縁部を呈すると思われる。20　土師器甕底部破片。推定底径10.2cm。器体部外面には横ハケ調整を施す。胎土は、砂粒多く含みやや粗い。色調は淡褐色を呈する。8世紀第4四半期に位置づけられる。

#### 第2号住居跡出土土器（第13図）

本住居跡から、甕形土器の口縁部破片や底部破片が確認されている。

1　甕形土器の口縁部破片。推定口径18.0cm。口縁部から頸部にかけて簾状文が3段施され、中段の簾状文は波状を呈する。胎土は、砂粒、金雲母含みやや粗く、色調は暗褐色を呈する。2　甕形土器の口縁部破片。口唇端部に刻み文、口縁部から頸部にかけて櫛描波状文、胴部にはハケ調整が施される。内面には磨きが丁寧に行われ




第12図　第１・４・５号住居跡出土土器（奈良）

る。色調は、黒褐色を呈し、胎土は砂粒、雲母含むが緻密である。3　甕形土器口縁部破片。口縁部から頸部にかけて単節の櫛描波状文が施される。4・5は甕形土器の口縁部破片で、頸部に簾状文が4には2段、5には3段施されている。6～8には櫛描波状文が施される。9も櫛描波状文であるが半截竹管状の工具で施文されている。10～14は甕形・壷形土器の底部破片で、10は推定底径6.9cm。外面にはハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。11は推定底径5.8cm。色調は淡褐色を呈し、底部には布目状の圧痕が見られる。12は推定底径5.7cmを測り、底部には布目状の圧痕が見られる。13には木葉痕が見られ、推定底径6.5cm。色調は内面は褐色、外面は暗褐色を呈する。14は推定底径9.0cm。底部には布目の圧痕が見られる。本住居跡は出土遺物から弥生時代後期中頃に位置づけられる。

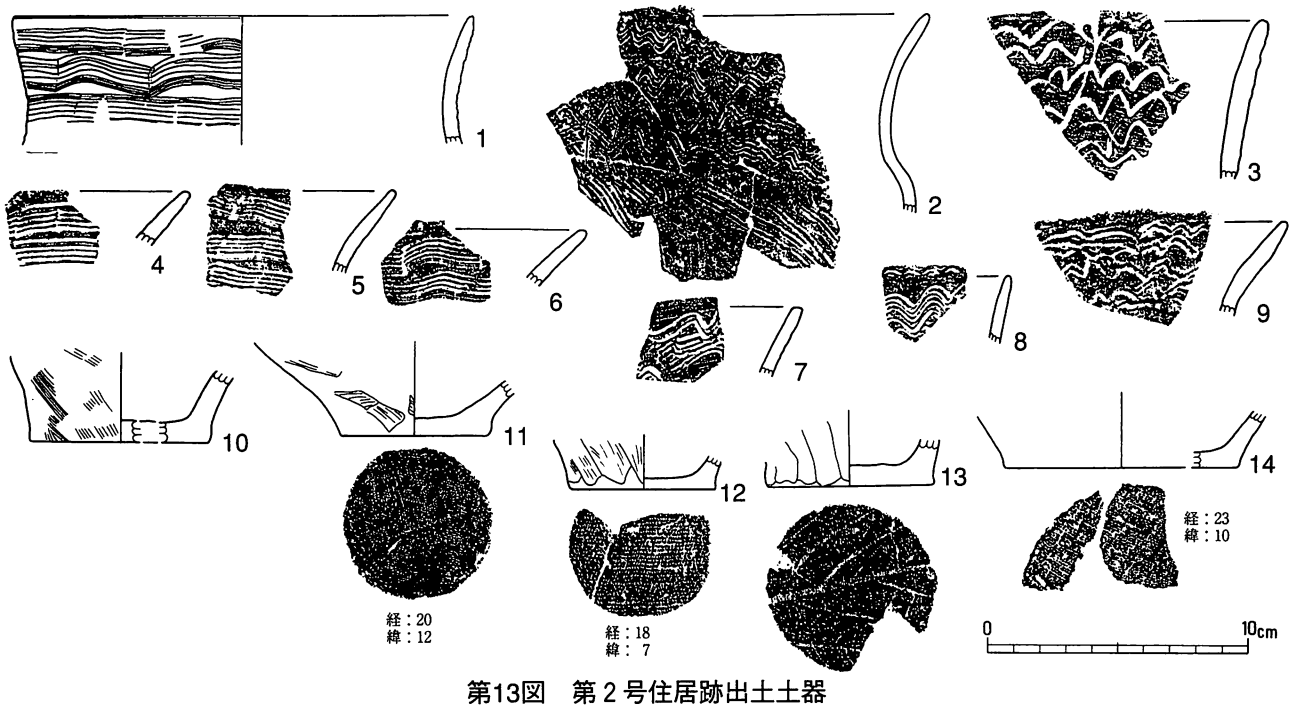
**第3号住居跡出土土器（第14図）**

本住居跡から、甕形・壷形土器や、磨製石鏃（第24図2・3）・凹み石（第22図3・5・6）なども出土している。15　小型甕形土器。推定口径13.1cm。口唇端部に刻み目文が施され、口縁部から頸部にかけて櫛描波状文が施され、その下部には簾状文がみられる。胴部下半には縦方向にヘラ削りがみられる。内面には、ハケ調整後、丁寧な磨きがみられる。色調は、暗褐色を呈し、胎土は砂粒、金雲母含み緻密である。16　甕形土器。推定口径28.0cm。口縁部から胴部にかけて櫛描波状文が施される。胴部下半にはハケ調整、また、胴部に円形貼付文が付く。色調は、明褐色を呈し、胎土は砂粒多く含みやや粗い。17・18は甕形土器の口縁部破片で、17　推定口径17.0cm。口縁部から頸部にかけて櫛描波状文を施す。内面は、磨きが施される。色調は内面褐色、外面暗褐色を呈し、胎土は緻密である。18　推定口径17.0cm。17同様櫛描波状文を施す。推定口径19.1cm。胎土は砂粒多く含みやや粗い。色調は淡褐色を呈する。19～21は壷形土器の頸部破片で、いずれもヘラ描きによる有軸羽状文を施し、19・21には楕円貼付文が付される。22には簾状文がみられ、その下部に櫛描波状文が施される。23・24は壷形土器の胴部破片で櫛描波状文が頸部から胴部上半に付され、円形貼付文を施し、貼付文を基点とし櫛描波状文とハケ調整の文様体を区画する。25～27は甕及び壷の底部破片で、27には布目の圧痕が施される。本住居跡も出土遺物から、弥生時代後期中頃に位置づけられる。

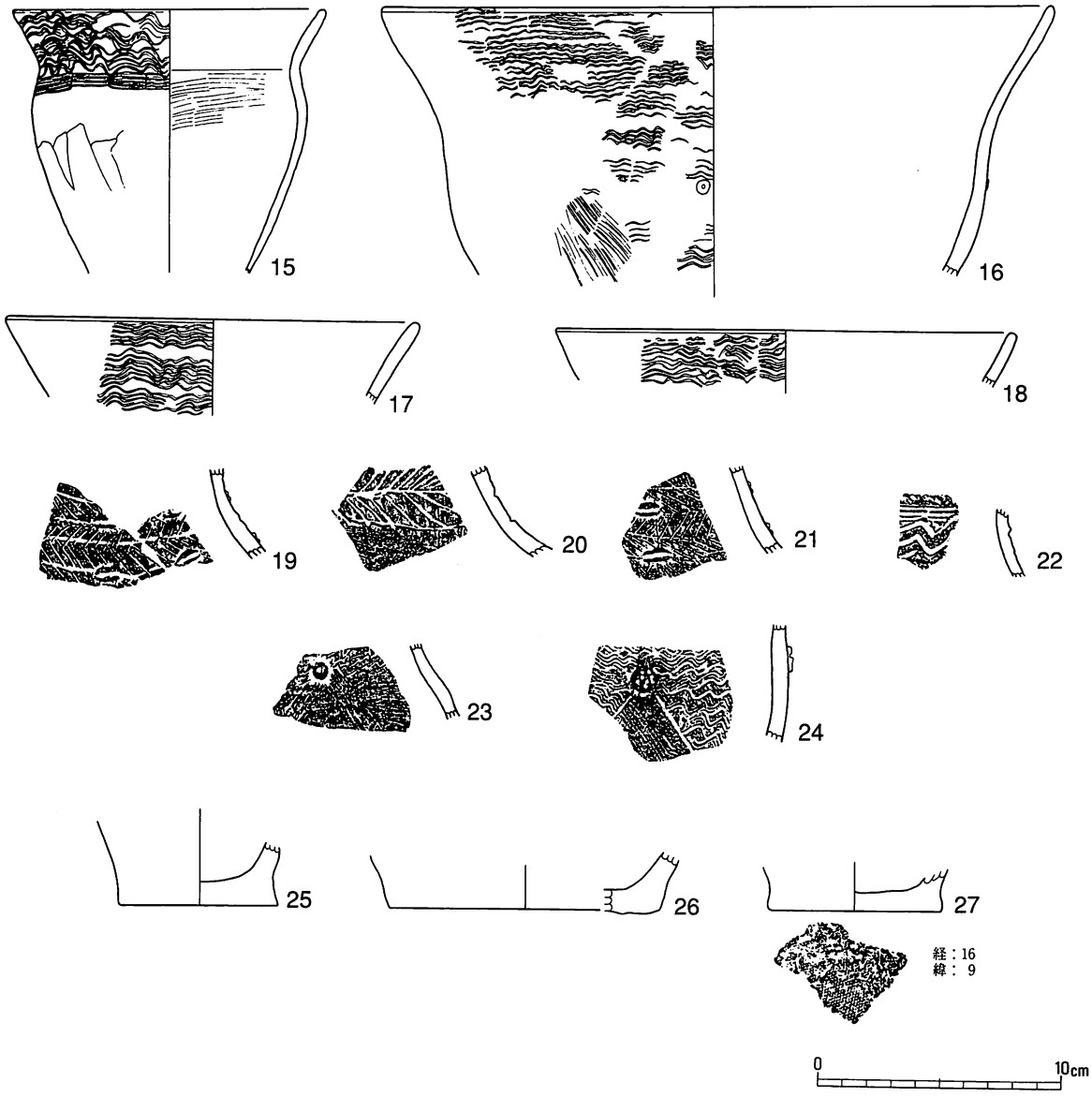
**2　土坑内出土土器（第15図）**

本遺跡の土坑から出土した主な土器を図示した。

1　第5号土坑出土。須恵器坏蓋破片。推定口径16.8cm。器体部内外面撫で調整が施される。胎土は緻密で精選されている。色調は灰白色を呈する。2　第5号土坑出土須恵器坏口縁部破片。推定口径21.0cm。内外面撫で調整が施される。胎土は緻密で、精選されている。色調は灰白色を呈する。3　第5号土坑出土土師器坏。推定口径15.1cm、器高3.2cm、底径10.0cm。おそらく盤状を呈するものと考えられる。内外面撫で調整が施される。色調は赤褐色を呈し、胎土は赤色粒子、砂粒含むが緻密。4　第8号土坑出土須恵器坏口縁部破片。推定口径16.1cm。内外面撫で調整を施し、色調は灰白色を呈する。胎土は緻密で、白色砂粒含む。5　第8号土坑出土須恵器口縁部破片。推定口径16.2cm。内外面撫で調整が施され、色調は灰白色を呈し、胎土は精選され緻密である。6　第8号土坑出土須恵器口縁部破片。推定口径17.2cm。内外面撫で調整を施し、胎土は緻密で精選されている。色調は、暗灰色を呈する。7　第8号土坑出土須恵器底部破片。推定底径15.0cm。胴部下半と底部外面に回転ヘラ削りが施される。底部に見られる高台は削り出しにより作り出されている。胎土は緻密で、色調は灰白色を呈する。8　第8号土坑出土土師器甕口縁部破片。推定口径24.8cm。口縁部内外面撫で調整、頸部から胴部にかけて、わずかではあるが縦方向のハケ調整が施される。胎土は、白色粒子（大）、赤色粒子含みやや粗い。色調は淡褐色を呈する。9　第8号土坑出土土師器甕口縁部破片。推定口径24.3cm。口縁部外面撫で調整、内面横ハケ調整が施される。胎土は砂粒・赤色粒子含みやや粗い。色調は、明褐色を呈する。10～14は第8号土坑出土の須恵器甕の破片で、10は頸部破片である。15　第9号土坑出土。土師器坏口縁部破片。口縁部から胴部にかけてやや内湾する器形である。推定口径19.0cm。内外面撫で調整、色調は明褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密である。16　第9号土坑出土。土師器甕口縁部破片。推定口径27.2cm。口唇端部がやや外側に折り返る。器面調整は内面に横

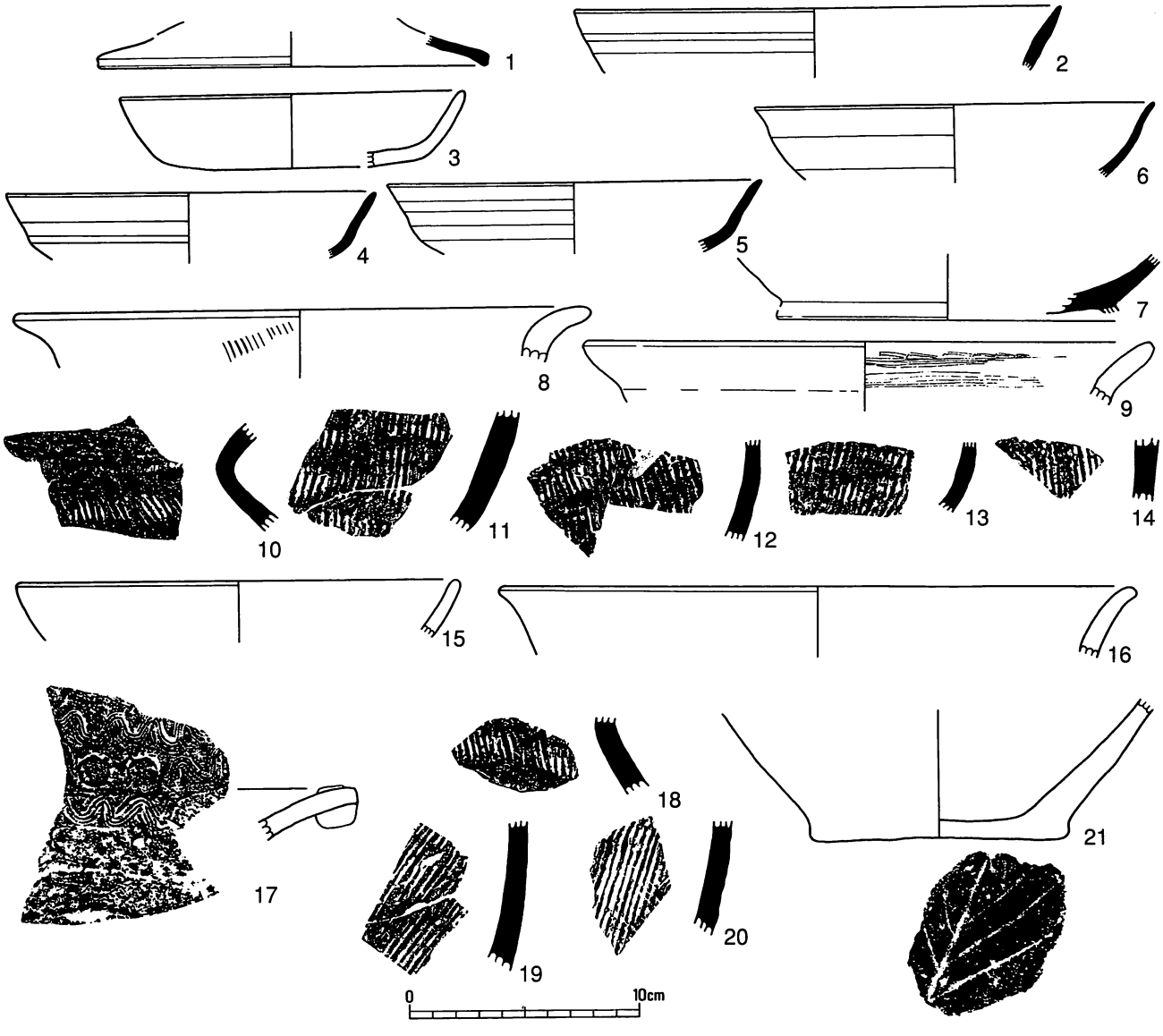



第13図　第２号住居跡出土土器




第14図　第３号住居跡出土土器

ハケ調整が施され、外面は撫で調整が見られる。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒、雲母含み緻密である。17　第9号土坑出土壷形土器口縁部破片。口縁部が折り返し口縁を呈し、内面に円形貼付文が見られる。また、口唇端部と口縁部内面には櫛描波状文を施す。胎土は緻密、色調は、明褐色を呈する。18～20は須恵器甕の胴部破片である。21　土師器甕底部。推定底径10.5cm。底部外面には木葉痕が見られる。色調は、明褐色を呈し、胎土は赤色粒子、雲母含む。




第15図　土坑出土土器

### 3　溝状遺構内出土土器（第16図・第17図）

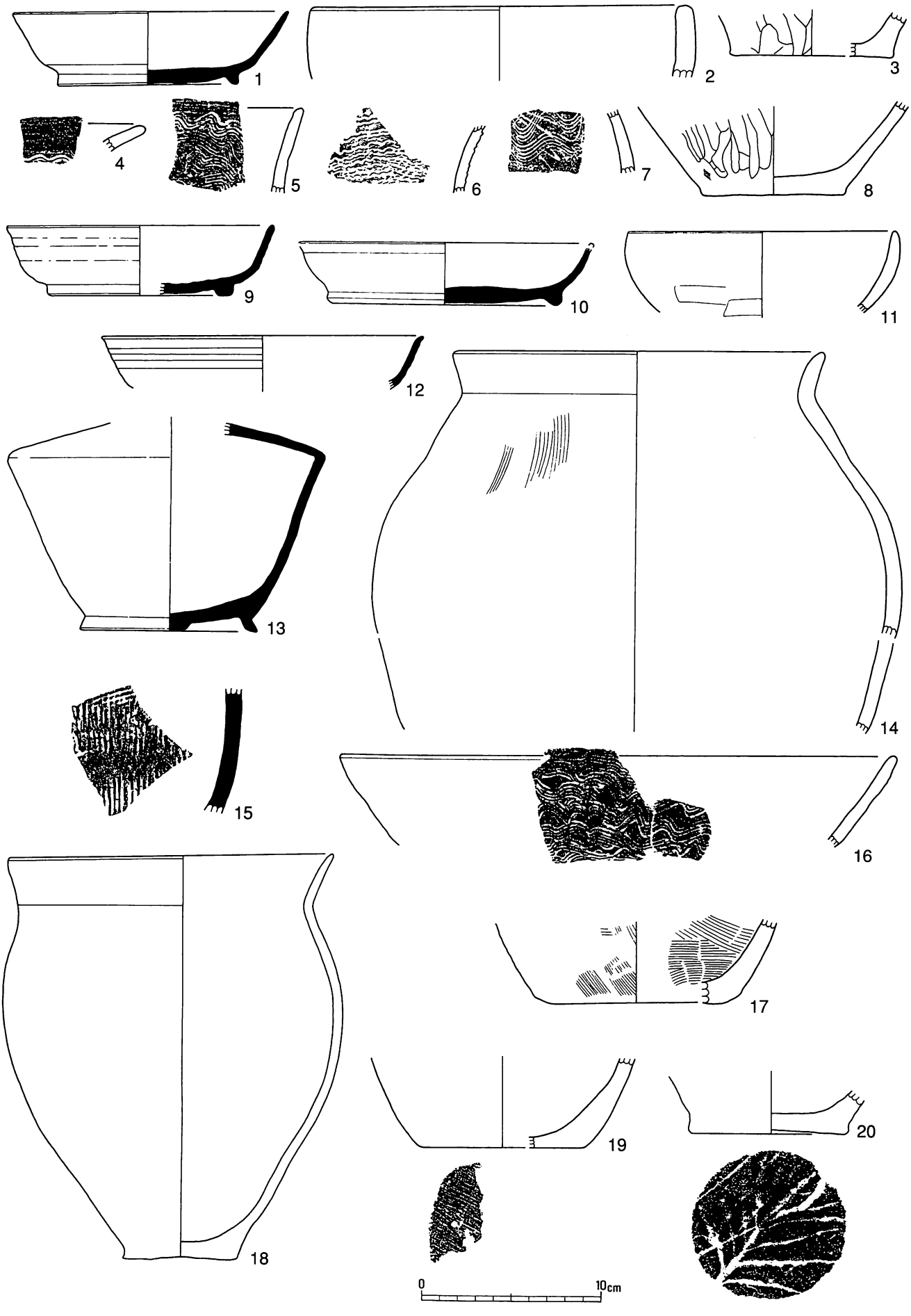
第16図１～８が第１号溝状遺構出土土器で、９～17・19・20が第２号溝状遺構出土土器である。18は第４号溝状遺構出土土器である。１　須恵器高台付坏。推定口径15.5cm、器高4.0cm、底径10.1cm。器面調整は、内外面撫で調整を施し、高台部は張り付け高台である。胎土は、砂粒含み緻密で、色調は灰暗褐色を呈する。２　器形不明の口縁部。推定口径21.0cm。胎土は、砂粒多く含み、色調は、褐色を呈する。３　甕底部破片。推定底径9.2cm。内外面底部付近は指頭による撫で調整が行われる。色調は、暗褐色を呈し、胎土は砂粒多く含むが緻密である。４～７は弥生時代後期の土器片で、口縁部及び胴部に櫛描波状文を施すものである。８　壷形土器の底部破片で、推定底径7.9cm。胴部外面にはハケ調整及びヘラ状工具による削りが緻密に施される。色調は、暗褐色を呈し、胎土は砂粒多く含むが緻密である。９　須恵器高台付坏。推定口径15.0cm、器高4.0cm、底径10.5cm、器体部内外面撫で調整を施し、胎土は緻密、色調は灰褐色を呈する。10　須恵器高台付坏。推定口径16.6cm、器高3.3cm、底径12.6cm。高台部は９同様張り付け高台で、器体部内外面撫で調整を施し、胎土は緻密、色調は灰褐色を呈する。11　土師器坏口縁部破片。推定口径14.7cm。胴部が内湾し、椀形を呈する。外面下半を撫で調整及びヘラ削りを施し、胎土は砂粒・雲母多く含み粗く、色調は明褐色を呈する。12　須恵器坏。推定口径18.1cm。口縁部及び器体部内外面横撫で調整が施される。色調は、灰褐色を呈する。13　高台付灰釉長頸壷。推定底径9.9cm。肩部より上面の頸部及び口縁部が欠損し、肩部が鋭角に屈曲し、肩部上面に自然釉が施される。高台部は張り付けによる高台部で、胴部は回転ヘラ削りにより器面調整が施される。胎土は緻密で、色調は灰褐色を呈する。14　土師器甕。推定口径20.7cm。頸部がくの字に屈曲し、口縁部の幅は比較的広くない。胴部は球胴を呈すると思われ、色調は淡褐色を呈し、胎土は赤色粒子わずかに含みやや粗い。15　須恵器甕胴部破片。内面に叩き目が見られる。16　甕口縁部破片。口縁部に櫛描波状文が施されるもので、弥生時代後期のものである。17　土師器甕底部破片。推定底径9.3cm。器体部内外面にハケ調整を施し、内面横ハケは緻密に施される。底部には木葉痕がみられる。色調は、内面褐色、外面暗褐色を呈する。胎土は赤色粒子、砂粒を含む。18　甕形土器。口径18.2cm、器高22.8cm、底径6.5cm。器壁は薄く、頸部がくの字に開く。胎土は赤色粒子、砂粒多く含みやや粗い。色調は、茶褐色を呈する。17・19・20は甕及び壷の底部破片で、19にはヘラ状の圧痕。20には木葉痕が見られる。

第17図21～28が第３号溝状遺構、29・30が第４号溝状遺構、31～33・35が第５号溝状遺構、34・36～39が第６号溝状遺構出土のものである。21　高坏坏部破片。推定口径25.3cm。口唇端部に刻み目を施し、頸部は緩やかに大きく開く。器体部外面には縦方向のハケ調整を施す。22～28は甕類の口縁部および頸部破片で、22・24・26・27・28は櫛描波状文が施されるもので、23・25はハケによる器面調整を施されるものである。29・30は甕及び、壷の底部破片。31　甕の口縁部破片。推定口径18.2cm。頸部に櫛描波状文を施す。32　半截竹管状の工具で口唇部を刺突するもので、33・35は櫛描波状文を施す口縁部と胴部に施すものである。34　ミニチュア状のもの。36　灰釉陶器の長頸壷。肩部には張りがみられず、緩やかに傾斜する。37～39は甕の底部破片。39には布目の圧痕が見られる。

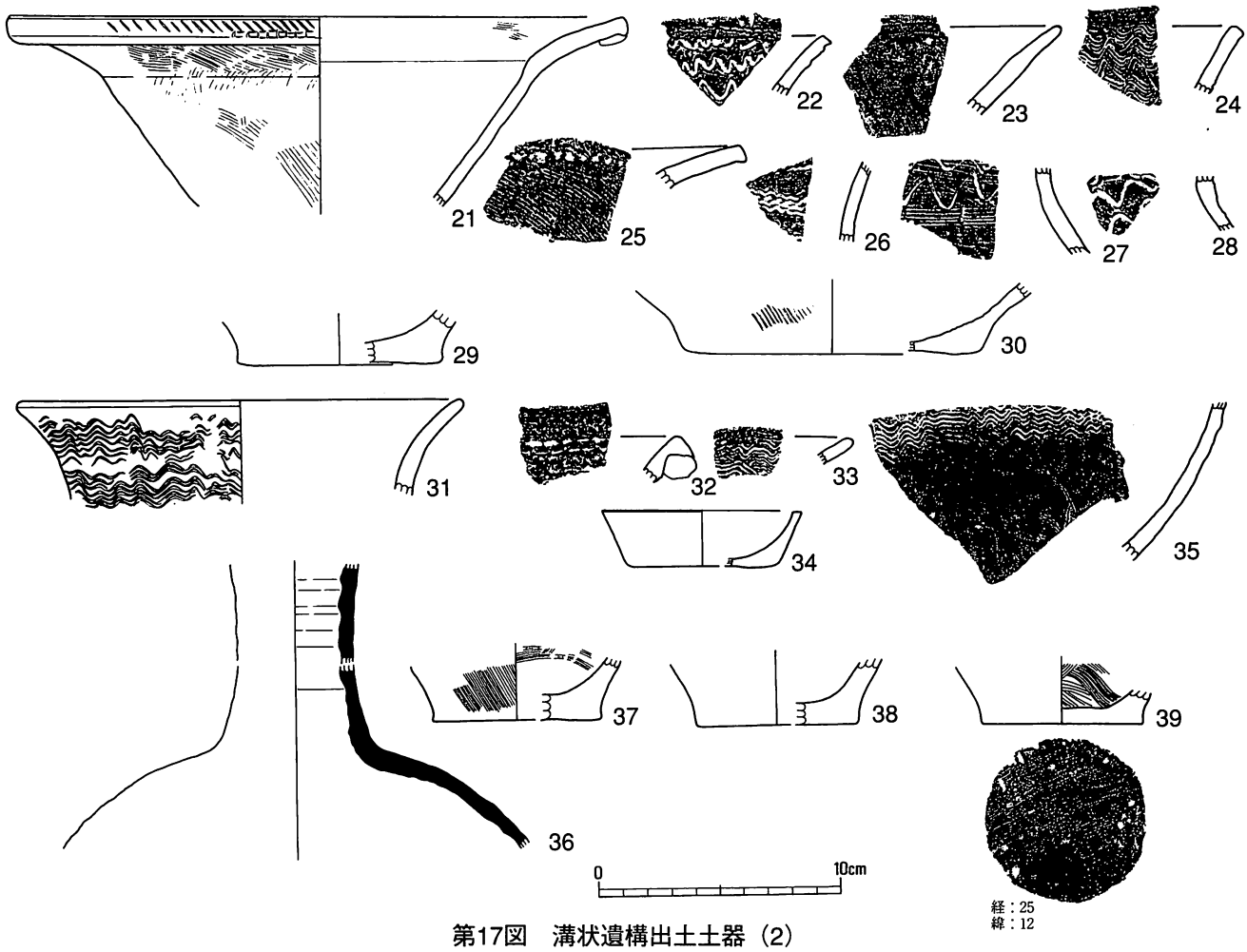
### 4　遺構外出土土器　縄文時代（第18図）

本遺跡から、出土した主な縄文時代の土器片を図示した。この中には、弥生時代、奈良時代の住居跡や溝状遺構などから出土したものも図示した。本遺跡から出土した縄文土器は、前期後半・中期初頭・後期初頭にかけてのものである。

１～６は、半截竹管による沈線文と、ボタン状貼付文が施されるもので、前期末諸磯ｂ式の沈線文系に位置づけられるもので、４は深鉢の底部破片、それ以外については胴部の小破片である。７～20は、前期末葉～中期初頭に位置づけられるもので、９は結節状沈線文、10は結節状浮線文を施す。11～16は、平行沈線文により、縦位、横位のモチーフがみられるものである。17～20は中期初頭に位置づけられるもので、平行沈線文による区画を施し、区画内に縦位、横位、羽状の文様を施す。21～31は中期末に位置づけられるもので、微隆起線文が、渦巻文・楕円文・「∪」・「∩」字状の区画を施し、区画内に縄文を施す。32～52は後期初頭に位置づけられるもの




第16図　溝状遺構出土土器（1）




第17図　溝状遺構出土土器（2）

で、32は口縁部に装飾される耳状の把手部で、沈線による文様を施す。33～35は口縁部がくの字状に内側へ折れ曲がり、口縁外面には沈線が巡る。36～39は頸部に２条の刺突を施す隆帯と「８の字」状貼付文が施される深鉢の口縁部破片。40・41は沈線を基本として文様を施す口縁部の破片。43は隆帯に円形の刺突が施されるもので、44～52は、太い沈線によって曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文を施すものである。

### 5　遺構外出土土器　弥生時代（第19図～第20図）

本遺跡から、出土した主な遺物を図示した。第26図14～77は拓本資料を掲載した。

1　壷形土器の上半部破片。推定口径15.5cm。口縁部が折り返り、頸部は細く、その頸部には縄文を施す。2　壷形土器の下半部。推定底径9.2cm。胴下半が下膨れの形態を持つ。底部には木葉痕が見られる。3　高坏の上半部。推定口径28.5cm。口縁端部は刺突文を施し、口縁部は「くの字」状に外反する。外反する口縁部外面には縦方向のハケ調整を施し、口縁部内面には縄文を施す。4～13はいずれも壷形・甕形土器の底部破片で、7～13には底部に、布目ないし木葉痕が見られる。14　口縁部に棒状貼付文を施すもの、15　折り返し口縁を呈し、口縁部には斜め方向のハケ調整が見られる。16も15同様口縁部外面にハケ調整を施す。17　大きく外反する口縁部を呈する壷形土器の破片で、口縁端部に隆帯を貼り付け、その上に爪形の刺突文を施す。口縁部外面には縄文が見られる。18　口縁端部内面に円形の刺突文を施すもの。19　波状による沈線が５条に施されるものである。20は比較的太い波状文を施すもので、21～24についても同様に太い波状文を施すものである。25～32について、太い櫛描波状文を施すものである。33～43は櫛描波状文が緻密に施されるが、やや不明瞭であり、34・36・39～41については口唇部に刻み文を施す。44・45は口縁部は無文で口唇部に櫛描波状文・刻み文を施し、口縁部または頸部に櫛描波状文を施す。46～53は壷及び甕の頸部破片で、上部に簾状文、下部に櫛描波状文を施すものである。54～64・66は胴部及び頸部に櫛描波状文が緻密に施される。65は胴部にハケ調整が施されるものである。67～81

は比較的太い櫛描波状文や波状文を施す頸部または胴部破片で、72～75にはヘラ描きの横方向や縦方向の直線文と綾杉文を組み合わせたもので、弥生時代後期前半の吉田式に位置づけられるものである。76・77は胴部に櫛描波状文と櫛描直線文を施し、ヘラによる斜線が左右交互に施され、76には円形貼付文が付けられる。77は斜線が左右交互に付される区画内に円形の刺突文を施す。

### 6　遺構外出土土器　奈良時代（第21図）

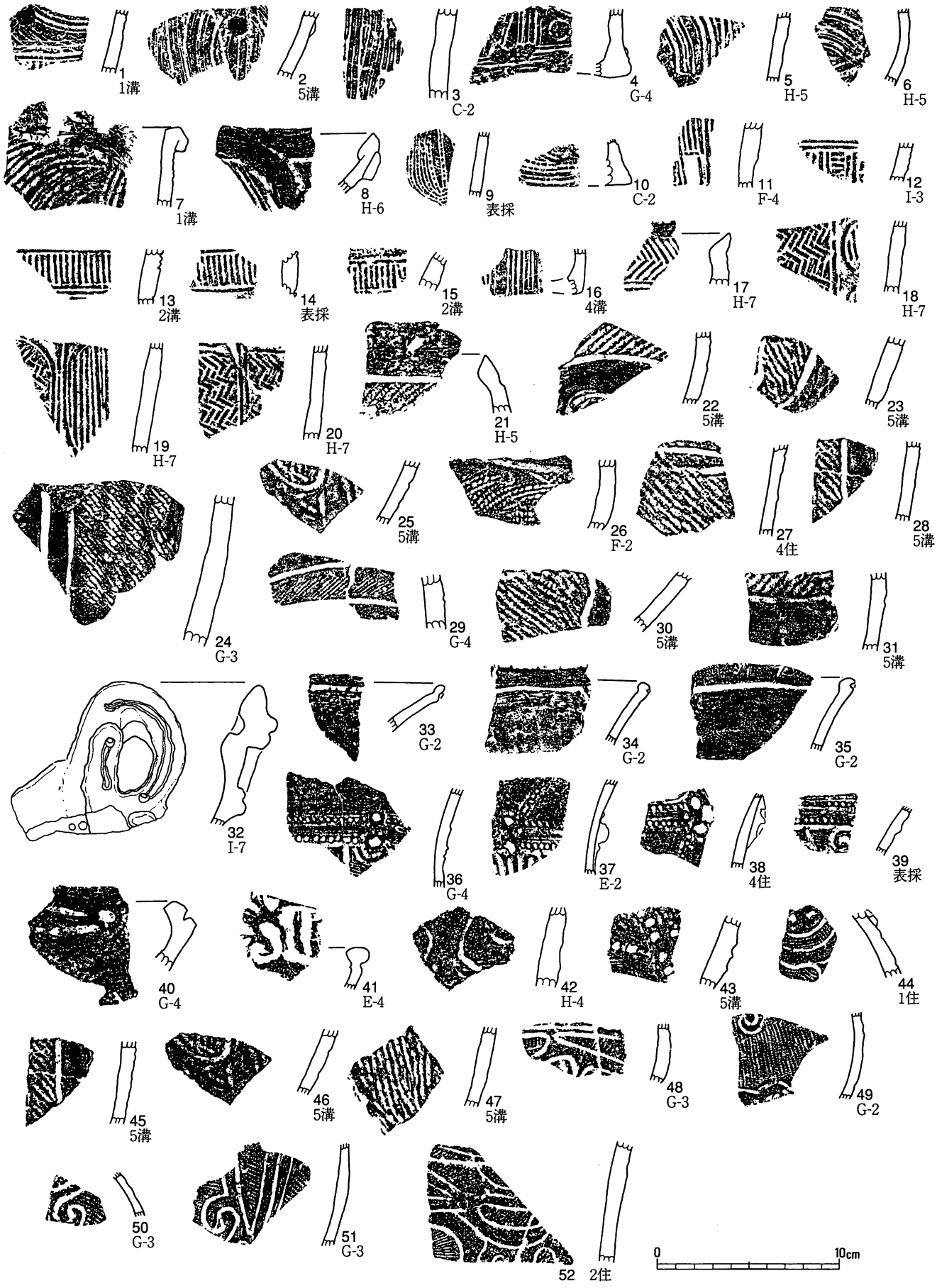
本遺跡から出土し、遺構に伴わない遺物の７点を図示した。

1　表面採集。土師器坏。推定口径21.0cm、器高5.8cm、推定底径9.0cm。盤状を呈する箱形の坏である。2　Ｆ－３Ｇ出土。推定口径21.0cm。3　Ｇ－３Ｇ出土。１・２に比べ身部が浅い土師器坏である。推定口径18.5cm。4　Ｇ－６Ｇ出土。同様の形態を持つ口縁部破片である。推定口径21.1cm。5　Ｇ－４Ｇ出土。須恵器高台付坏の口縁部破片で、推定口径18.2cm。6　表面採集。土師器甕口縁部破片で、推定口径20.8cm。7　Ｇ－４Ｇ出土。須恵器高台付坏底部破片で、推定底径12.9cm。

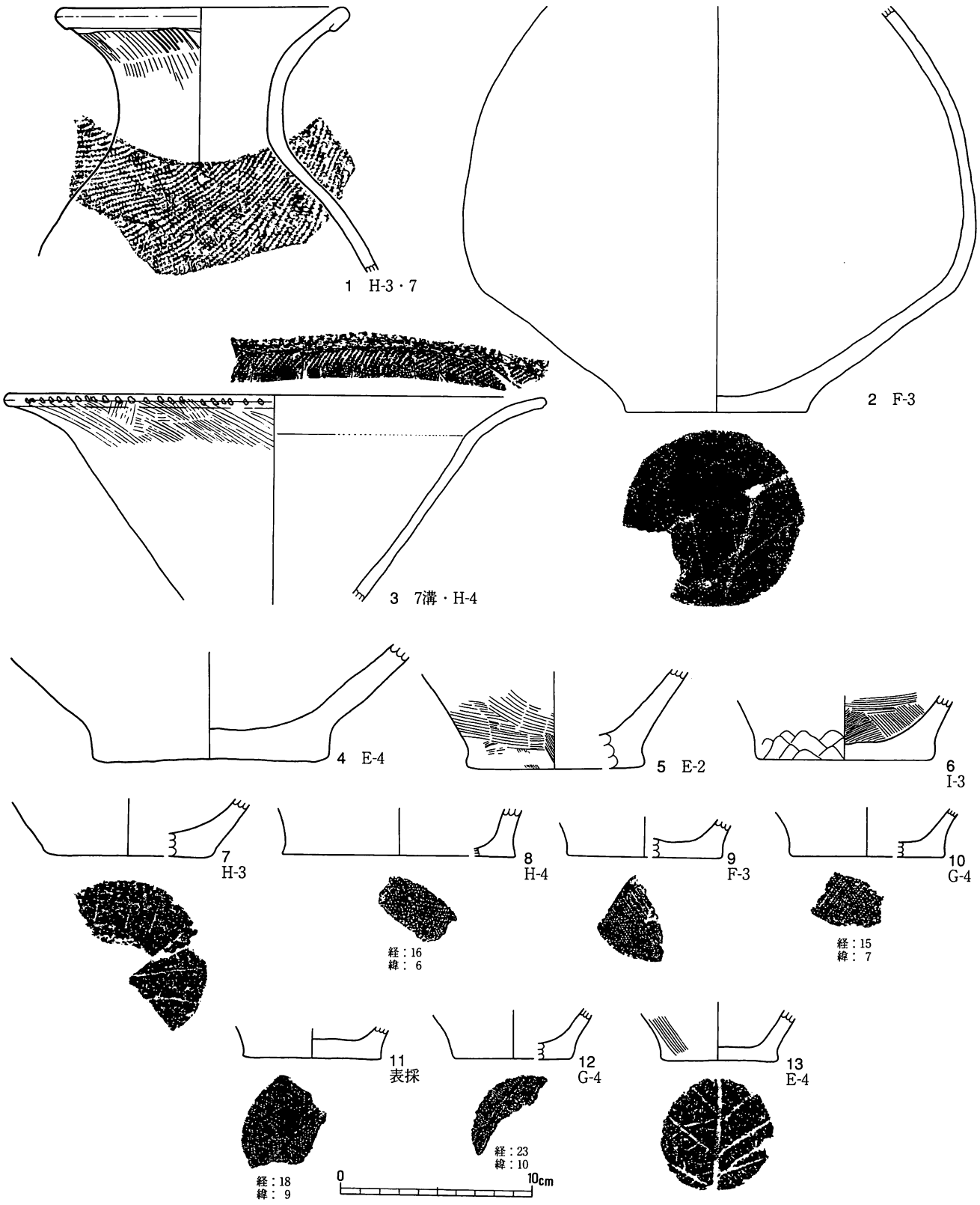
### 7　出土石器（第22・23図）

本遺跡から出土した縄文時代の石器、弥生時代の石器、奈良時代の石器を図示した。

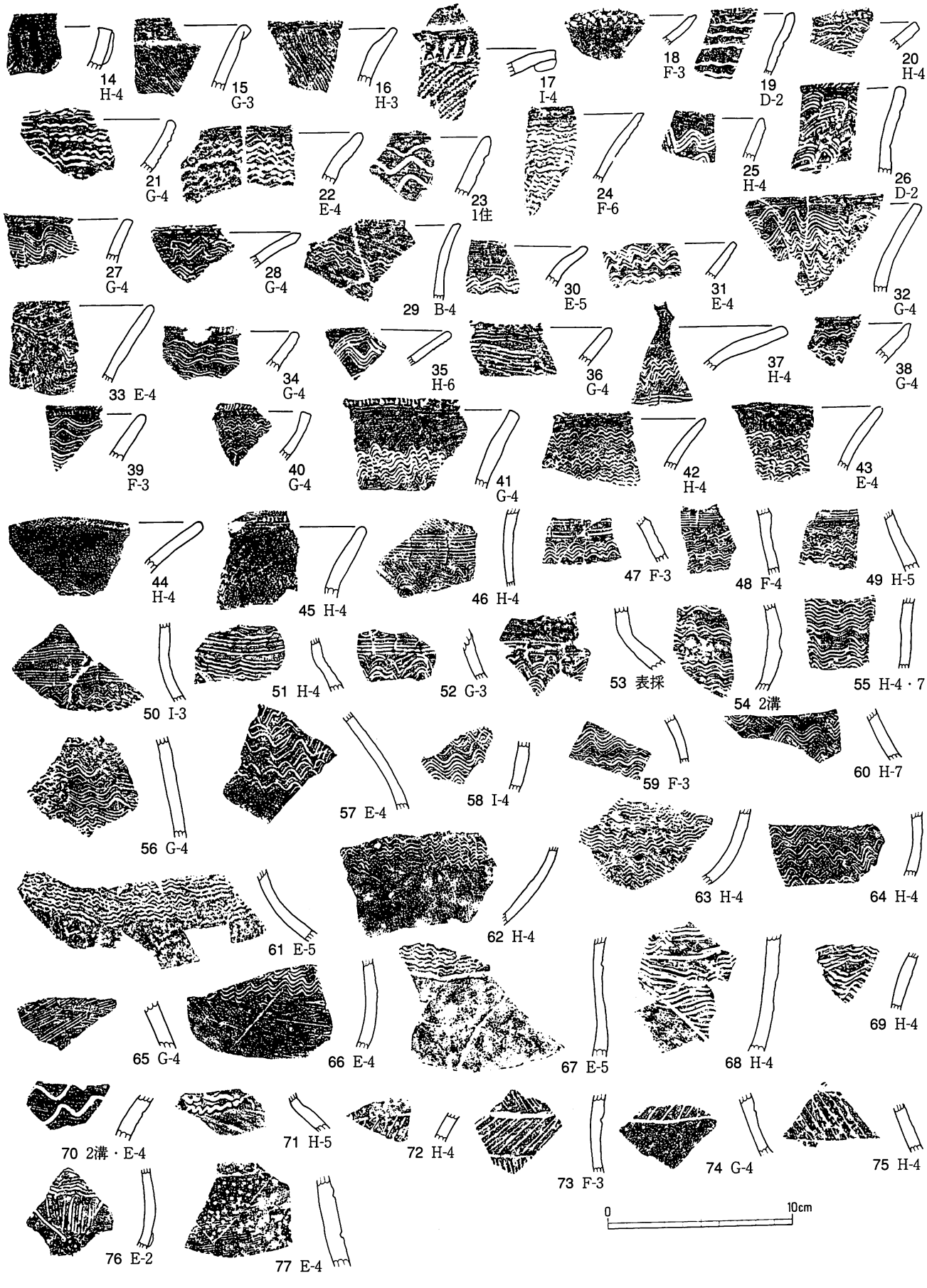
1　第３号住居跡出土。打製石斧。重さ72.2ｇを測り、粘板岩製。2　Ｅ－３Ｇ出土。打製石斧。現存長7.0cm、幅4.2cm、厚さ1.4cmを測る。重さ39.5ｇを測り、ホルンフェルス製。3　第３号住居跡出土。凹み石。一面だけに大きな凹みが見られる。重さ1,095ｇを測る。デイサイト製。4　Ｅ－４Ｇ出土。凹み石。一面に３カ所の凹みが見られる。安山岩製。重さ1,427ｇを測る。5　第３号住居跡出土。凹み石。３同様に、大きな凹みが一面だけ見られる。デイサイト製。重さ507ｇ。6　第３号住居跡出土。磨石。一面だけ磨面がみられ、その磨面に２カ所の凹みが見られる。両端部に、凹みが施される。デイサイト製。重さ1,213ｇを測る。7　第２号住居跡出土。磨面が一面にだけ認められる。デイサイト製。重さ6,800ｇ。8　第５号住居跡出土。磨石。一面使用で、安山岩製。重さ907ｇを測る。9　第２号溝状遺構出土。磨石で、一面使用。花崗岩製。重さ434ｇを測る。10
第５号住居跡出土。一面使用で、重さ394ｇを測る。花崗岩製。11～18はむしろ編み用の石錘と思われるもので、11　第３号住居跡出土。安山岩製、重さ341ｇ。12　第５号住居跡出土。結晶片岩、305ｇ。13　第５号住居跡出土。安山岩製、455ｇ。14　第５号住居跡出土。安山岩製、重さ659ｇ。15　第５号住居跡出土。安山岩製、重さ708ｇ。16　第２号溝状遺構出土。安山岩製、重さ460ｇ。17　Ｅ－５Ｇ出土。安山岩製、重さ719ｇ。18　Ｇ－３Ｇ出土。安山岩製、重さ246ｇ。



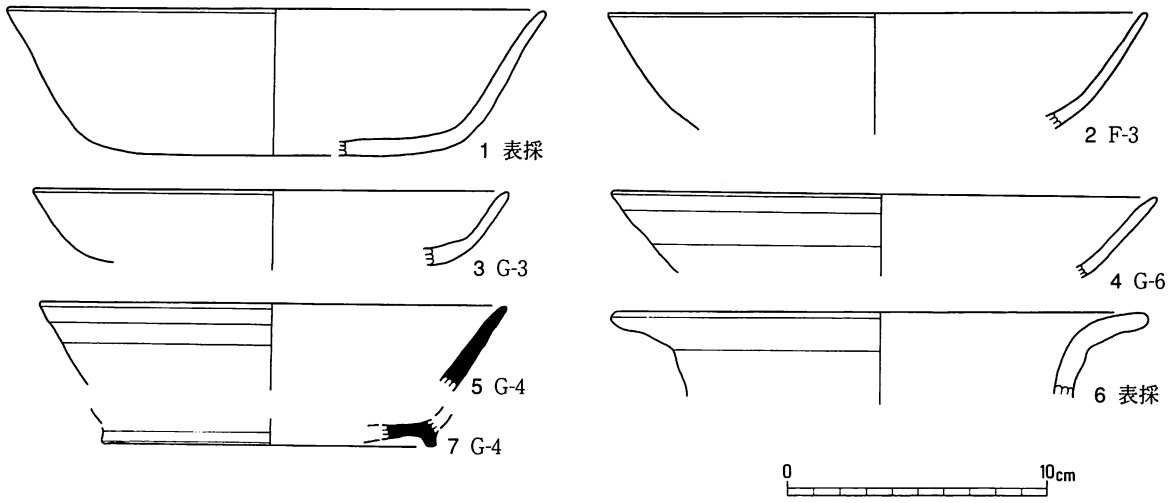

第18図　遺構外出土土器（縄文）




第19図　遺構外出土土器（弥生）（1）



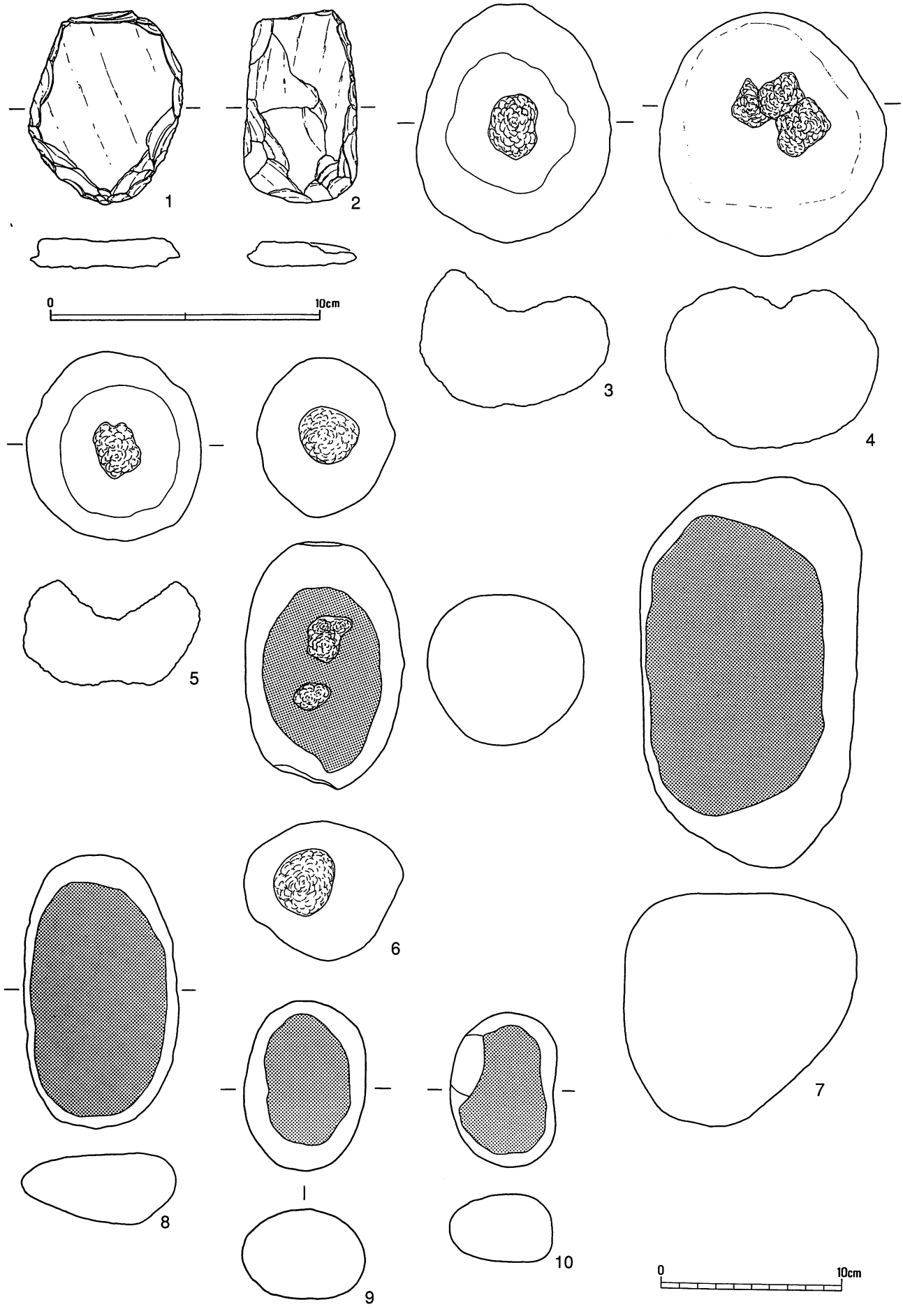

第20図　遺構外出土土器（弥生）（2）



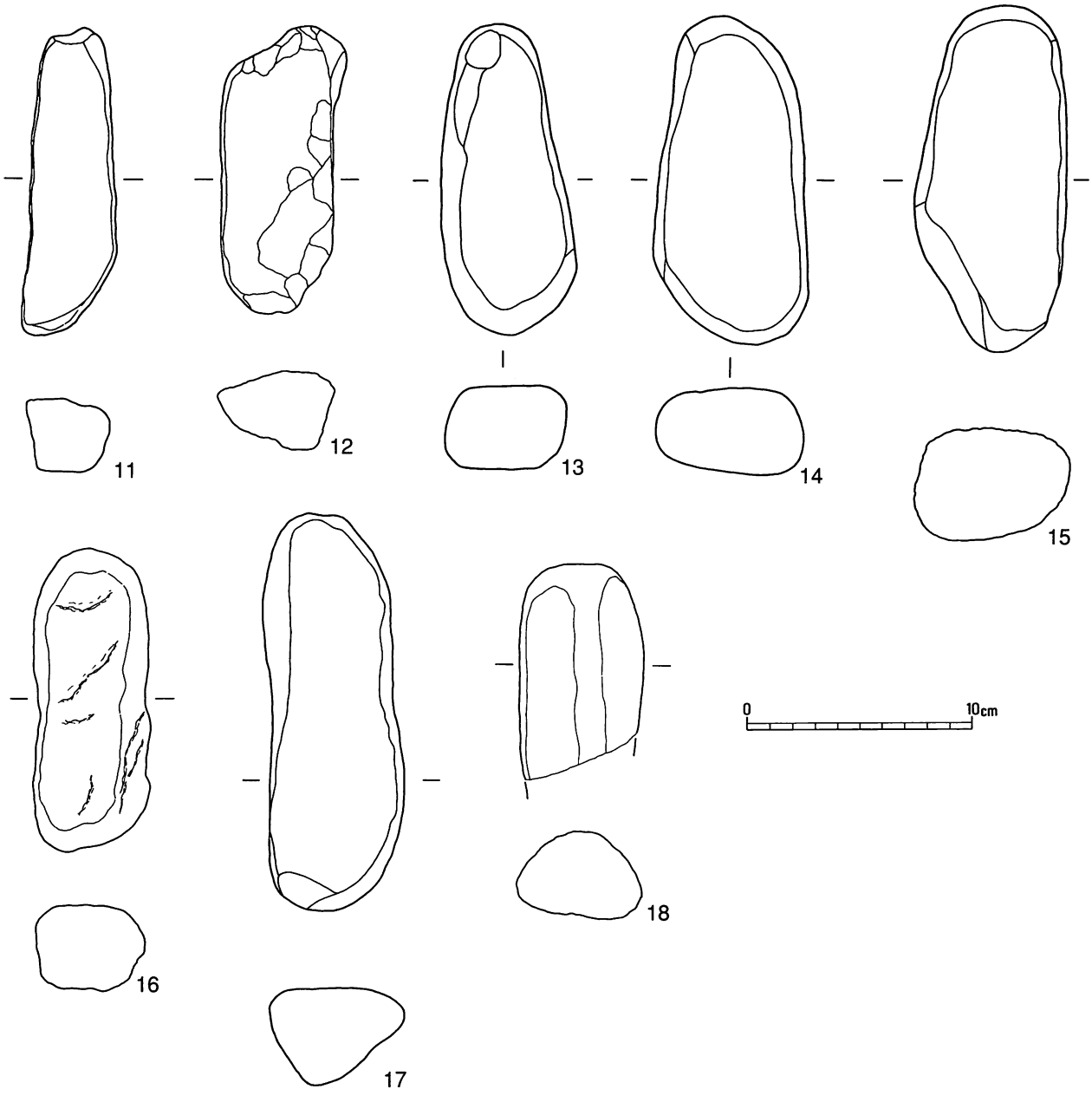

第21図　遺構外出土土器（奈良）

8　その他の出土遺物（第24図）

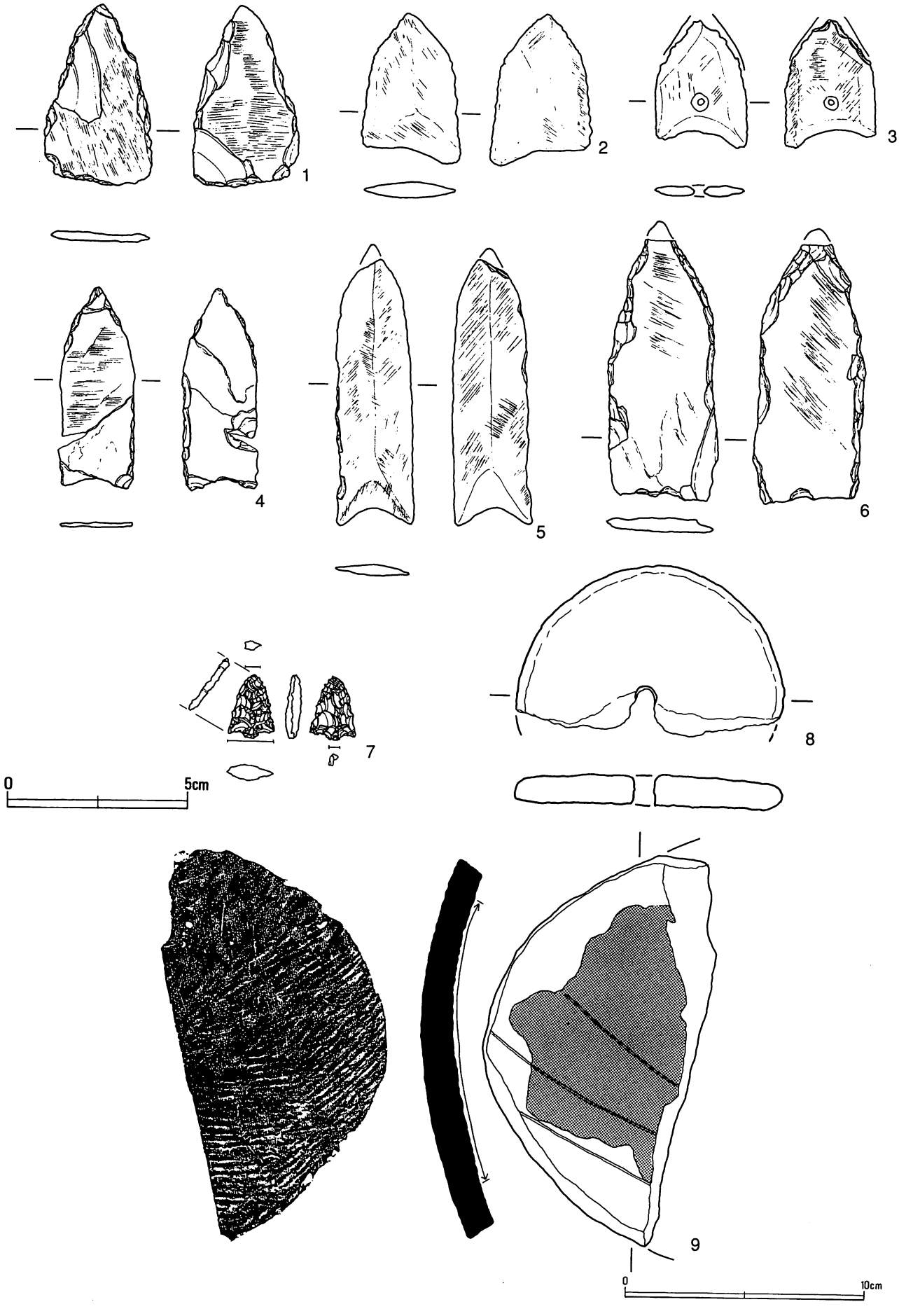
ここでは、本遺跡から出土した土製品や石製品を図示した。1～6が磨製石鏃、7が石鏃、8は土製紡錘車、9が硯（転用硯）である。1　第2号住居跡出土。磨製石鏃の未製品で、現存長5.0cm、幅3.0cm、厚さ0.3cmで、重さ5.9gを測る。制作時についた縦方向と横方向に非常に緻密な削痕がみられる。粘板岩製。2　第3号住居跡出土。磨製石鏃の完形品。長さ4.2cm、幅2.8cm、厚さ0.4cm、重さ4.7gを測る。粘板岩製。3　第3号住居跡出土。磨製石鏃のほぼ完形品で、基部には孔が施される。長さ3.6cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmを測り、重さ3.2gを測る。粘板岩製。4　第1号溝状遺構出土。現存長5.6cm、幅2.1cm、厚さ0.1cm、重さ4.4gを測る。石鏃の下部は折れた状況で検出されている。5　E－4G出土。現存長7.4cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ7.5gを測る。6　表面採集。長さ7.3cm、幅3.0cm、厚さ0.4cm、重さ14.6g。7　第2号溝状遺構出土。長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.45cm、重さ0.8gを測る。黒曜石製の有茎鏃で、背面左側縁に存在する折れ面は、基部調整の失敗によるものと思われる。8　第3号住居跡出土。1／2残存。推定径7.4cm、重さ29.2gを測る。9　第5号住居跡出土。転用硯（須恵器甕）。須恵器の甕の胴部破片を用いて、使用したと考えられるもので、おそらく円形を呈していたと考えられるが、半分欠損している。半円形を伴う外面は磨って形を整えたと考えられ、断面には明瞭に磨った痕跡が見られる。外面は、須恵器甕特有の叩き目がみられ、内面（硯面）は、墨を磨った痕跡が網掛けした部分に明瞭に見られる。また、部分的に墨と考えられる痕跡も認められる。




第22図　出土石器（1）




第23図　出土石器（2）



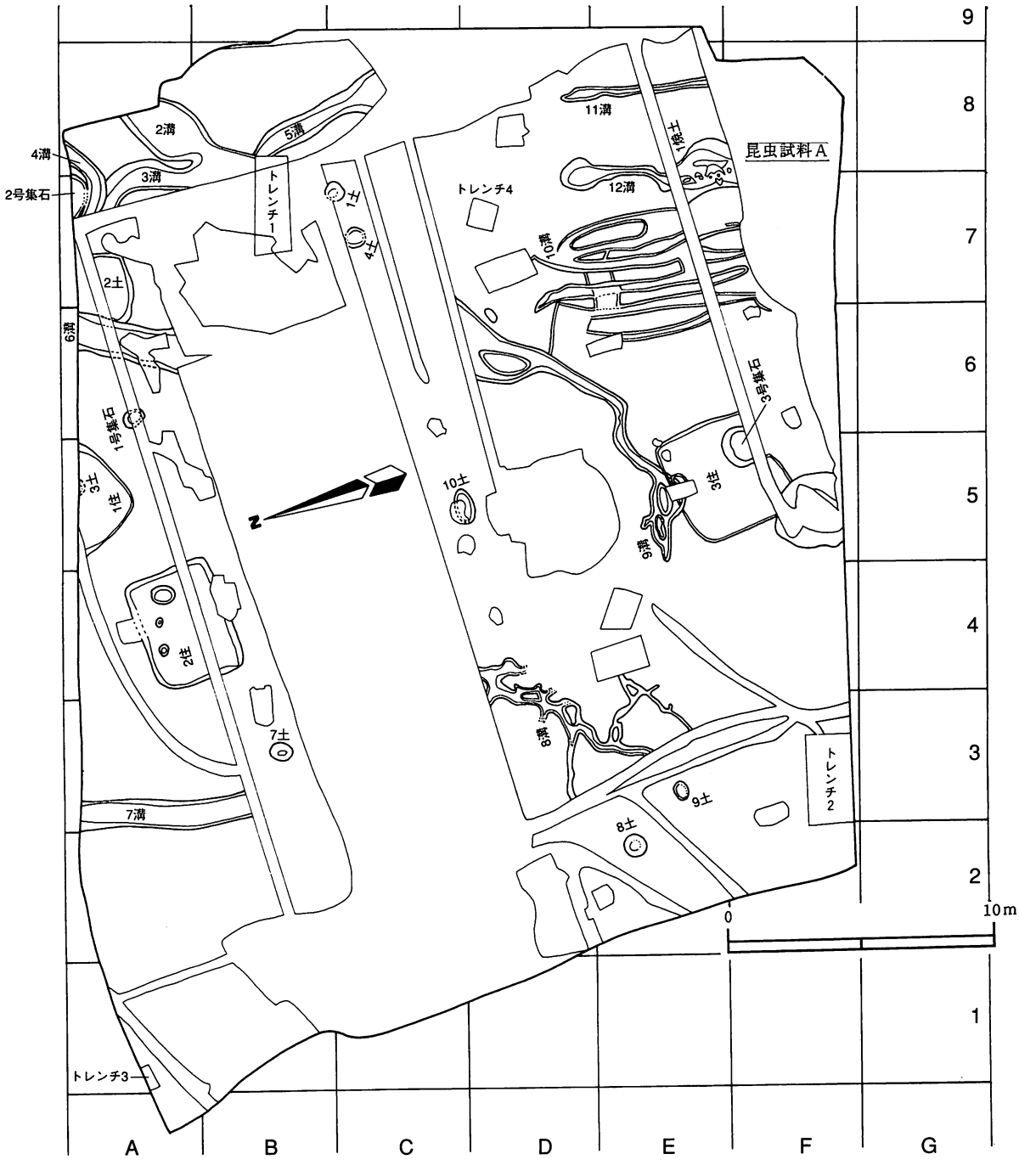

第24図　その他の出土遺物

# 第Ⅳ章　B区の調査

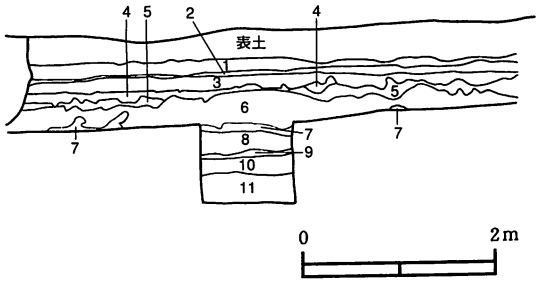
本区の調査は、排土の都合で北・南側の２度に分けて行われた。調査区の約３分の１は、旧住宅の基礎等により撹乱を受け、また、住宅建設以前の水田に伴う暗渠によっても、撹乱を受けている。調査区内には、土層観察のため、４箇所のトレンチを設定した。前年度調査したＣ区の土層との対応を確認したが、対応はみられない。基本層序（第26図）はトレンチ４（Ｄ－７Ｇ）におけるものである。１・２層は水田の苦土である。３～６層が遺物包含層である。調査中、降雨による湧水や、水はけの悪さのため、水中ポンプを使用した。

## 第１節　遺構

遺構は、弥生時代後期、古墳時代後期から奈良時代の住居跡３、溝状遺構11、集石３、土坑８が発見された。遺構の番号は、時期に関係なく発見された順に付けた。




第25図　Ｂ区全体図（Ｓ＝1/250）




| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 灰黄褐色土 | しまりあり | 粘性あり |
| 2 | 褐色土 | しまりあり | 粘性あり |
| 3 | 暗褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり |
| 4 | 黒褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり |
| 5 | 暗褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり |
| 6 | 黒褐色土 | しまりややあり | 粘性あり |
| 7 | 黒褐色土 | しまりあり | 粘性弱い |
| 8 | 褐色土 | しまりややあり | 粘性少ない |
| 9 | 灰黄褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い |
| 10 | 灰黄褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い |
| 11 | にぶい黄褐色土 | しまり弱い | 粘性弱い |

第26図　B区基準層序（S＝1/40）

## 1　住居跡

### 第1号住居跡（第27図）

A－5Gに位置する。第3号土坑に切られている。規模は、径約3mの方形に近い平面形とおもわれるが、約2分の1は調査区外となる。柱穴は発見されなかったが、西角付近の焼土集中が、炉の可能性を示唆させることより住居跡とした。壁高は約0.05mと浅いが、覆土には、焼土と炭化物が約0.03mの厚さで層となる。焼土が、ほぼ中央で約0.6×0.45mの不整形にひろがる。2層よりマメ類1点出土。焼土より弥生時代後期、覆土から古墳時代後期から奈良時代の土器出土。

### 第2号住居跡（第27図）

A・B－4・5Gに位置する。規模は、東西約4.5m、南北約3.4mの隅丸長方形を呈する。床面は特に認められない。壁高は0.3mである。カマドは、焼土と炭化物の拡がりから北壁の中央よりやや東よりに位置していたと考えられる。その炭化物中の炭化材を樹種同定したところ、燃料材とおもわれるコナラ節であった。ピット1は、カマドの東側、東壁寄りにあり、約0.8×0.65mの南北に長い長円形を呈する。深さは約0.09mと浅く、覆土に若干の炭化物を含む。ピット2はカマドの西側、北壁寄りにあり、深さ約0.8mで、約0.4×0.35mのやや長円形を呈する。径約0.1mの石が3個落ち込んでいるが、それらの石に人為的な痕跡は認められない。ピット3は、北壁側の焼土下より発見され、約0.32×0.23mの長円形を呈し、深さは、約0.09mである。古墳時代後期から奈良時代の土師器坏・甕・手捏土器出土。

### 第3号住居跡（第27図）

E・F－5・6Gに位置し、隅丸方形を呈する。南側は撹乱を受けており、南壁は確認できないが、北壁は、約4.9mを測る。壁高は0.05～0.1mで、床の硬化面は認められない。カマドは、焼土の集中から北壁のやや東側に位置していたと考えられる。西側は撹乱を受けている。カマド下には、南北約0.5m、深さ0.05mの方形の落ち込みが認められた。焼土集中から出土した炭化材を樹種同定した結果、燃料材と考えられる広葉樹であった。また、床面より0.15～0.8m上で、炭化材が出土し、樹種同定したところ住居構築材の可能性があるコナラ節・カエデ属・クリであった。古墳時代後期から奈良時代の土師器坏・甕出土。また、覆土中から馬歯が出土。

## 2　溝状遺構

第1号溝状遺構は調査の途中で欠番とした。

### 第2号溝状遺構（第28図）

A・B－8Gに位置する。北東から南西に向かい第3号溝状遺構に合流する。北東は調査区外に伸びる。最大幅2.1m、深さ0.07～0.13mを測る。弥生時代後期の甕・壷破片出土。

### 第3号溝状遺構（第28図）

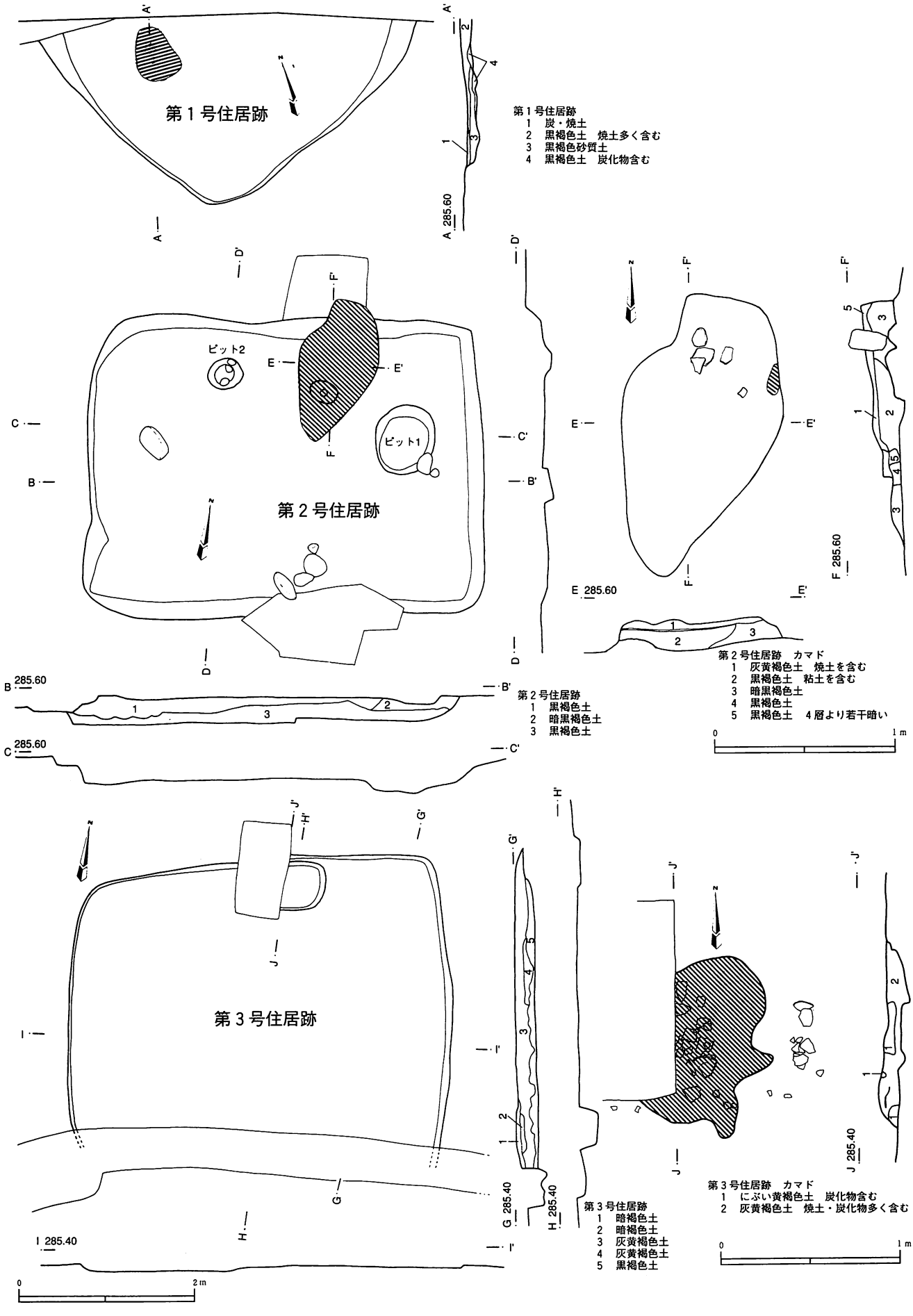
A・B－7・8Gに位置し、西から南に向かい、第2号溝状遺構と合流する。北側の一部を第4号溝状遺構が切っている。また、南端は撹乱に切られている。幅0.85～2.05m、深さ0.03～0.17mを測る。弥生時代後期の甕破片出土。

### 第4号溝状遺構（第28図）

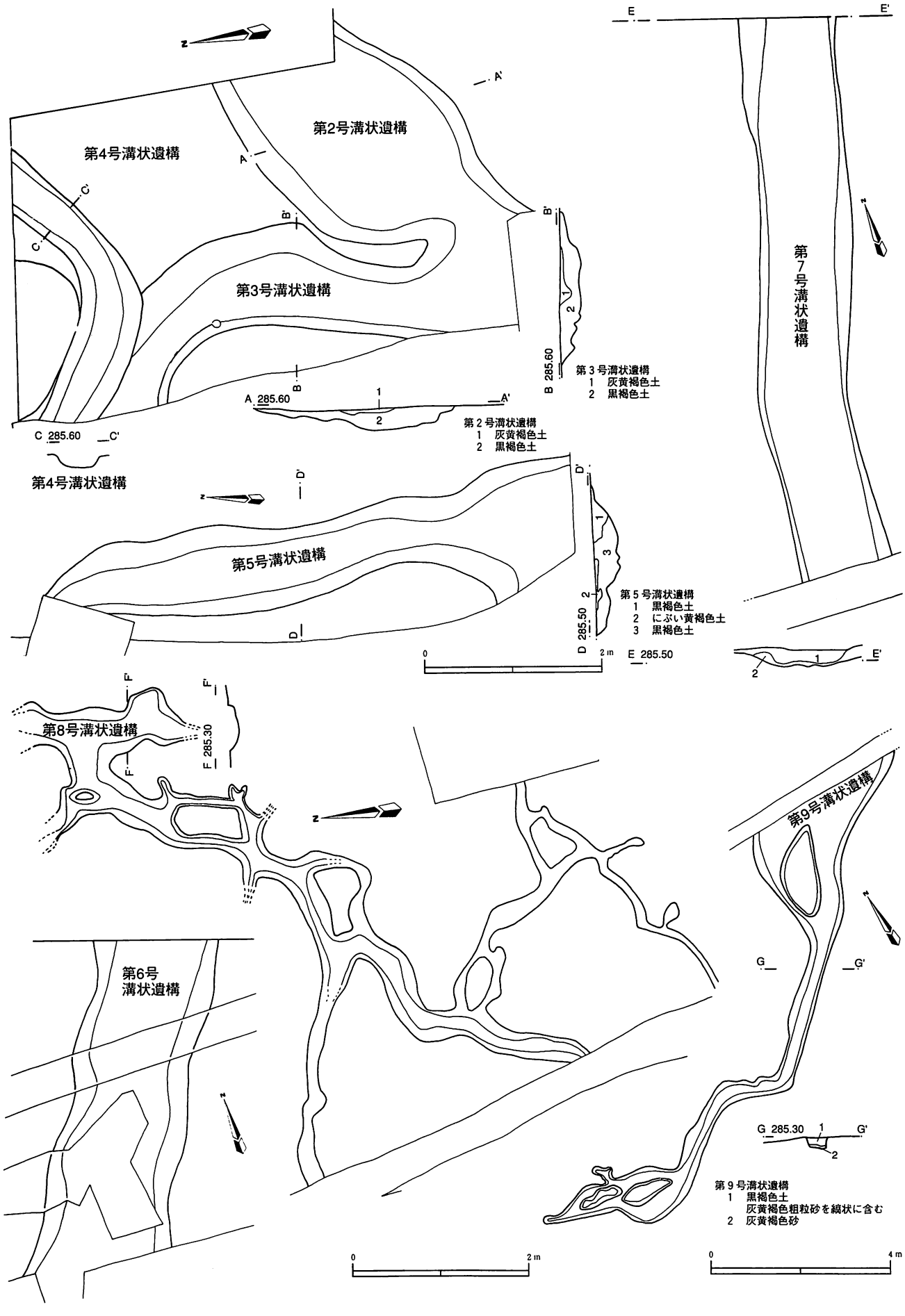
A－7・8Gに位置し、北東から北西に流れる。北東は調査区外に伸び北西で撹乱に切られる。幅0.55～0.6m、深さ0.05～0.24mを測る。第2号集石と第3号溝状遺構を切っている。弥生時代後期の甕・壷破片出土。

### 第5号溝状遺構（第28図）

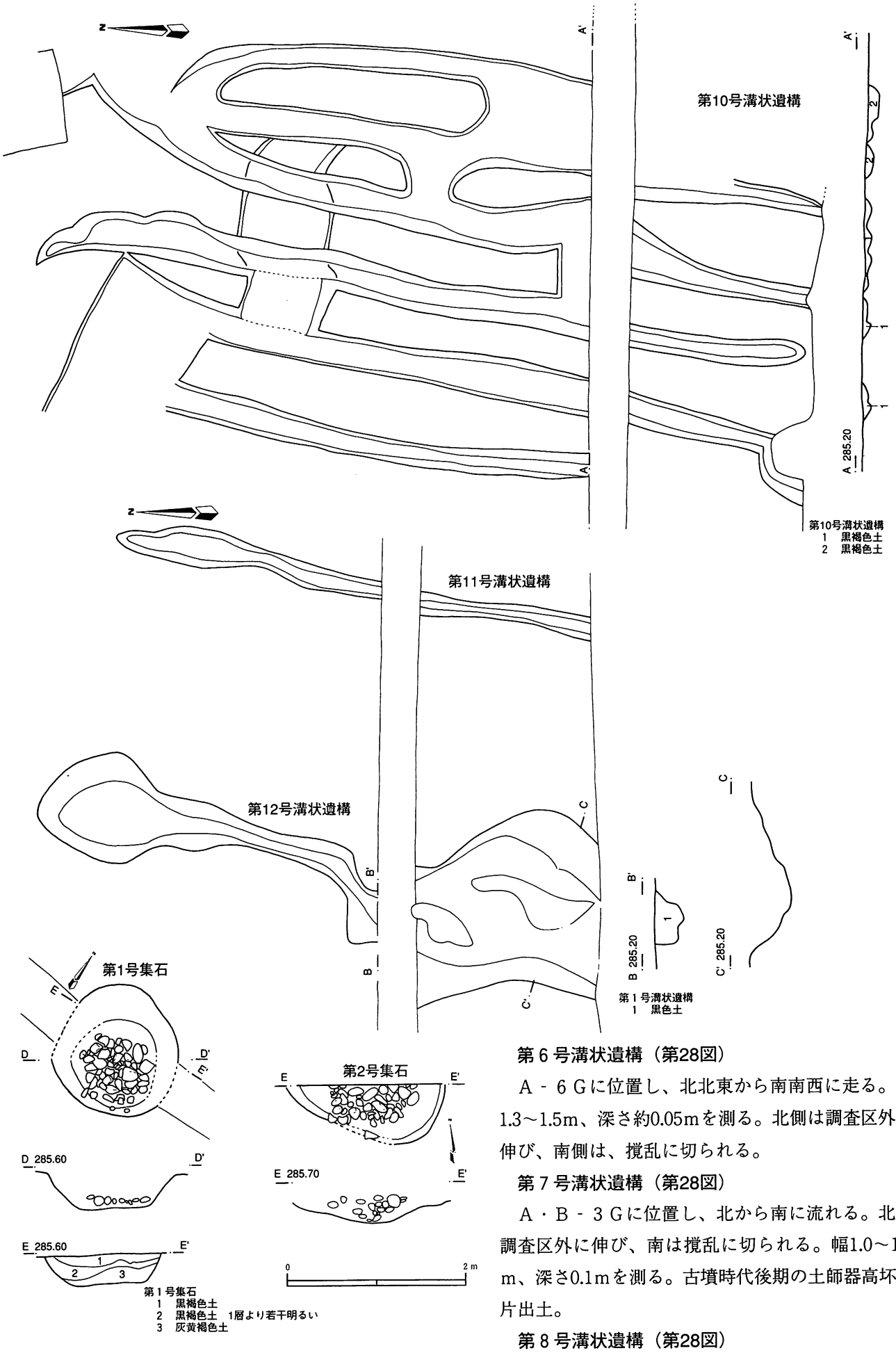
B・C－8Gに位置し、ほぼ北から南に走る。北・南端は撹乱に切られる。幅0.7～1.5m、深さ0.35mを測る。南端でひろがり、やや西に蛇行する。覆土に炭化物を含む。弥生時代後期の壷・甕破片出土。




第27図　第１～３号住居跡平面図




第28図　第２～９号溝状遺構平面図




第29図　第10～12号溝状遺構・第1・2号集石平面図

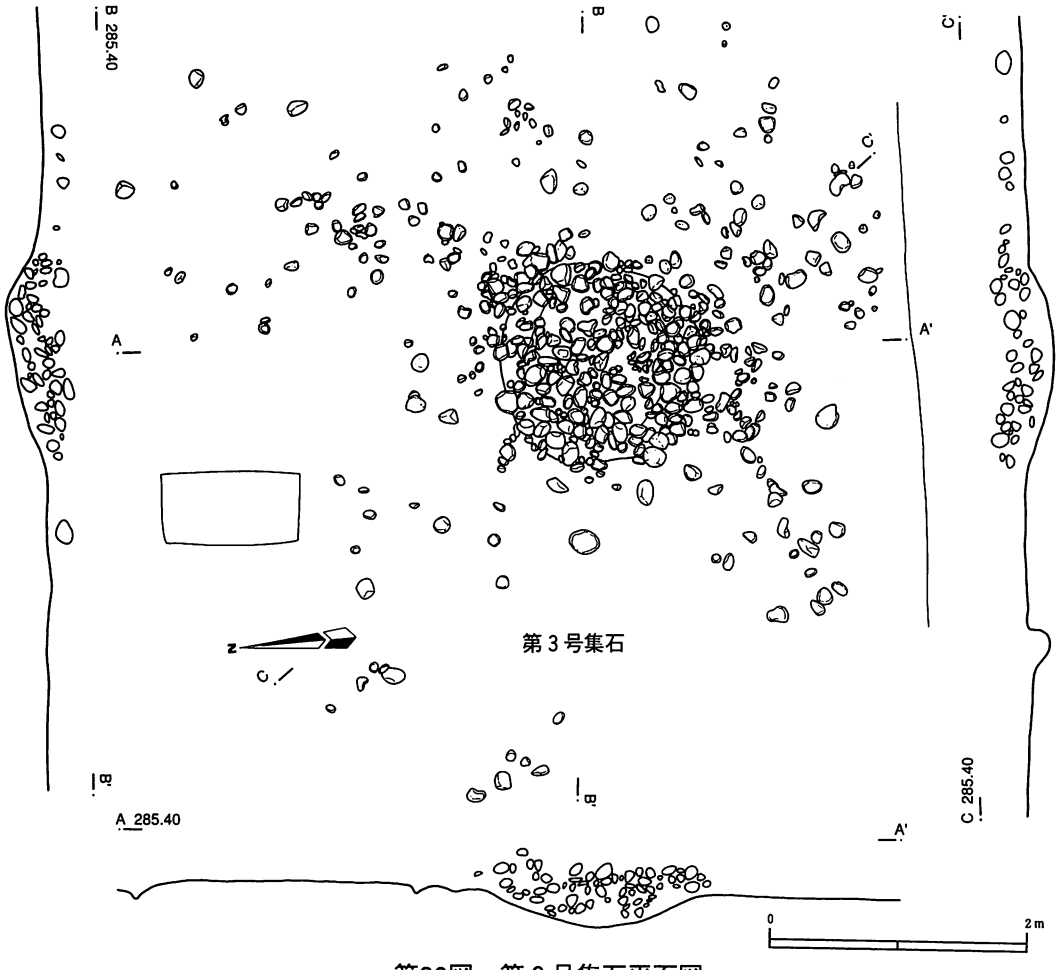
第6号溝状遺構（第28図）

A－6Gに位置し、北北東から南南西に走る。幅1.3～1.5m、深さ約0.05mを測る。北側は調査区外に伸び、南側は、撹乱に切られる。

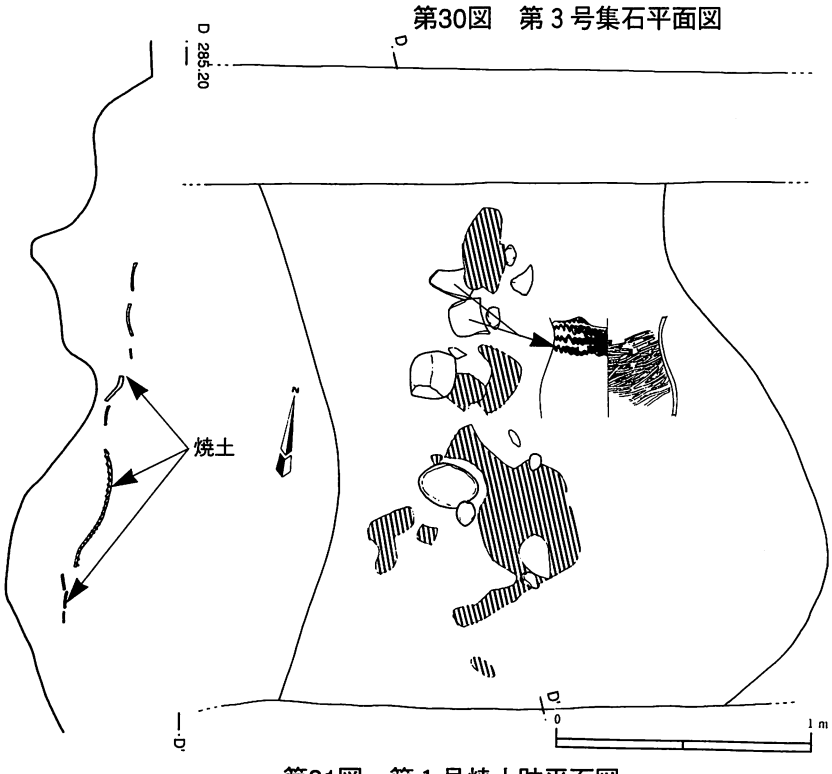
第7号溝状遺構（第28図）

A・B－3Gに位置し、北から南に流れる。北は調査区外に伸び、南は撹乱に切られる。幅1.0～1.1m、深さ0.1mを測る。古墳時代後期の土師器高坏破片出土。

第8号溝状遺構（第28図）




第30図　第３号集石平面図




第31図　第１号焼土跡平面図

Ｄ・Ｅ－３・４Ｇに位置し、北東から南西に走る。北・南端ともに撹乱に切られ、全長７ｍを確認する。激しく蛇行し、支流が幾条もみられる。幅0.06～0.2ｍ、深さ0.04～0.17ｍを測る。水流によってつくられた自然のものとおもわれ、周辺にも同様の溝がみられる。覆土は粗粒砂である。

**第９号溝状遺構（第28図）**

Ｃ・Ｅ－５～７Ｇに位置し、北東から南西に走り、中央近くでクランク状に蛇行し、西へ向かう。全長約13ｍ、幅0.1～２ｍ、深さ0.13ｍを測る。北端は撹乱に切られ、南端は消滅する。覆土には粗粒砂を多く含む。縄文時代前期・弥生時代後期の土器片、古墳時代後期の土師器皿、須恵器坏出土。

**第10号溝状遺構（第29図）**

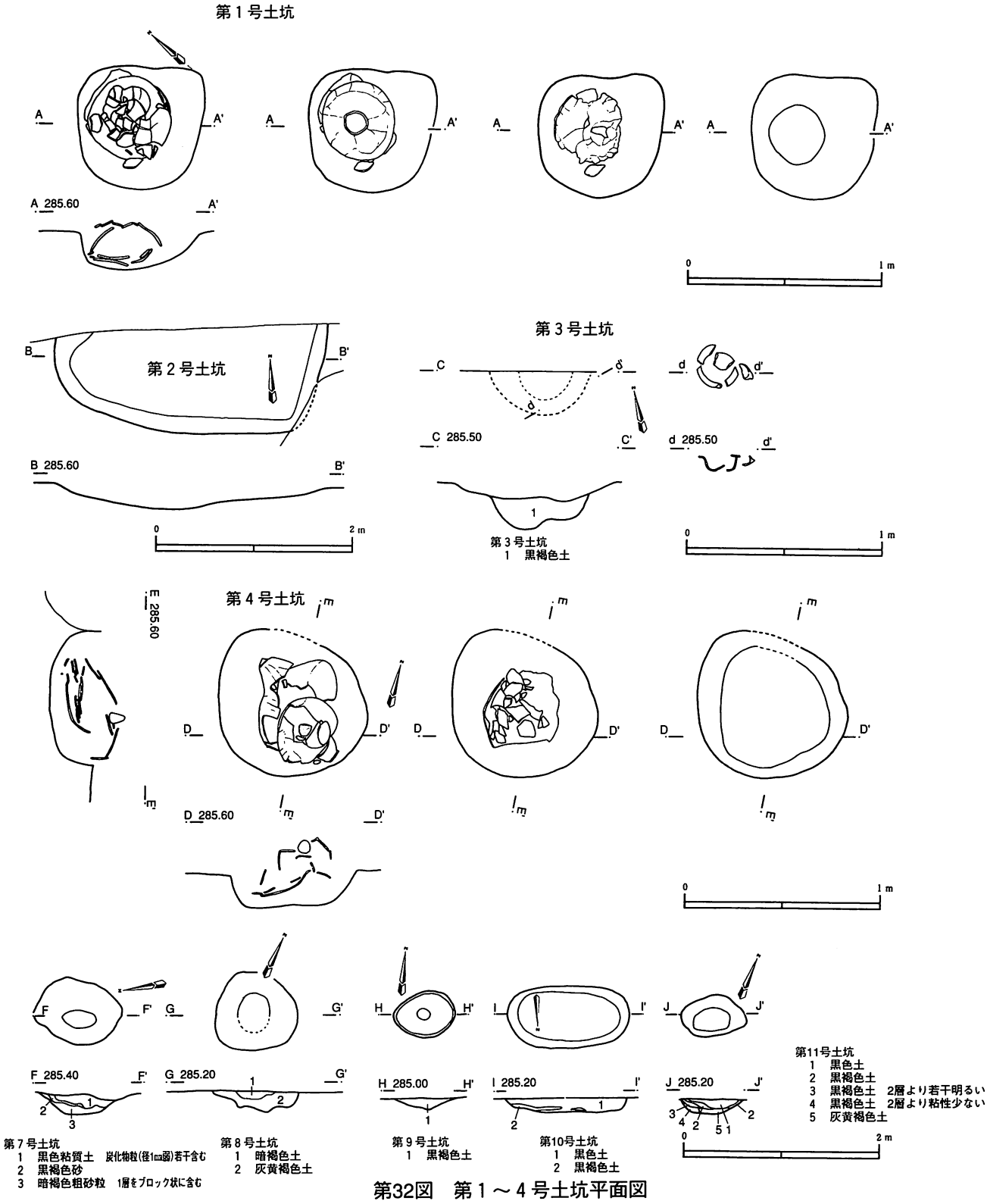
Ｄ～Ｆ－６・７Ｇに位置する最低６条の並行に走る溝とそれに直交するやや浅めの溝１条よりなる。最長8.5ｍ、幅0.25～0.55ｍ、深さ0.03～0.25ｍを測る。直交する東西に走る溝は、全長2.2ｍ、幅0.7～1.05ｍ、深さ0.02～0.16ｍである。

**第11号溝状遺構（第29図）**

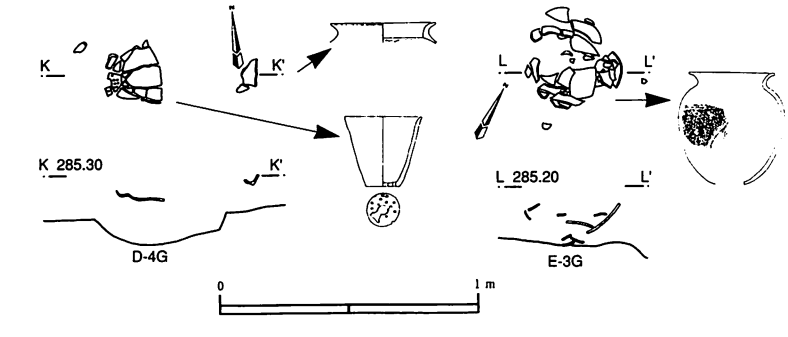
Ｄ・Ｅ－８Ｇに位置し、第10号溝状遺構と並行に走る。全長5.5ｍ、幅0.15～0.45ｍ、深さ約0.04～0.12ｍを測る。北端は終結し、南端は撹乱に切られる。

**第12号溝状遺構（第29図）**

Ｄ～Ｆ－７・８Ｇに位置し、第10・11号溝状遺構間にほぼ両溝に並行に走る。北端は終結する。全長6.5ｍ、深さ0.45ｍを測る。第１号焼土跡と重複する。弥生時代後期の土器片出土。また、ドウガネブイブイ・ヒメコガネ・




第32図　第１～４号土坑平面図




第33図　Ｄ－４・Ｅ－３Ｇ土器出土状況平面図

オオクワガタ等昆虫化石が、多数出土した。

### 3　集石

３基の土坑を伴う集石が発見された。出土土器がないため、時期は不明である。

**第１号集石（第29図）**

Ａ－６Ｇに位置する。径約1.5m、深さ0.35

mの不整円形を呈する。大豆大～拳大の石は、ほぼ水平にまとまる。石には、焼けた跡はない。

**第２号集石（第29図）**

Ａ－７Ｇに位置し、約２分の１は、調査区外となる。南側の一部は第４号溝状遺構に切られている。土坑の規模は、最大長1.8m、深さ（石の上部から）0.3mを測る。大豆大～拳大の石は、土坑の上から底近くまで、径約１mの範囲にまとまる。覆土は、炭化物を含む。石は焼けていない。

**第３号集石（第30図）**

Ｇ－５・６Ｇに位置し、第３号住居跡を切っている。土坑は、径約1.6mの円形を呈し、確認面からの深さ0.25m、石の上部から土坑の底部までは約0.5mを測る。大豆大～拳大の石は径約６mの範囲にひろがり、土坑上部で、径約1.8mに密集する。焼けた石は土坑の中のものだけではなく、外側に散っている石の中にもある。覆土は１層で、炭化物を含む。黒曜石片が１点出土。

**４　焼土跡**

**第１号焼土跡（第31図）**

Ｅ・Ｆ－７・８Ｇに位置し、第12号溝状遺構と重複する。平面確認時には、焼土が環状にみえた。精査したが掘り込みは確認できなかった。断面観察により落ち込みを認める。弥生時代後期の土器出土。また、炭化材・材を樹種同定したところ、燃料材と考えられるクヌギ節、アカガシ亜属であった。

**５　土坑**

調査の途中で、第５・６号土坑を欠番とした。第１・４号土坑は、土坑内から弥生時代後期の土器が３～５個体出土し、壷棺墓の様相を呈している。

**第１号土坑（第32図）**

Ｂ・Ｃ－７Ｇに位置し、0.74×0.70mの不整形を呈し、深さは0.4mを測る。土坑の中には、口縁の欠損した壷１個体（第35図３・４）が、正位に置かれ、その上部に壷胴部破片２個（第35図１・２）が出土。

**第２号土坑（第32図）**

Ａ－６・７Ｇに位置し、北側約２分の１は撹乱を受け、南東の壁の一部も撹乱を受けている。最大長2.8m、幅1.1m、深さ0.04～0.25mを測る。断面は擂り鉢状を呈し、覆土中より弥生土器片出土。

**第３号土坑（第32図）**

Ａ－５Ｇに位置し、北側約２分の１は調査区外になる。径0.5mの円形を呈し、深さは0.16mを測る。第１号住居跡を掘り下げ中に調査区壁際に甕が出土し、土層を確認したところ掘り込みが認められた。土坑の平面形は明かではない。覆土に炭化物を含む。古墳時代後期の甕口縁部出土。

**第４号土坑（第32図）**

Ｃ－７Ｇ、１号土坑の西約1.1mに位置する。北側の一部が撹乱を受けているが、0.83×0.74mの不整形のプランを呈し、深さ0.25mを測る。最初に横転している壷１点（第36図４）と鉢１点（第36図２）が出土したが、明確な掘り込みはみられなかった。そこで２個体の土器の出土状態を明かにするために半截したところそれらの下より壷の頚部（第36図１）と頚部以上が欠損した壷（第36図５）が出土。４の胴部上位には拳大の石が位置し、それを中心に欠損している。５の中の土からは焼け骨片が発見された。

**第７号土坑（第32図）**

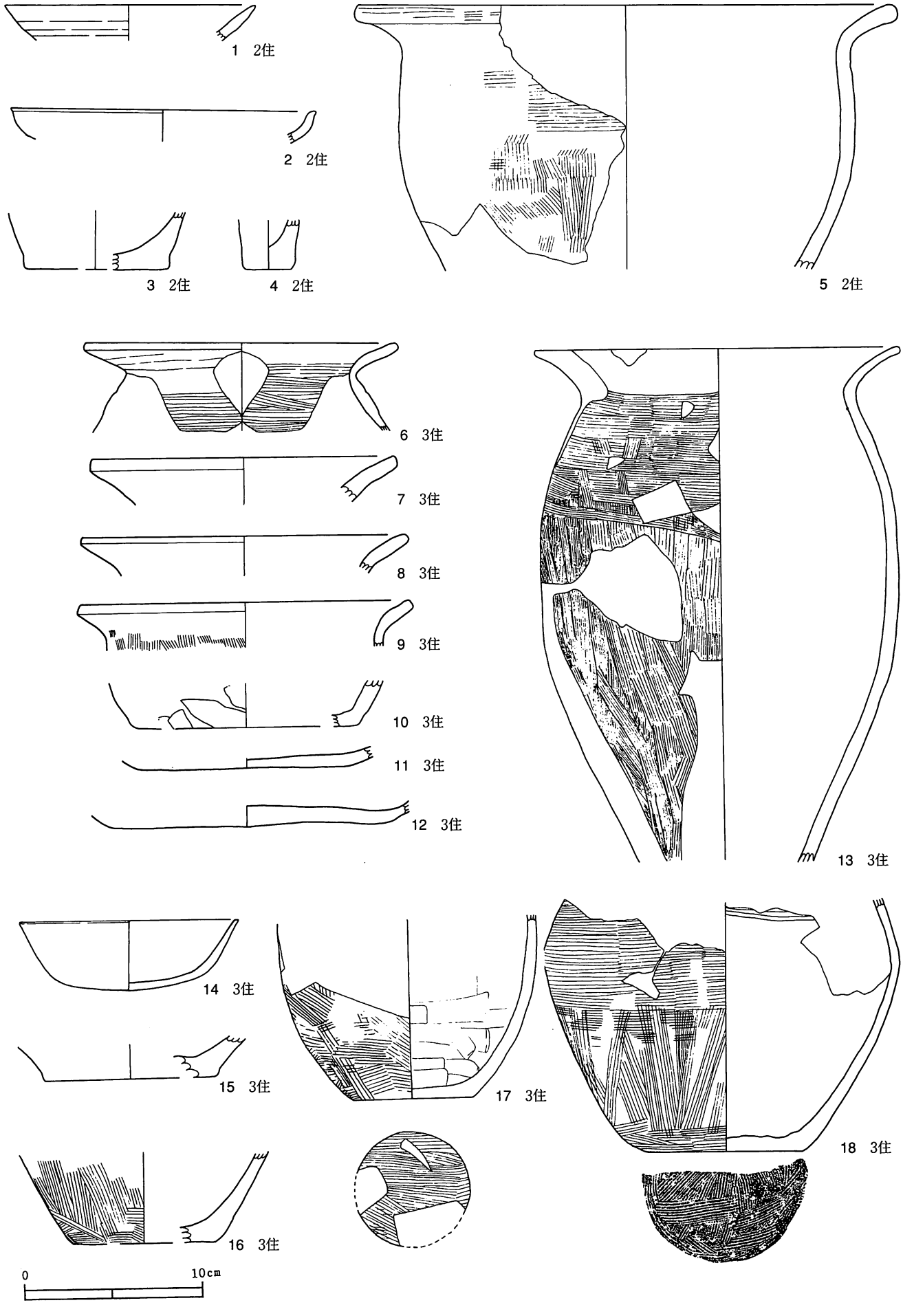
Ｂ－３Ｇに位置する。0.92×0.68mの不整形を呈し、深さ0.2mを測る。弥生時代後期の甕の頚部破片出土。

**第８号土坑（第32図）**

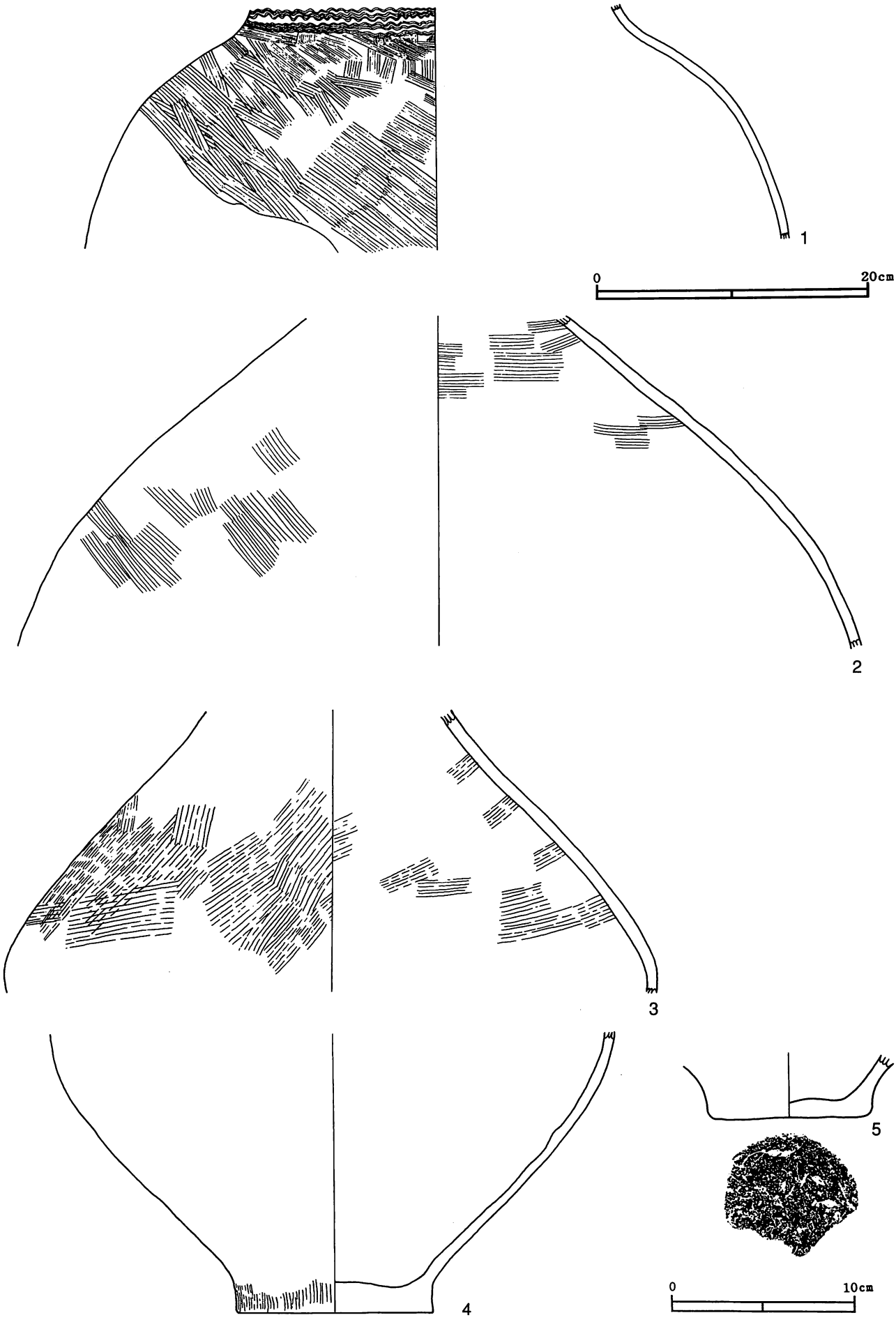
Ｅ－２Ｇに位置する。径約0.8mの不整形を呈し、深さ0.22mを測る。古墳時代後期から奈良時代の土師器甕片出土。炭化材１点出土する。ヤマグワ近似種。

**第９号土坑（第32図）**

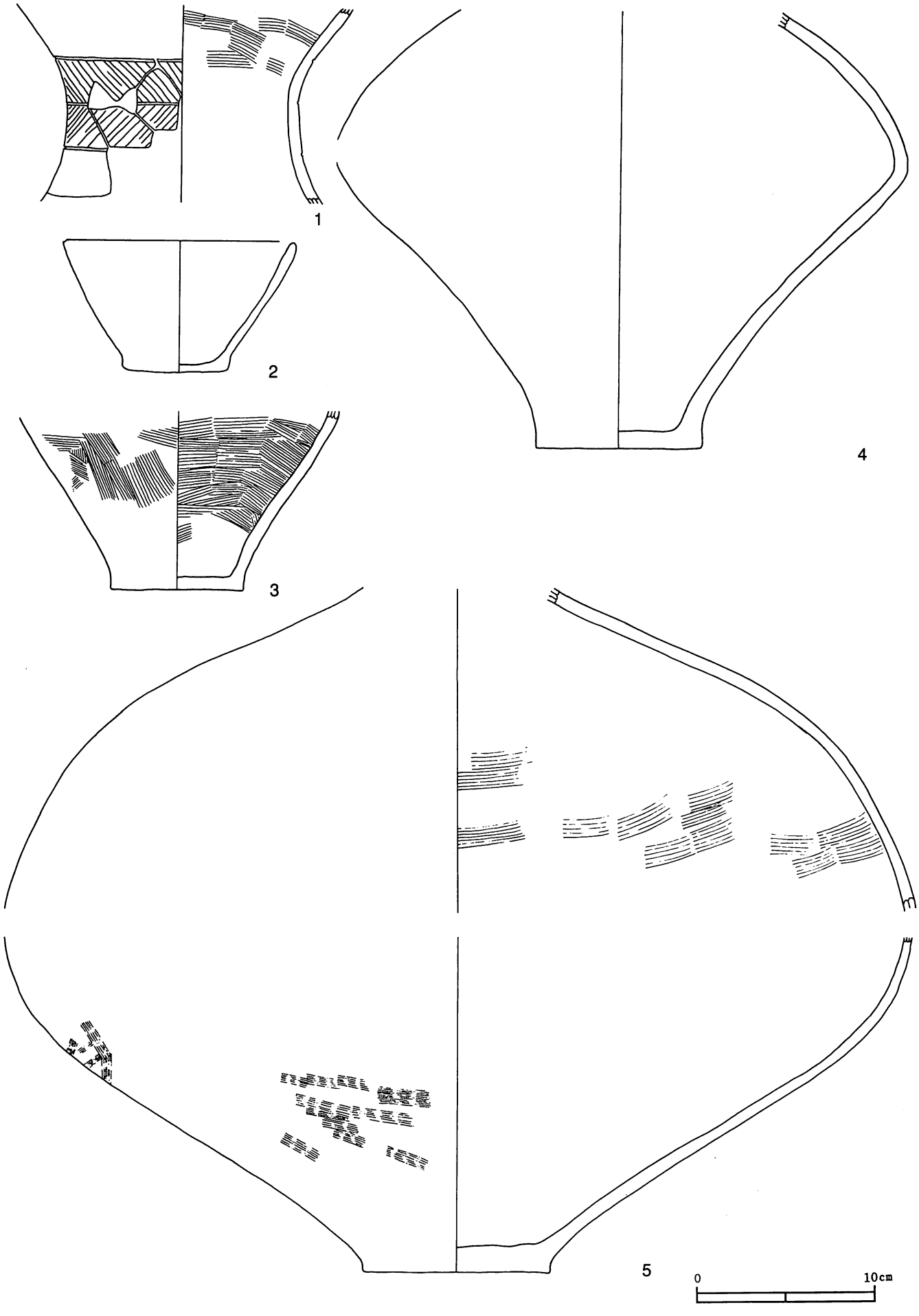
Ｅ－３Ｇに位置する。0.63×0.48mの卵形を呈し、断面は擂り鉢状、深さ0.12mを測る。



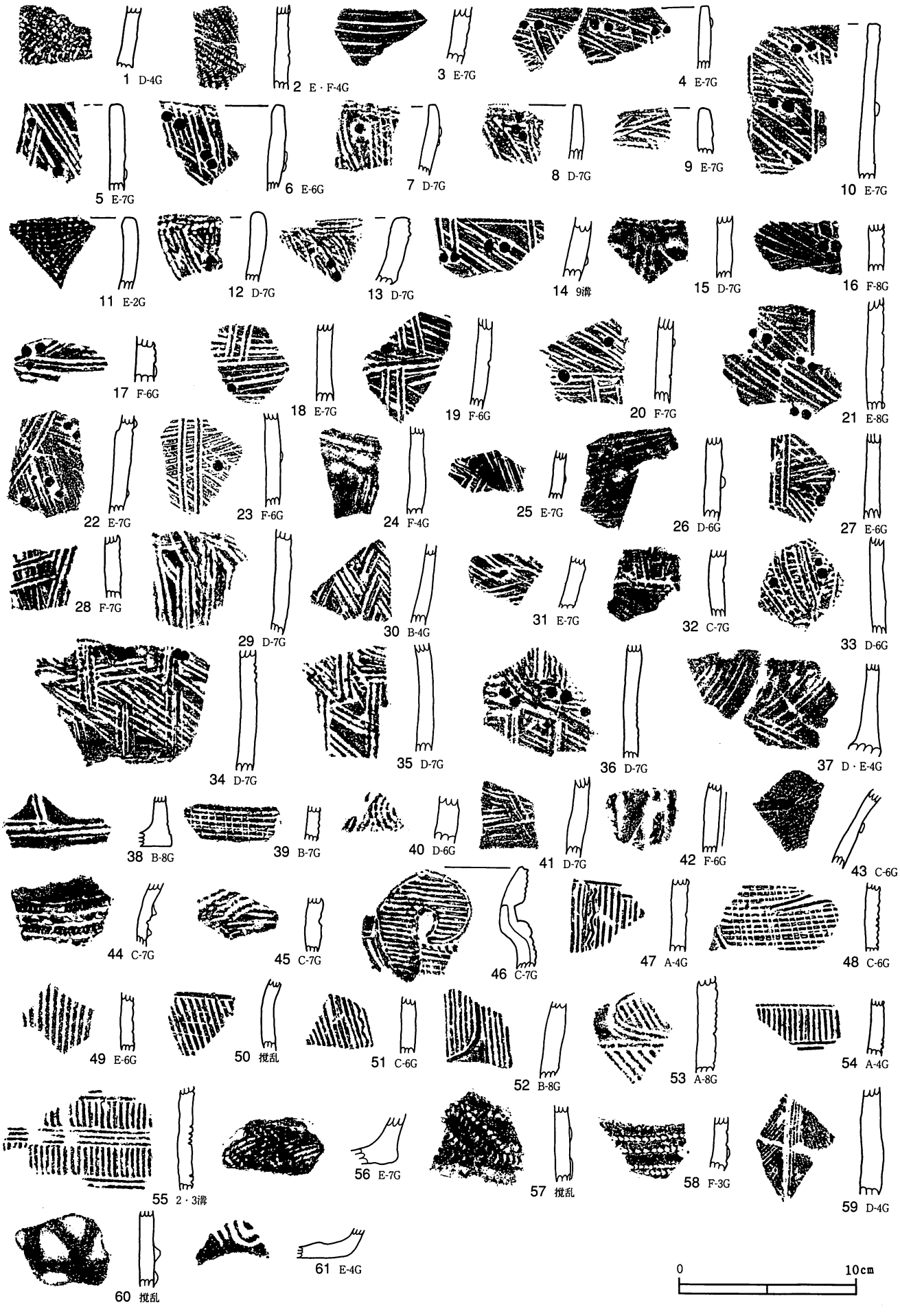

第34図　住居跡出土土器



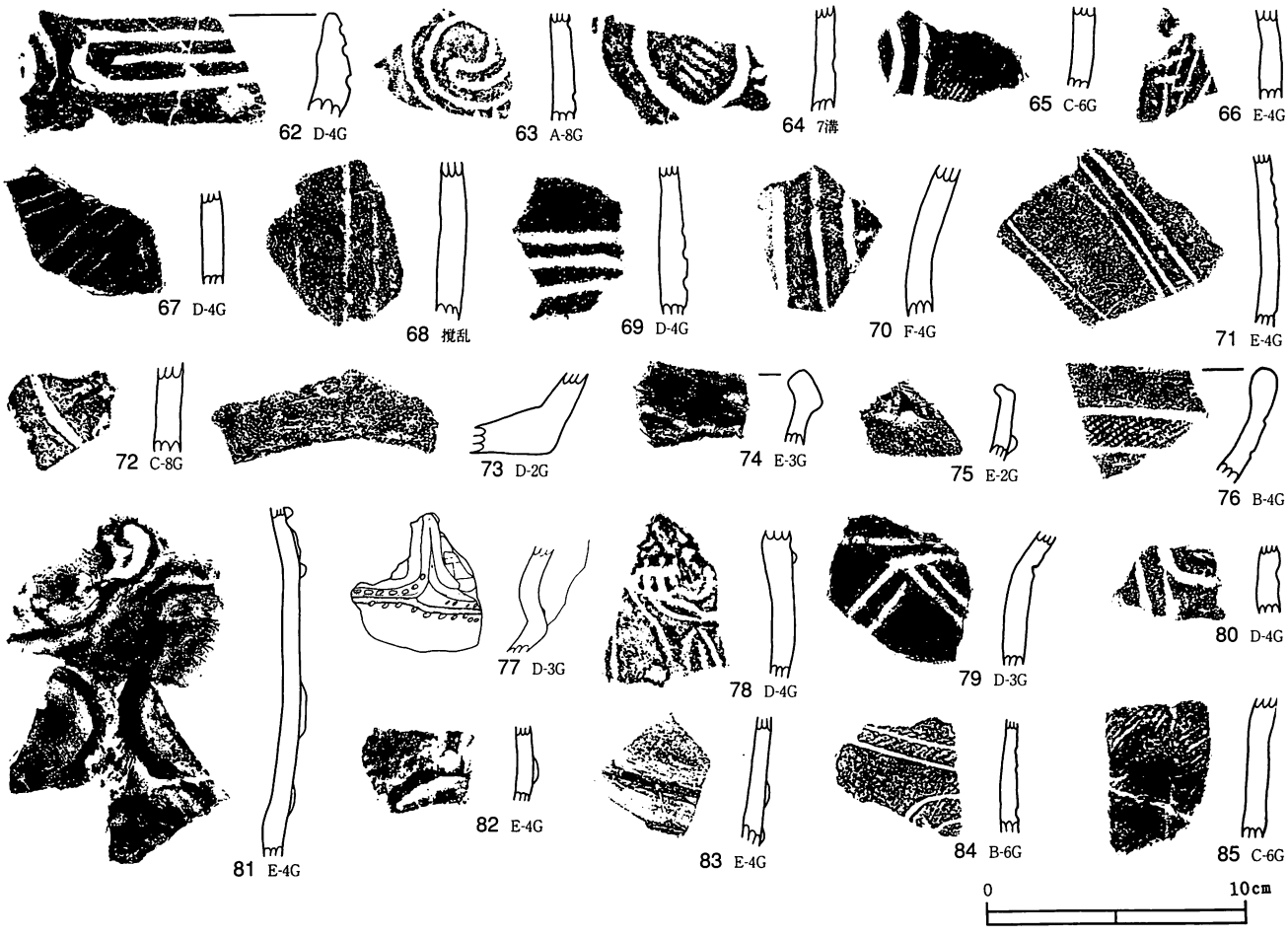

第35図　第１号土坑出土土器




第36図　第４号土坑出土土器




第37図　出土縄文土器（1）




第38図　出土縄文土器（2）

第10号土坑（第32図）

C・D－5Gに位置する。1.27×0.65mの長円形を呈し、深さ0.15mを測る。弥生時代後期の土器片出土。

第11号土坑（第32図）

D－6Gに位置し、0.7×0.42mの不整形を呈する。深さは0.15mを測る。

## 第2節　遺物

遺物は、遺構別、時期別に図示できるもの全てを図示するよう努めた。以下、時期別に記述する。

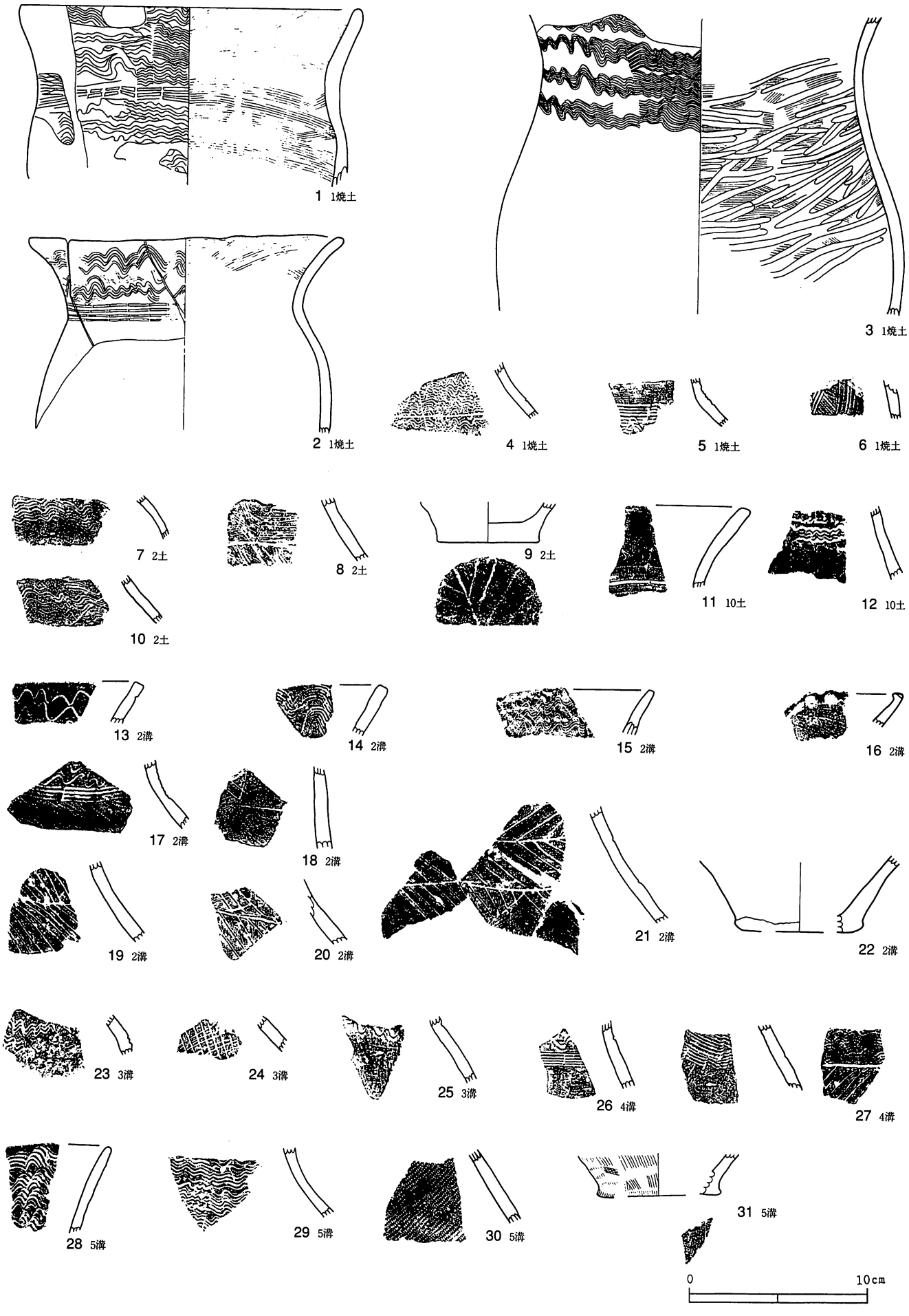
### 1　出土縄文土器（第37・38図）

遺構に伴うものはないが、前期末から後期中葉にかけての破片が出土した。1～3は諸磯b式、4～38は諸磯c式、39～45は十三菩提式、45～56は五領ヶ台式、57・58は新道式、59～61は曽利式、62・64・65は加曽利E式、66～73は称名寺式、74～85は堀ノ内式である。

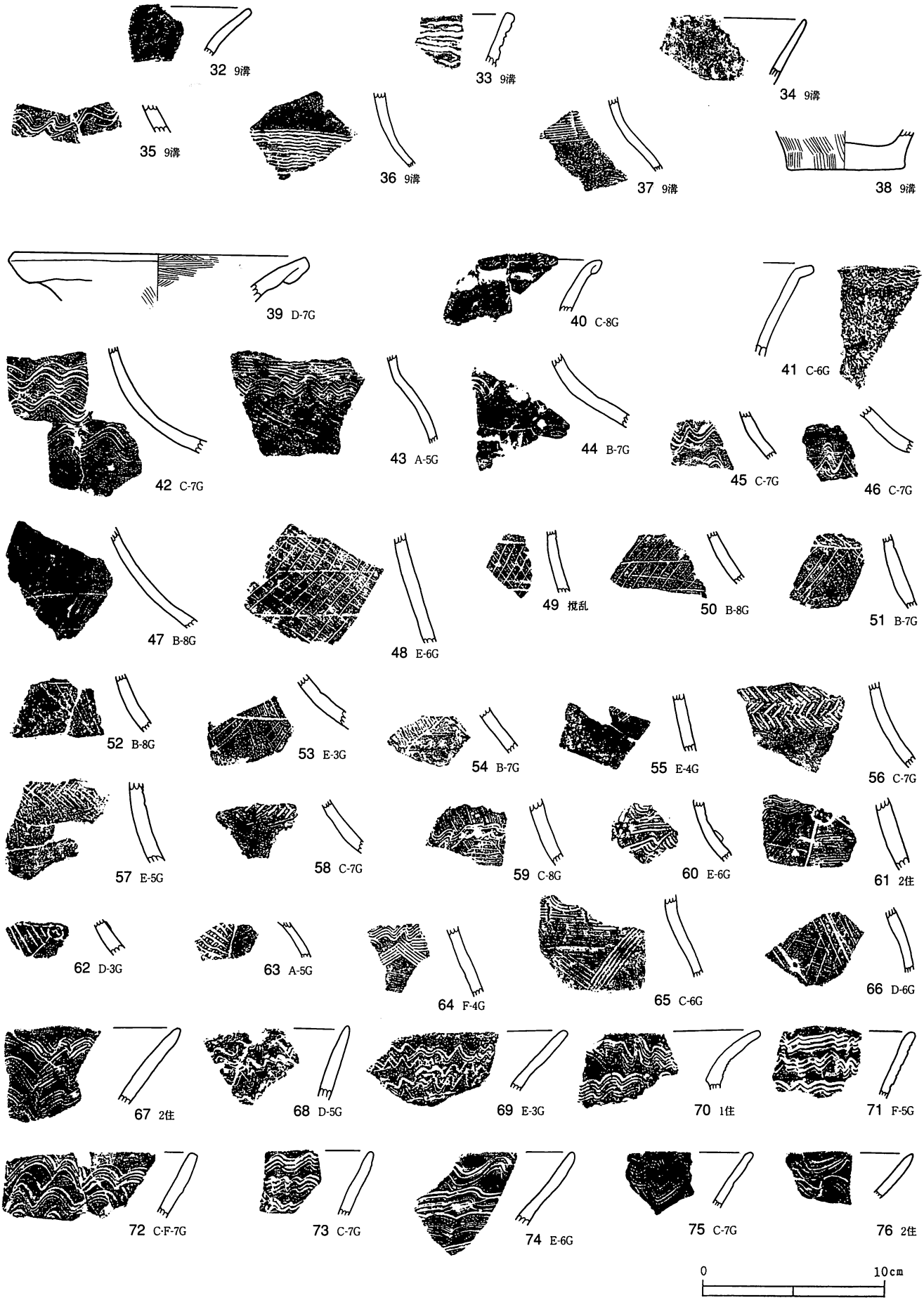
### 2　出土弥生土器（第39～42図）

第1号焼土跡（第39図1～6）

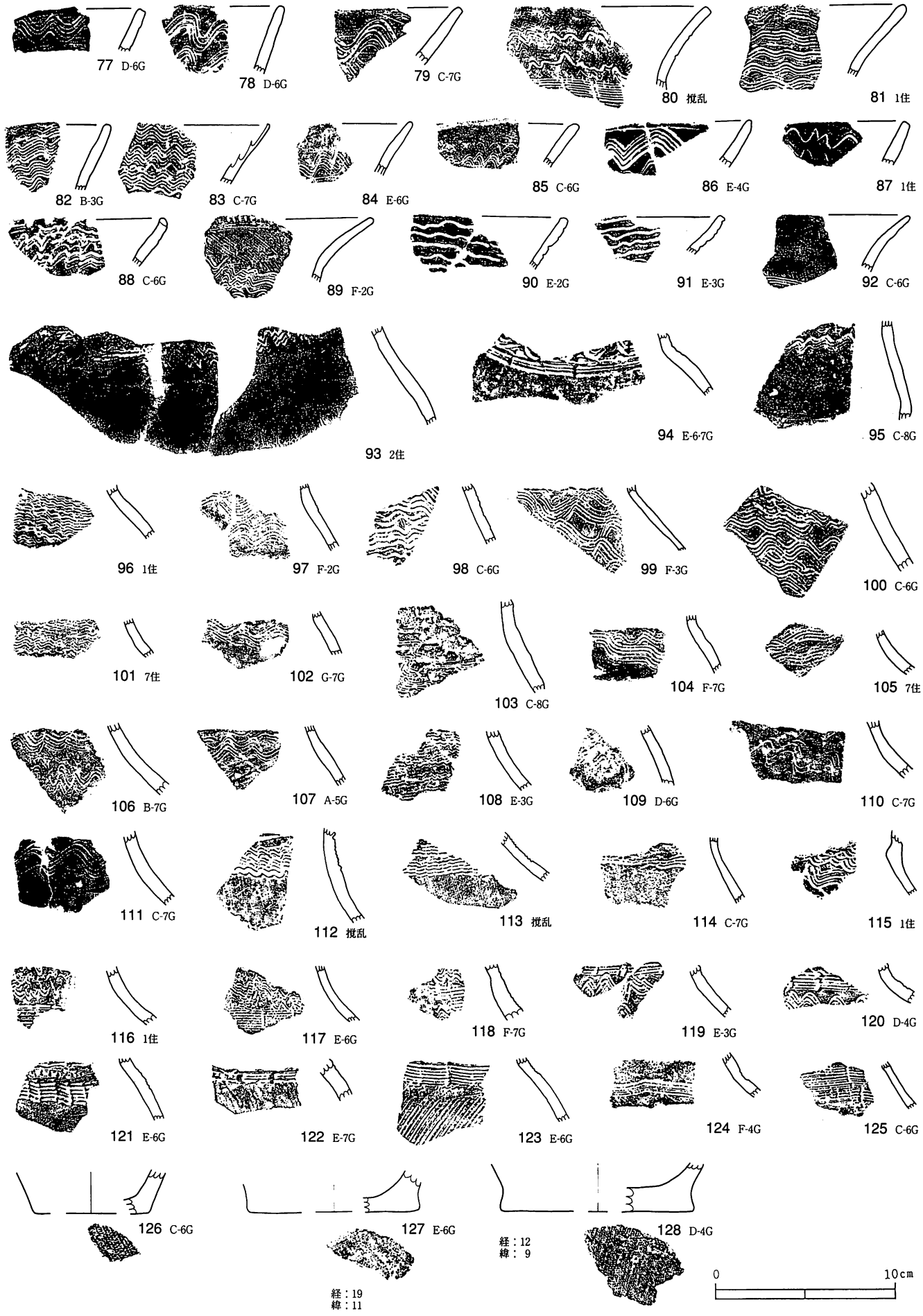
1は甕の口縁部破片である。推定口径19.1cm。頸部に6本単位の櫛描簾状文を1段巡らせた後、口縁部から胴部に同単位の櫛描波状文が密に施される。内面は横・斜ハケ調整後、口縁部には横ナデが密に、胴部には粗に施される。色調は黒褐色を呈する。胎土は緻密で、金雲母・白色粒子・黒雲母を含む。焼成は良。E－7G出土の土器片と接合関係にある。2は甕の口縁部である。口径17.6cm。頸部に4本単位の櫛描簾状文を1段巡らせた後、口縁部から頸部にかけて同単位の櫛描波状文が2段横位に巡る。胴部は縦・横ハケ調整が施されるが、表面が剥離し不明瞭である。口縁部内面は横ハケ調整、胴部はハケ調整後ナデが施される。色調は灰褐色を呈する。胎土




第39図　出土弥生土器（1）




第40図　出土弥生土器（2）




第41図　出土弥生土器（3）

は緻密で、砂粒・白色粒子・黒色粒子・金雲母を含む。焼成は良好。4号土坑一括出土の土器片と接合関係にある。3は甕の胴部破片である。口縁部から頚部にかけて8本単位の櫛描波状文を最低4段巡らせる。胴部は横・斜ハケ調整後、ミガキが密に施される。また、内面も横ハケ調整後、ミガキが密に施される。色調は赤褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・赤色粒子・金雲母を含む。焼成は良好。4～6は甕の頚・胴部破片である。4は頚部破片である。8本単位の櫛描波状文が密に施され、その上から横位に一条の沈線を巡らせる。内面は横ハケ調整が残る。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・黒雲母・金雲母・白色粒子を含む。焼成は良。5は頚部破片である。6本単位の櫛描簾状文を巡らせ、その下部に櫛描波状文が施される。横・斜ハケ調整が残る。色調は黒褐色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・黒雲母・金雲母を含む。焼成は良。6は胴部破片である。6本単位の櫛描による文様が施される。色調は褐灰色を呈する。胎土は緻密で、黒雲母を多く含む。焼成は良。

**第2号土坑（第39図7～10）**

7は甕の胴部破片である。外面は8本単位の櫛描波状文が、内面は横ヘラ磨きが施される。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は砂粒・白色粒子・金雲母を含む。焼成は良好。8は壷の胴部破片である。ヘラ描沈線文が施された後、斜ハケ調整が施される。内面は斜ハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・黒雲母・石英粒・金雲母を含む。焼成は良好。9は甕の底部破片である。底面に木葉痕がある。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土はやや粗で、砂粒・白色粒子・石英粒・赤色粒子・金雲母を含む。割れ口が磨耗している。10は甕の胴部破片である。8本単位の櫛描波状文が施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は砂粒・白色粒子を含む。焼成は良。

**第10号土坑（第39図11・12）**

11は壷の口縁部破片である。口縁部は横ハケ調整、頚部には簾状文が施される。内面は横ハケ調整が密に施される。色調はにぶい褐色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・白色粒子を多く含む。焼成は良好。12は甕の頚部破片である。4本単位の櫛描波状文が施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は白色粒子・金雲母・赤色粒子を含む。焼成は良。

**第2号溝状遺構（第39図13～22）**

13は甕の口縁部破片である。1条の沈線による波状文が施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は緻密で、黒雲母・金雲母を含む。焼成は良。14は甕の口縁部破片である。6本単位の櫛描波状文が2段施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土はやや粗で、石英粒・黒雲母・金雲母・白色粒子を含む。焼成は良。15も甕の口縁部破片である。5本単位の櫛描波状文が2段みられる。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・黒雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好。16も甕の口縁部破片である。口唇部には棒状工具による浅い押圧文があり、内・外面は横ハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・石英粒・金雲母を含む。焼成は良好。17は甕の頚部破片である。4本単位の櫛描簾状文施文後、その上部に1条の沈線による波状文が施される。下部には斜ハケ調整後、ナデが施される。内面は横ハケ調整後、縦・横ナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・石英粒・赤色粒子・白色粒子・黒雲母を含む。焼成は良。18は壷の胴部破片である。ヘラ描沈線文、斜ハケ調整が施される。ヘラ描沈線文の下部はミガキが施される。内面は横・斜ハケ調整が施される。色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土は緻密で、黒雲母・石英粒・金雲母・白色粒子を含む。焼成は良。19は壷の頚部破片である。縦ハケ調整後、ヘラ描斜走沈線により施文される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。割れ口は磨耗している。色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土は緻密で、石英粒・赤色粒子・黒雲母を含む。焼成は良。20は壷の頚部破片である。縦・斜ハケ調整後、ヘラ描による1条の横位沈線を境に斜走沈線が施される。内面は横・斜ハケ調整が施される。色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土は緻密で、石英粒・赤色粒子・黒雲母を含む。焼成は良。21は壷の頚部破片であり、20と同一個体である。22は壷の底部破片である。内・外・底面ともにハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土はやや粗で、砂粒・白色粒子・黒雲母を含む。焼成は良。

**第３号溝状遺構（第39図23～25）**

23は甕の胴部破片である。３本単位の櫛描波状文が２段みられる。内面は横ハケ調整後、ナデられる。色調は褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・金雲母を多く含む。焼成は良。24は壷の胴部破片である。縦ハケ調整後、ヘラ描格子目文が施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調は明褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・赤色粒子・黒雲母を含む。焼成は良好。25は甕の胴部破片である。縦ハケ調整後、ナデが施され、上部には波状文がみられる。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調は黒褐色を呈する。胎土は砂粒・金雲母・白色粒子を含む。焼成は良。

**第４号溝状遺構（第39図26・27）**

26は甕の胴部破片である。横・斜ハケ調整後、頚部に５本単位の櫛描簾状文が、その上部に波状文が施される。内面は横ハケ調整がなされる。色調は黒褐色を呈する。胎土は緻密で、金雲母・黒雲母を含む。焼成は良好。27は壷の胴部破片である。４本単位の櫛描波状文の下部にヘラ描沈線が１条横位に描かれ、その下部にヘラ描斜行沈線文が施される。内面の上部は横ハケ調整、下部はナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は緻密で、金雲母・白色粒子・赤色粒子を若干含む。焼成は良。

**第５号溝状遺構（第39図28～31）**

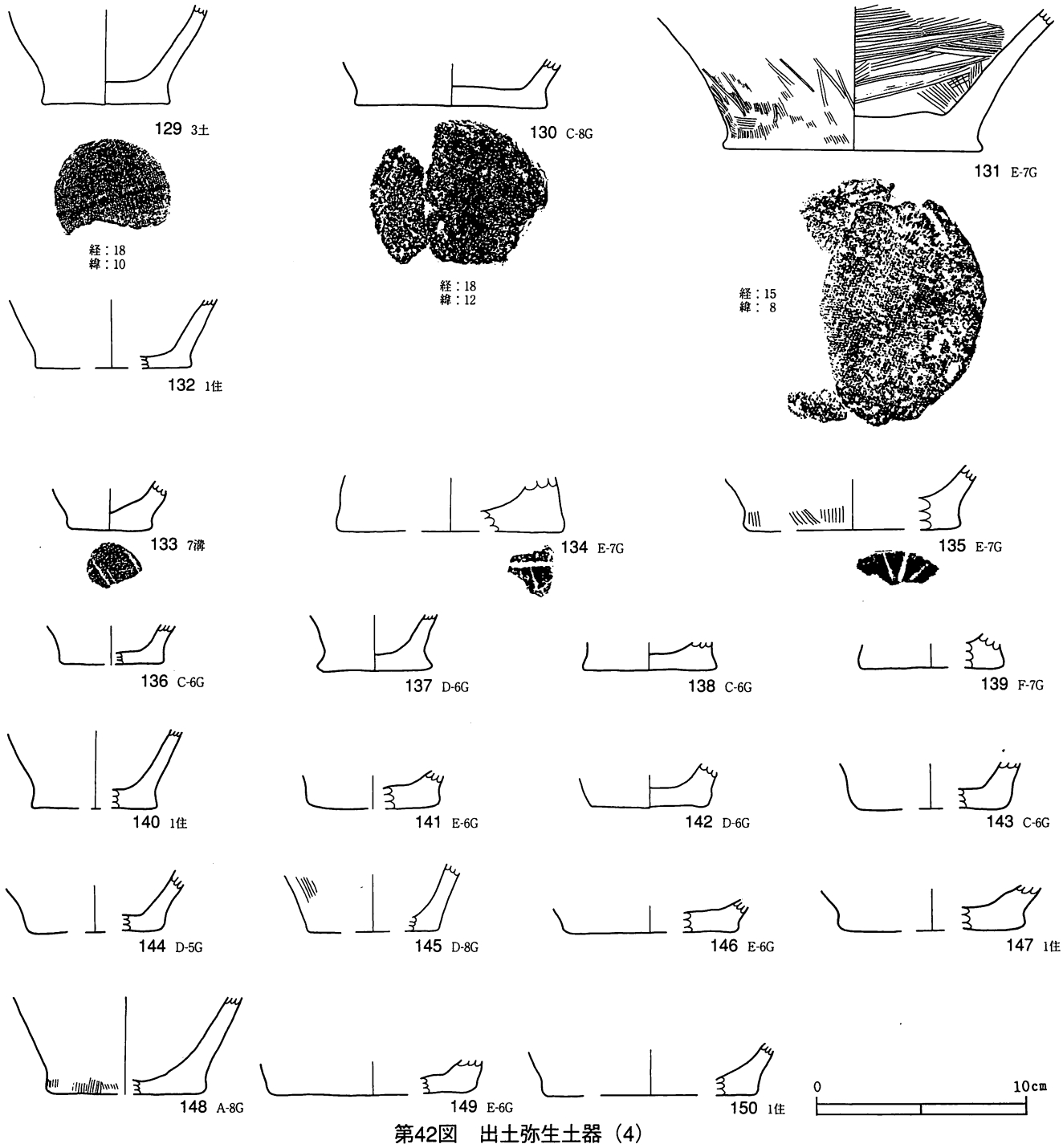
28は甕の口縁部である。４本単位の櫛描波状文が密に施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい褐色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・黒雲母・金雲母・石英粒を含む。焼成は良。29は甕の胴部破片である。７本単位の櫛描波状文が密に施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は黒雲母・金雲母・白色粒子を含む。焼成は良。30は壷の胴部破片である。ＬＲの縄文が施文される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調は明赤褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・石英粒・黒雲母を含む。焼成は良。割れ口は磨耗している。31は壷の底部破片である。推定底径約７cm。外面は縦ハケ調整後、横ナデされている。底面には布目痕がみられる。内面は剥離している。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は赤色粒子・石英粒・黒雲母を含む。焼成は良。

**第９号溝状遺構（第39図32～38）**

32～34は甕の口縁部破片である。32は６本単位の櫛描波状文が施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調は灰黄褐色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・金雲母を多く含む。焼成は良好。33は口唇部に浅い刻み目をもち、外面はヘラ描沈線による波状文が施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・白色粒子・黒雲母を含む。焼成は良好。34の外面は無文、内面は横ハケ調整が施される。色調はにぶい褐色を呈する。胎土は砂粒・白色粒子・黒雲母を含む。35～37は甕の胴部破片である。35は４本単位の櫛描波状文が施される。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。焼成は良。36は５本単位の櫛描波状文が施され、その上部は、斜ハケ調整がみられる。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・金雲母・黒雲母を含む。焼成は良好。37の頚部は櫛描簾状文が施される。その下部に櫛描波状文の痕跡が若干残るが、磨耗が激しく不明瞭である。内面は横ハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良。38は壷あるいは甕の底部破片である。推定底径6.6cm。外面は縦ハケ調整、内面はナデが施される。色調はにぶい褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・金雲母・石英粒・赤色粒子を含む。焼成は良。

**第１号土坑（第35図１～５）**

１は壷の胴部破片である。外面は斜・縦ハケ調整後ナデが施され、頚部に７本単位の櫛描波状文が２段以上巡る。内面は僅かに輪積み痕を残し、横・斜ハケ調整後ナデが施される。色調は明褐色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・金雲母・黒雲母・小石を含む。焼成は良。２は壷の胴部破片である。内・外面ともにハケ調整後、ナデが施される。色調はにぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、金雲母・黒雲母・赤色粒子・白色粒子・小石を含む。焼成は良。３、４は同一個体である。３は壷の胴上半部である。外面は斜ハケ調整後、ナデが施され、内面は横ハケ調整が施されるが、剥離している。色調はにぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、砂粒・金雲母・黒雲




第42図　出土弥生土器（4）

母を含む。焼成は良。4は壷胴下半部である。底径11cm。外面の下部のみ縦ハケ調整が残る。内面は剥離が著しい。5は壷の底部破片である。推定底径8.7cm。底面に籾痕を有する。内面は剥離している。胎土はやや粗で、砂粒・白色粒子・金雲母・黒雲母を多く含む。焼成は良。

**第4号土坑（第36図1～5）**

1は壷の頸部である。頸部にヘラ描斜行沈線文が施される。内面は横ハケ調整が施されるが、剥離が著しい。色調はにぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、砂粒・黒雲母・金雲母を含む。焼成は良好。2は鉢である。口径12.8cm、器高7.4cm、底径6cm。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は粗で、砂粒・白色粒子・黒雲母を多く含む。焼成は良。3は壷の底部である。底径7.5cm。外面は縦・斜ハケ調整後、ナデが施され、内面は横ハケ調整が施される。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は緻密で、黒雲母・赤色粒子・石英粒を含む。焼成は良。4は壷である。口縁部は欠損する。底径9.5cm。内・外面ナデが施されるが、内面下部は剥離している。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は緻密で、黒雲母・金雲母・赤色粒子を含む。焼成は良。5は口縁部の欠損した壷である。内・

外面に横・斜ハケ調整が施される。色調は橙色を呈する。胎土はやや粗で、砂粒・黒雲母を多く含む。焼成は良。

第40～42図39～150は遺構外出土の弥生土器である。39～41が壷の口縁部である。41の内・外面は赤彩されている。42～66は壷の口縁部である。67～92は甕の口縁部である。93～125は甕の胴部である。126～150は壷または甕の底部を一括した。126～131は底面に布目痕がみられ、133～135は木葉痕がみられる。

### 3　出土土師器・須恵器（第43・44図）

#### 3号土坑（第43図１）

甕の口縁部である。口径20cm。口縁部には、指頭痕があり、ナデが施され、胴部外面は縦ハケ調整、内面は横・斜ハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。胎土は粗で、砂粒・白色粒子・赤色粒子・石英粒・金雲母・黒雲母を含む。焼成は良好。

#### Ｄ－４Ｇ出土土器（第43図２～４）

２は甑である。底部の一部と口縁部３分の１が欠損する。口径18.0cm、器高16.5cm、底径7.6cm。底面の孔は小孔→大孔の順に下から上に向けて開けられている。外面はナデ、内面は横・斜ハケ調整後、ハケの痕跡を僅かに残してナデが施される。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は粗で、砂粒・赤色粒子・白色粒子・金雲母・黒雲母・石英粒を含む。焼成は良好。３は甕の頚部破片である。外面は丁寧なナデ調整、口縁部内面は横ハケ調整、体部はナデ調整が施される。色調は黒褐色を呈する。胎土は粗で、白色粒子・金雲母・黒雲母・砂粒・赤色粒子を含む。焼成は良好。４は甕の口縁部破片である。推定口径28.4cm。外面の口縁部はナデ、体部は縦ハケ調整後、ナデが施される。内面の口縁部は横ハケ調整後にナデ、体部はナデのみ施される。色調はにぶい褐色か明褐色を呈する。胎土は粗で、砂粒・白色粒子・黒雲母・金雲母・赤色粒子を含む。焼成は良好。

#### Ｅ－３Ｇ出土土器（第43図５）

５は甕である。全体の約３分の１が欠損している。推定口径20cm。外面の口縁部はナデ、胴部は横ハケ調整後、叩き目が施される。内面の口縁部はナデ、体部は剥離している。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は粗で、砂粒・白色粒子・石英粒・赤色粒子・黒雲母を含む。焼成は良好。

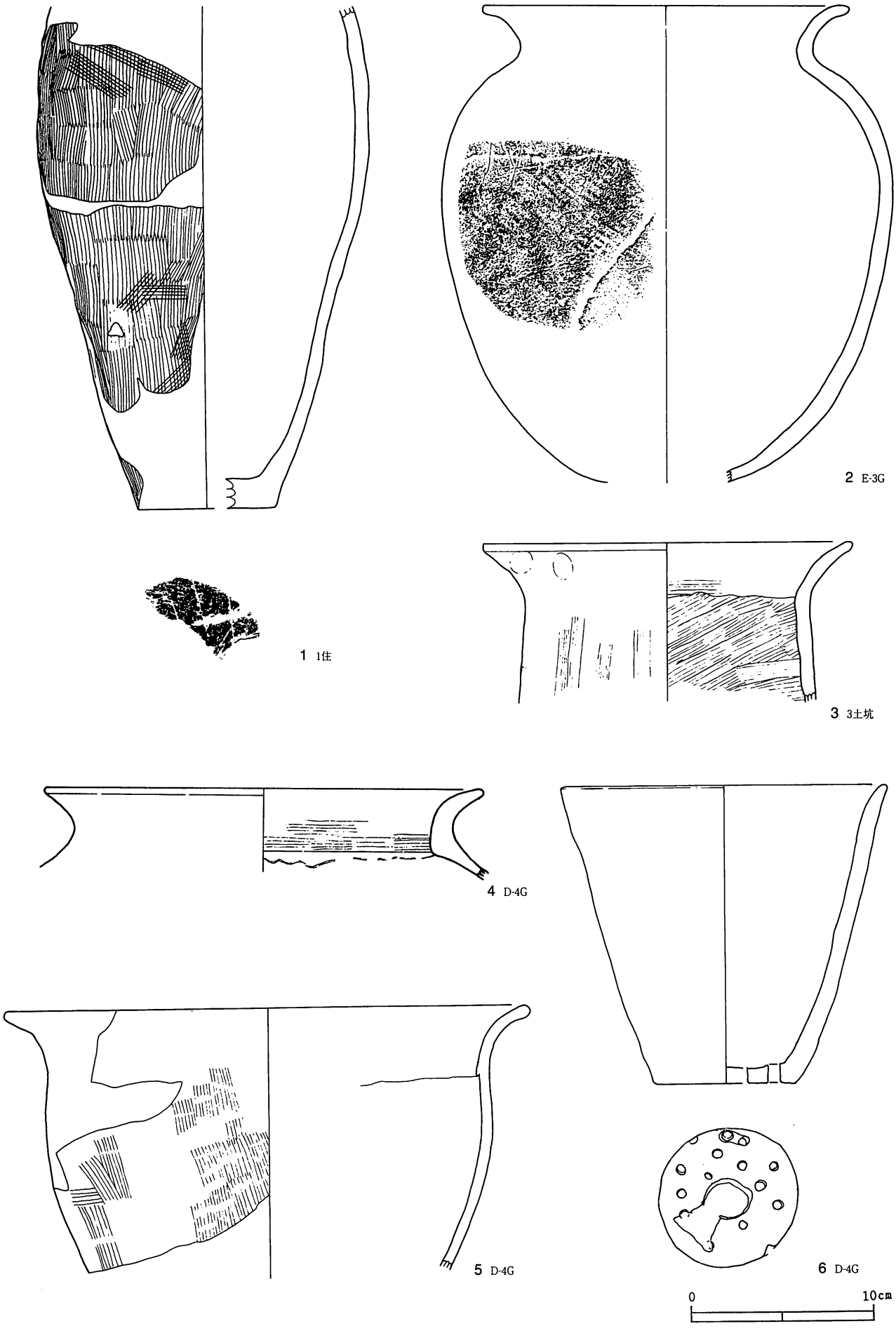
#### 第１号住居跡（第43図６）

６は甕である。口縁部から頚部にかけて欠損し、胴上半と下半は図面上で復元した。推定底径7.7cm。外面は縦ハケ調整、内面は輪積み痕を残して、横ハケ調整が施される。底面には木葉痕がみられる。色調はにぶい褐色を呈する。胎土は粗で、砂粒・赤色粒子・白色粒子・黒雲母を含む。焼成は良好。

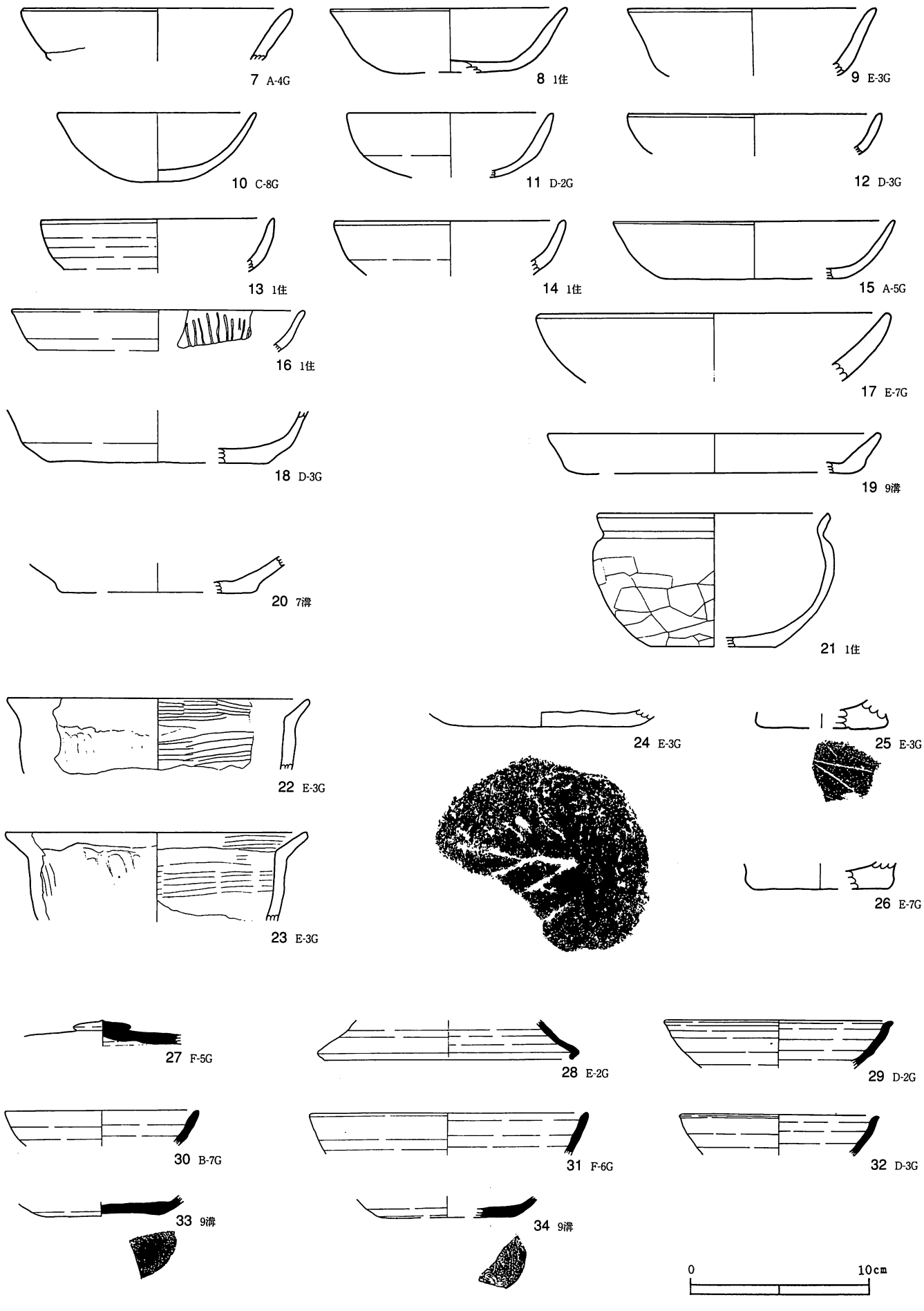
第44図７～34は、遺構外出土の土師器（７～26）、須恵器（27～34）である。７～18は坏、19は皿、20は高坏、21は鉢、22～26は甕である。24・25は底面に木葉痕を有する。27・28は蓋、29～34は坏である。

### 4　出土石器（第45図）

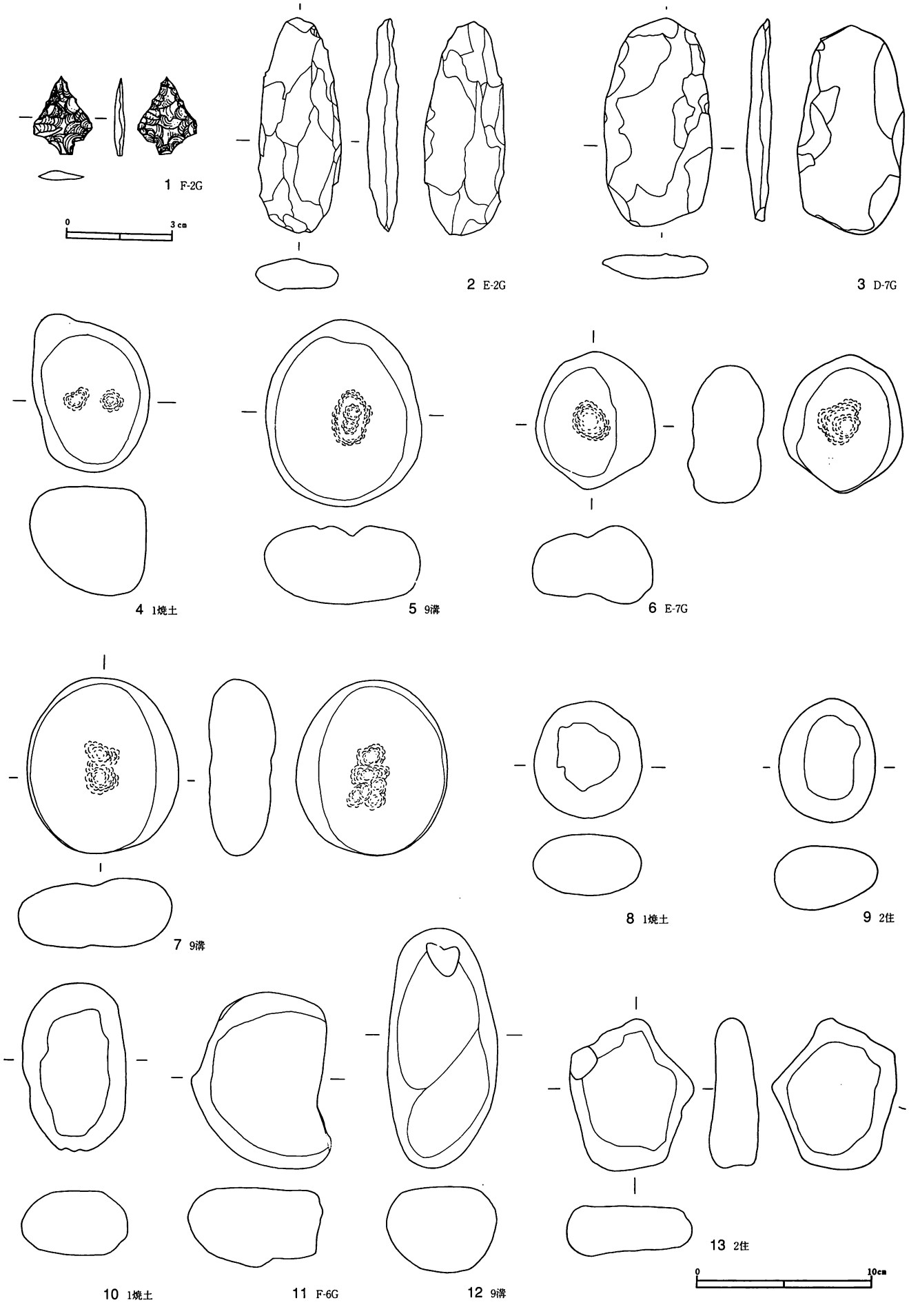
石鏃１、打製石斧２、凹み石４、磨石６である。１は有茎石鏃で、片側脚部端を欠損している。最大長2.2cm、現存幅1.6cm、最大厚0.4cm、重さ0.83ｇ。黒曜石製。２・３は打製石斧である。２は最大長12.3cm、最大幅4.6cm、最大厚1.8cm、重さ130ｇ。粘板岩製。３は最大長11.7cm、最大幅6.0cm、最大厚1.2cm、重さ130ｇ。泥岩製。４～７は凹み石である。４は最大長9.4cm、最大幅6.6cm、最大厚6.6cm、重さ440ｇ。５は最大長10.7cm、最大幅9.8cm、最大厚4.4cm、重さ580ｇ。６は最大長8.1cm、最大幅6.8cm、最大厚4.3cm、重さ300ｇ。７は最大長10.2cm、最大幅8.7cm、最大厚3.9cm、重さ480ｇ。８～13は磨石である。８は最大長6.7cm、最大幅6.2cm、最大厚3.5cm、重さ130ｇ。９は最大長7.1cm、最大幅5.5cm、最大厚3.6cm、重さ160ｇ。10は最大長9.7cm、最大幅６cm、最大厚3.8cm、重さ200ｇ。11は一部欠損している。最大長10cm、現存幅7.4cm、重さ369ｇ。12は最大長13.7cm、最大幅6.3cm、最大厚５cm、重さ440ｇ。13は最大長8.5cm、最大幅７cm、最大厚３cm、重さ240ｇ。砥石の可能性も考えられる。４～12は安山岩製。13は石英岩製。




第43図　出土土師器（1）



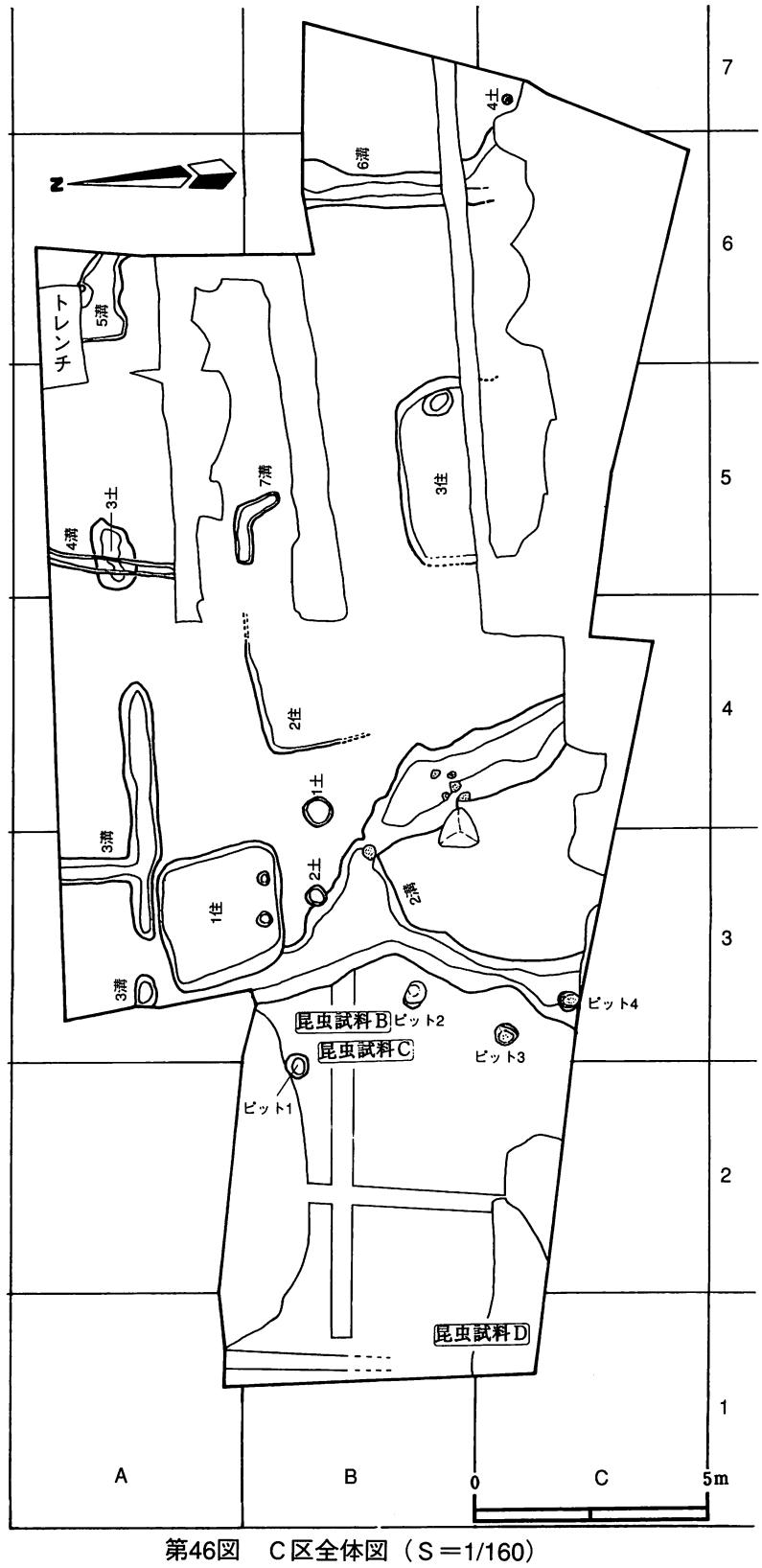

第44図　出土土師器（2）・須恵器


1 F-2G
0
3 cm
2 E-2G
3 D-7G
4 1焼土
5 9溝
6 E-7G
7 9溝
8 1焼土
9 2住
10 1焼土
11 F-6G
12 9溝
13 2住
0
10cm

第45図　出土石器

# 第Ⅴ章　C区の調査

本区の調査は、排土の都合から西・東側の２度に分けて行われた。また、西側調査区の北壁際で、第１号住居跡が、約２分の１発見されたため、東側を調査する時点でその北側部分を拡張した。基本層序（第47図）は、東側調査区のトレンチ（A－５・６G）北壁である。４～６層が遺物包含層である。第２号溝状遺構を境にして、西側には、６層が認められない。７層下の８層は暗褐色砂、９層は黒色砂、10層は黒色粘土層である。10層中からは多数の昆虫化石が検出された。調査中、降雨による湧水や、水はけの悪さのため、水中ポンプを使用した。




第46図　C区全体図（S＝1/160）

## 第１節　遺構

古墳時代後期から奈良時代の住居跡３、溝状遺構６、土坑４、ピット４を数える。

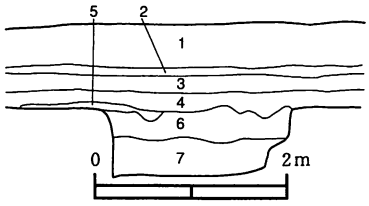
### １　住居跡

**第１号住居跡（第48図）**

A・B－３Gに位置する。形態は少し歪んだ隅丸方形。規模は東西、南北ともに2.2mを測る。壁高は、0.04～0.14m残存し、やや傾斜して立ち上がる。ピットは南壁際に２基並ぶ。東側のピット１は、径0.25mの円形を呈し、深さは0.3mを測る。西側のピット２は、径0.3mの円形で、深さは0.23mを測る。カマドは東壁の中央よりやや北よりに位置する。規模は、長軸、短軸ともに約１mである。北側袖は確認できなかった。焚き口と北側袖部分に炭化物が0.01～0.06m堆積している。火床部には、ほぼ完形の土師器甕１個体が潰れており、その下部には炭化物がひろがる。炭化物中の比較的大きいものについて樹種同定を行ったところ、燃料材と考えられるクヌギ節であった。炭化物上に焼け骨片が出土する。硬化面は確認できるが、明確な掘り込みはない。煙道は認められない。出土遺物は、古墳時代後期から奈良時代の土師器甕（第51図１）・坏（第51図４）、砥石（第53図１・２）、石錘（第53図３）である。

**第２号住居跡（第48図）**

A・B－４Gに位置する。形態は隅丸方形とおもわれるが、北壁は2.35m、西壁は1.5m残存するのみである。壁高は0.09～0.12m残存し、やや傾斜して立ち上がる。カマドは、東壁際とおもわれる位置の北端にあったとおも




1 盛土（コンクリート、砕石等）
2 黄褐色砂質土
3 黒褐色砂質土　炭化物粒（径1~4mm）含む
4 黒褐色砂質土　3層より砂を多く含む
5 黒褐色砂質土　炭化物粒（径2~5mm）含む
6 黒色土（若干砂質）
7 褐灰色土（粘性有り・砂質）

**第47図　C区基本層序（S＝1/40）**

われるが、遺存状態は非常に悪く、北と西側が撹乱により削平、上部の一部も撹乱をうけている。南北0.55×東西0.43mの範囲に構築土が残存している。カマドの周囲には、0.5～1.5cmの炭化材が散る。遺物は、古墳時代後期の坏（第51図3・5）である。

**第3号住居跡（第48図）**

B－5Gに位置する。中央を東西に走る撹乱により切られている。南側4分の1も撹乱に切られている。西壁は平面確認はできなかったが、セクションベルトの土層観察により、立上りを確認した。形態は隅丸方形を呈するとおもわれるが、北壁3.3m、東壁2.6mが残存するのみである。壁高は0.05～0.08m残存し、やや傾斜して立ち上がる。北東隅に深さ約0.09mの浅い落ち込みを確認したが、本遺構に伴う施設かどうかは明かではない。カマドは発見されず、また焼土なども確認できなかったが、覆土中に炭化物が多く含まれる。遺物は古墳時代後期の土師器甕破片（小破片のため図示できない）、須恵器鉢（第51図7）が出土している。

**第4号住居跡（第48図）**

B－4・5G、第3号住居跡の西隣に位置する。プランは不明で、カマドの痕跡のみ残る。0.85×0.25mの範囲に不整形に焼土が拡がり、その焼土より南にずれて、土師器長胴甕1個体（第51図2）が、潰れたように出土、さらに南に0.5m離れて、球胴甕の胴上部2分の1（第51図6）が潰れて出土した。周囲には炭化物が散る。

## 2　溝状遺構

溝状遺構は全部で6条発見された。第1号溝状遺構は調査の途中で欠番とした。時期決定は難しいが、第2号溝状遺構が第1号住居跡の掘り込まれている層の下層に続くことから古墳時代後期よりも古い時期に存在していたことがわかる。また、第3～7号溝状遺構は、住居跡と同一層中に掘り込みが確認された。溝状遺構の走る方向、形態から第2・5号溝状遺構は自然流路、第3・4・6・7号溝状遺構は人為的なものとおもわれる。

**第2号溝状遺構（第49図）**

A～C－3・4Gに位置し、第1号住居跡の掘り込みの下に続く。南から流れる2本の流路が合流し、北に向かって調査区外に伸びる。幅は0.5～2.7mと差があり、合流する部分では最大である。深さは約0.05～0.3mを測る。覆土は、砂層と土の互層をなす。北東から南西に向かい第1号住居跡の南側で北西に蛇行している。遺物はないが、覆土中からの出土材を樹種同定したところ、ヒノキ科であった。

**第3号溝状遺構（第49図）**

A－3・4Gに位置する東西、南北2本の直交する溝状遺構をいう。東から西に走る6.7mのほぼ直線的な溝状遺構の中央で北から南に向かう南北1.5mの溝状遺構にほぼ直交する。北側と西側は調査区外に伸びる。幅0.45～0.7m、深さは0.08～0.25mを測る。第1号住居跡の北東角に近接する部分では、第1号住居跡を避けている様子が窺われ、同時期の可能性が考えられよう。遺物はなし。

**第4号溝状遺構（第49図）**

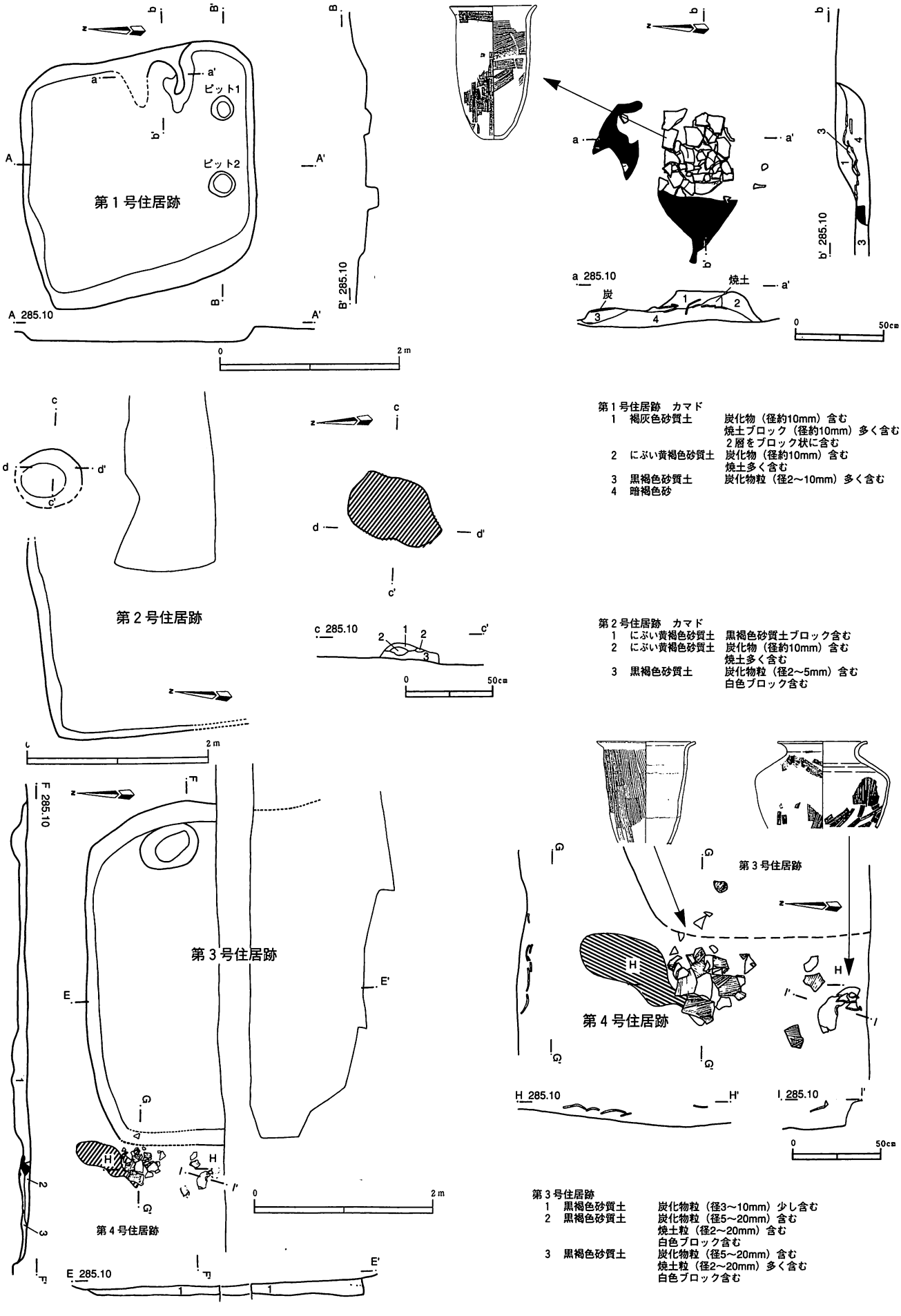
A－5Gに位置する。ほぼ北から南に向かい、直線に走る。北側は調査区外、南側は撹乱に切られる。また、第3号土坑を切っている。長さ2.7m、幅0.25～0.35m、深さ0.06～0.1mを測る。遺物はなし。

**第5号溝状遺構（第49図）**

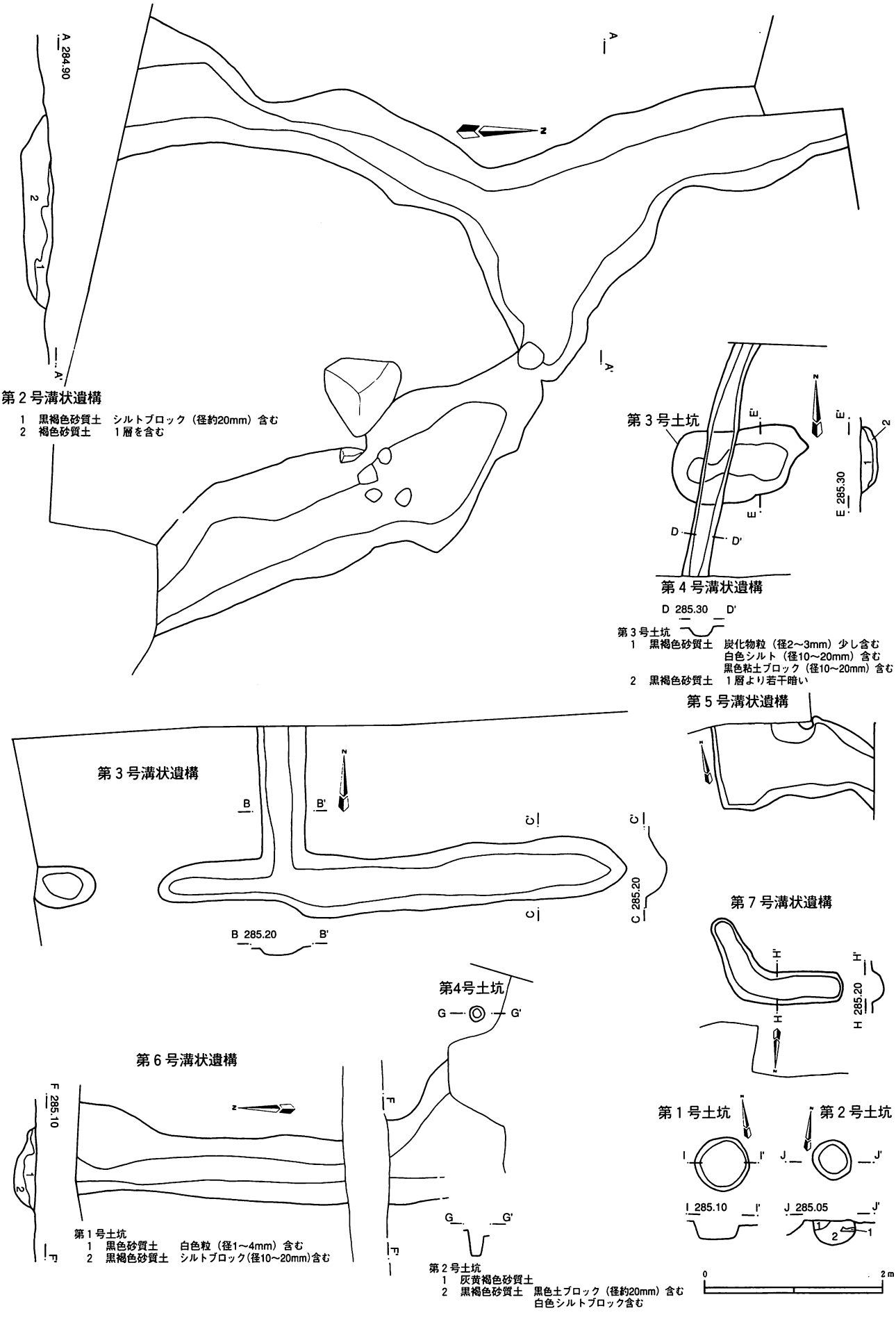
A－6G、調査区北東隅において発見された。東から西に向かい途中で、北に方向を変える。約2mの長さで、東から西に1.7m走って北に向かう。深堀トレンチにぶつかるが、その先は壁のセクションをみても認められない。幅0.5～1m、深さは約0.1mを測る。遺物は古墳時代後期の土師器坏（第54図2・3）が出土している。

**第6号溝状遺構（第49図）**

B－6Gに位置し、ほぼ南北に流れる。北側は調査区外に伸び、南側は北端から3.5mの所で、南東に方向を変




第48図　第１～４号住居跡平面図




第49図　第２～７号溝状遺構・第１・２号土坑平面図

え撹乱にぶつかる。長さ約４ｍ、幅は0.65～1.05m、深さ0.25mを測る。覆土に炭化物が混入する。遺物はなし。

**第８号溝状遺構（第49図）**

Ａ・Ｂ－５・６Ｇに位置する。くの字状を呈する。長さ約1.8m、幅0.25～0.4m、深さ0.08～10.8mを測る。遺物はなし。

**３　土坑**

４基の土坑を確認したが、遺物はなく、時期は不明である。

**第１号土坑（第49図）**

Ｂ－４Ｇに位置し、0.6×0.5mの長円形を呈する。深さは0.2mを測る。遺物はなし。

**第２号土坑（第49図）**

Ｂ－３Ｇに位置する。径約0.5mの円形を呈し、深さは0.28mを測る。遺物はなし。

**第３号土坑（第49図）**

Ａ－５Ｇに位置し、４号溝状遺構に切られている。1.6×0.8mの不整形を呈し、深さは0.28mを測る。遺物はなし。

**第４号土坑（第49図）**

Ｃ－７Ｇに位置する。径0.18mの円形を呈し、深さは0.3mを測る。遺物はなし。

**４　ピット（第50図）**

Ｂ・Ｃ－２・３Ｇにて４基確認した。上部の構造を想定することはできないが形態からピットと称する。掘り込みを確認した層は、２号溝状遺構と同じ面であるが、その上層は撹乱を受けており、本来の掘り込みがどこからかは不明である。覆土はいずれも黒褐色砂質土（Ｃ区　基本層序５層）であり炭化物粒を含む。出土遺物はなし。時期は決定できないが、４基のピットは形態、規模、覆土から同時期に存在したものとおもわれる。

**第１号ピット**

径約0.5mの不整円形を呈し、深さは0.12mを測る。

**第２号ピット**

第１号ピットの南東約３ｍに位置し、0.58×0.42mの長円形を呈し、深さは0.1mを測る。ピット内の北東寄りに、径約25cm、厚さ約７cmの扁平な丸石が底よりややめりこんだ状態で確認された。

**第３号ピット**

第２号ピットの南南西約２ｍに位置し、径約0.5mの不整円形を呈し、深さは0.1mを測る。30×25cm、厚さ約８cmの扁平な不整形の石が、底に認められた。

**第４号ピット**

第３号ピットの南東約１.５ｍに位置し、0.5×0.42mの長円形を呈し、深さは0.07mを測る。34×22cm、厚さ約12cmの扁平な長円形の石が掘り込みの底に半分程めりこんで認められた。

## 第２節　遺物

遺物は、遺構別、時期別に図示できるもの全てを図示するよう努めた。以下、時期別に記述する。

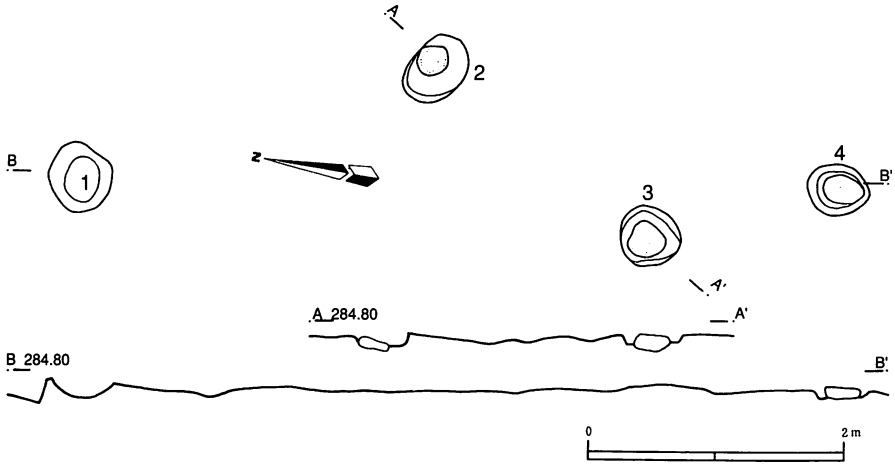
**１　出土縄文土器（第52図１～８）**

前期中葉から中期初頭の土器片が出土している。いずれも磨滅している。

**２　出土弥生土器**

本区からは、若干後期の櫛描波状文が描かれる土器片が出土している。小破片のため図示できない。

**３　出土土師器・須恵器（第54図）**




第50図　第１～４号ピット平面図

**第１号住居跡（第51図１・４）**

１は土師器長胴甕である。約５分の４残存する。口径21.4cm、器高31.6cm、底径4.7cmを測る。外面の口縁部は横方向のハケ調整、胴部は縦方向のハケ調整が施される。内面は、横・斜方向のハケ調整が施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は粗で、白色粒子・赤色粒子・黒雲母を多く含む。焼成は良好。４は土師器坏の底部破片である。推定底径13.4cmを測る。体部外面に縦方向のヘラミガキが、底部はヘラ削りが施される。色調はにぶい橙色を呈する。胎土は緻密で、赤色粒子を多く含む。焼成は良好。

**第２号住居跡（第51図３）**

３は土師器坏である。約２分の１残存する。口径15cm、器高4.5cm、底径5.7cmを測る。底面の周囲にヘラ削りを残す。内・外面はナデ調整が施される。色調は橙色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・小石を多く含み、白色粒子を少量含む。焼成は良好。５は底部丸底の土師器坏である。４分の３が残存する。口径13.8cm、器高5cmを測る。体部下半はヘラ削り、内面はナデ調整が施される。見込み部に黒褐色付着物を伴うハケメがみられる。色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密で、砂粒・金雲母・赤色粒子を多く含む。焼成は良好。

**第３号住居跡（第51図７）**

７は須恵器鉢である。３分の１残存する。推定口径18cmを測る。器体部内・外面はナデ調整が施される。色調は灰色を呈する。胎土は緻密で、白色粒子・赤色粒子を多く含む。焼成は良好。

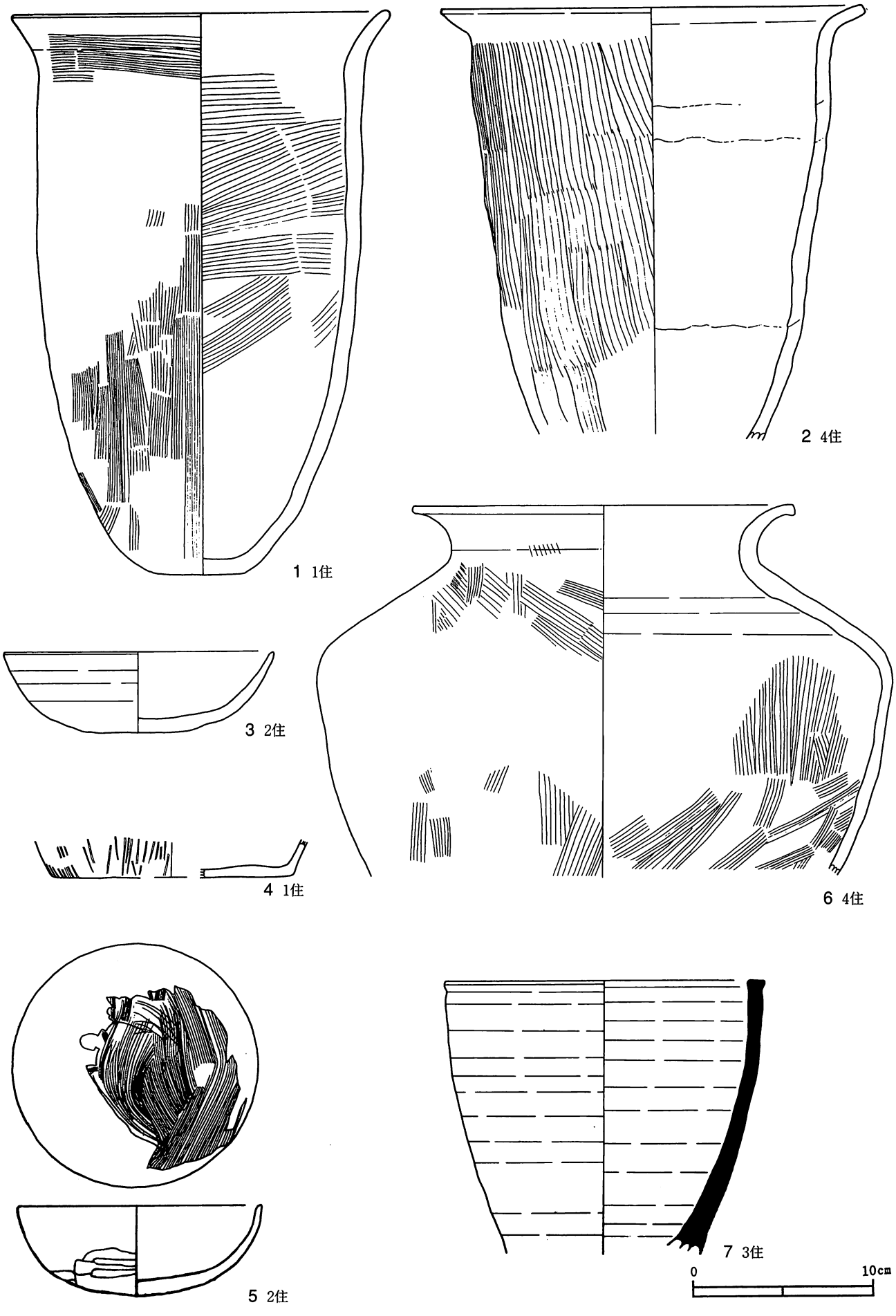
**第４号住居跡（第51図２・６）**

２は土師器長胴甕である。３分の１残存する。推定口径23cmを測る。口縁部は横方向のナデ調整、体部外面は縦方向のハケ調整を施し、内面は輪積み痕を残す。色調は灰黄褐色を呈する。胎土はやや粗で、砂粒・赤色粒子を多く含む。焼成は良好。６は土師器甕である。約５分の１残存する。推定口径21.6cmを測る。口縁部ナデ調整、頚部下は斜・縦方向のハケ調整、内面の胴上部は横方向のナデ調整、下部は縦・横・斜方向のハケ調整が施される。色調は橙色を呈する。胎土はやや粗で、白色粒子・赤色粒子を多く含む。焼成は良好。

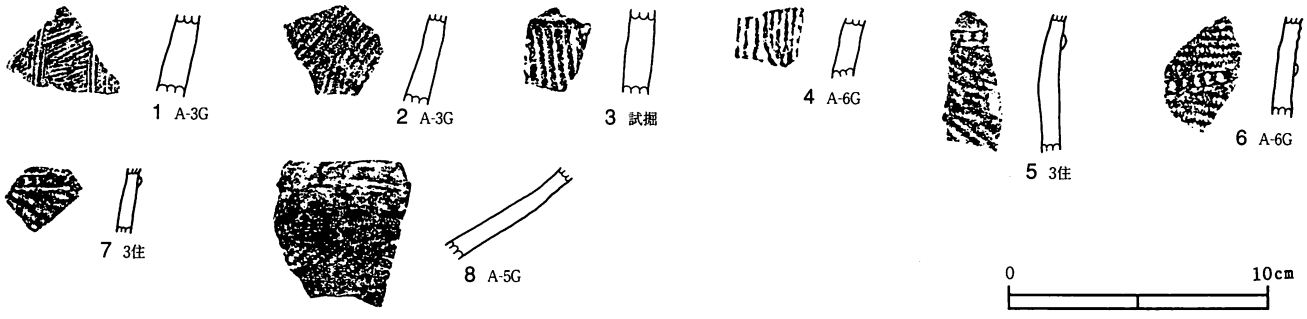
第54図１～27は遺構外出土の土師器（1～23）・須恵器（24～27）である。
１～21は坏、22・23は甕、26・27は須恵器坏、24・25は蓋である。

## ４　出土石器（第53図）

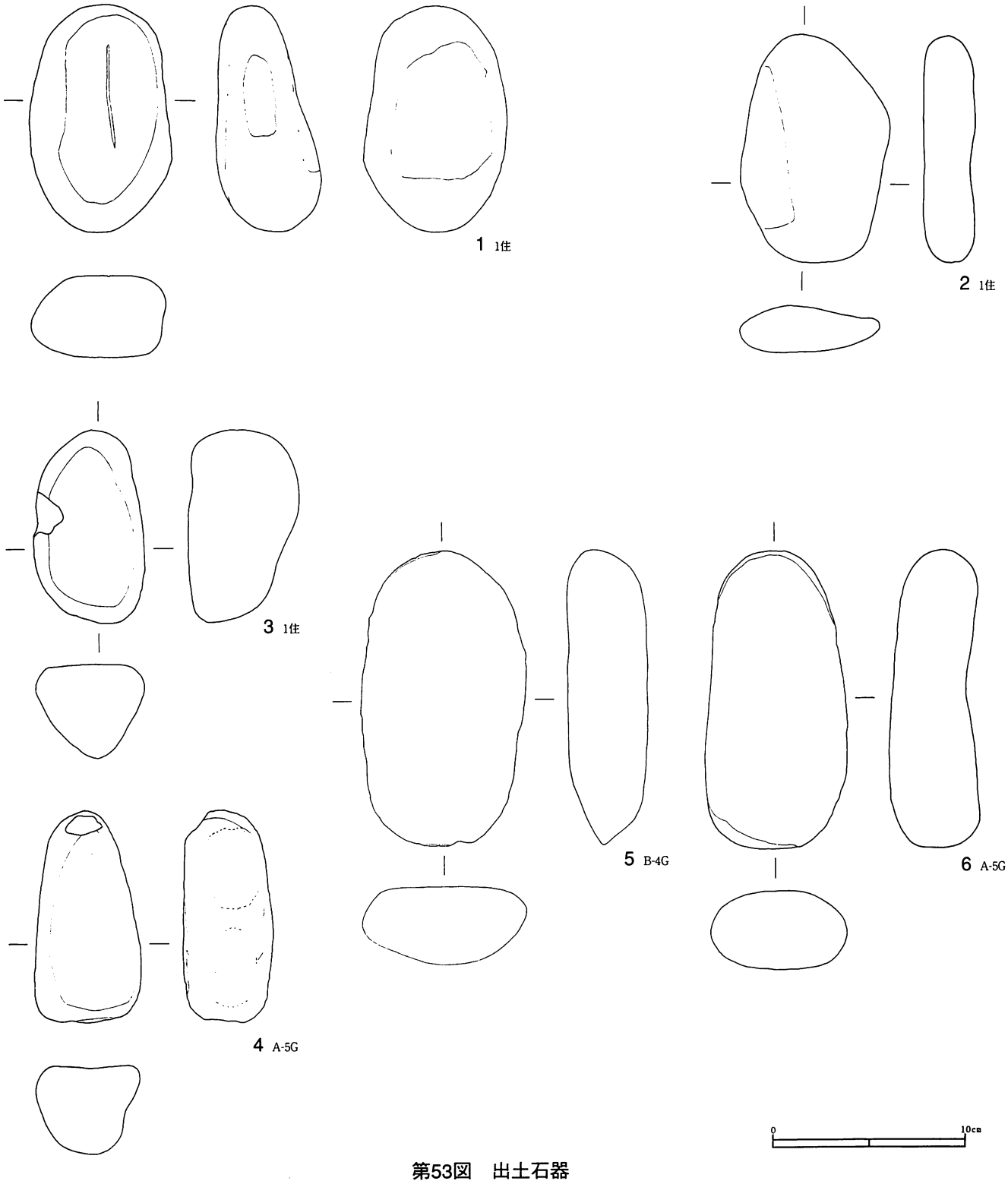
１号住居跡から出土した砥石２、錘１のほかは遺構外から出土した磨石３である。１・２は砥石である。１は最大長11.7cm、最大幅7.3cm、最大厚5.2cm、重さ553ｇ。安山岩製。第１号住居跡出土。２は最大長11.8cm、最大幅7.3cm、最大厚2.7cm、重さ344ｇ。デイサイト製。第１号住居跡出土。３は石錘である。最大長9.9cm、最大幅5.5cm、最大厚5.6cm、重さ412ｇ。片側に2.2×2.7cm、0.5cmの抉りが入っている。デイサイト製。第１号住居跡出土。４～６は磨石である。４は最大長11.1cm、最大幅5.6cm、最大厚4.6cm、重さ378ｇ。安山岩製。Ａ－５Ｇ出土。５は最大長15.4cm、最大幅8.5cm、最大厚4.0cm、重さ828ｇ。カコウ岩製。Ｂ－４Ｇ出土。６は最大長15.5cm、最大幅7.2cm、最大厚4.0cm、重さ733ｇ。砂岩製。Ａ－５Ｇ出土。



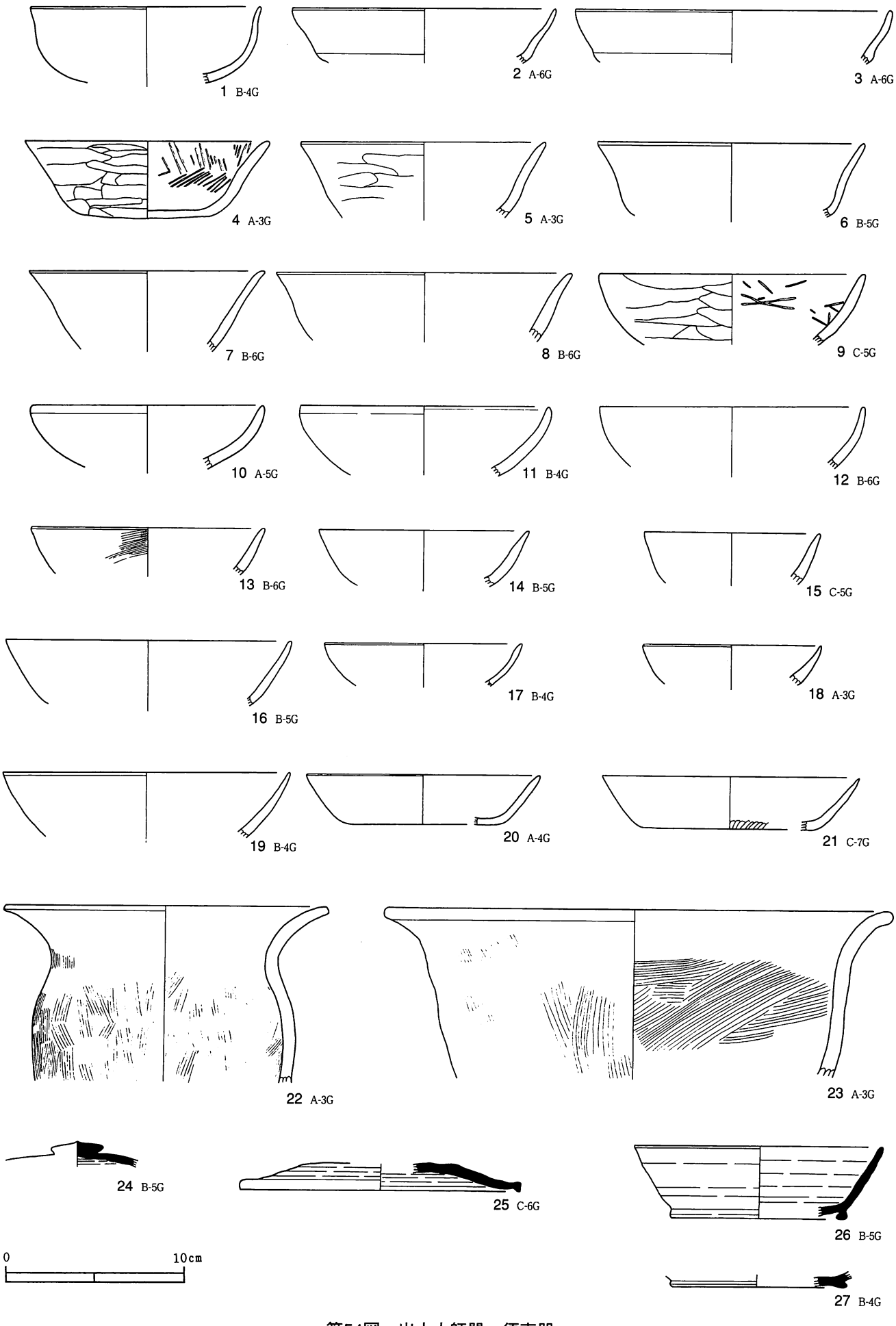

第51図　住居跡出土土器




第52図　出土縄文土器




第53図　出土石器




第54図　出土土師器・須恵器

# 第Ⅵ章　まとめ

ここでは、本遺跡における主な時代について出土遺物から若干の整理をおこなってみたい。

**・縄文時代**

本遺跡において該期の遺物は、遺構には伴っていないが、前期末の諸磯ｂ・ｃ式期、十三菩提式期、中期初頭の五領ヶ台式期、後期の称名寺式・堀之内式期が出土している。本遺跡の北西約1.2㎞の1992年度に発掘調査された榎田遺跡でも、前期末、中期初頭、後期の土器片が検出されており、中期初頭の土坑３基が検出されている。これは、本遺跡から検出されている遺物とほぼ同時期であり注目される。また、1995年度に調査された塩部遺跡でも中期初頭の五領ヶ台式の土器片や、石鏃などが出土している。本遺跡付近には、著名な加牟那塚古墳をはじめとし、かつては相当数の古墳が存在していたことが知られており、古墳群や弥生時代～平安時代の遺物が採集できる遺跡の多いことは知られている。しかし、今回の調査によって、出土している該期の土器は微量ではあるものの、この周辺地域に該期の生活の痕跡があることを意味しており、非常に貴重な資料である。今後、周辺地域での調査が期待される。

**・弥生時代**

本遺跡の中心となる該期の遺構は、住居跡や土坑・溝状遺構が検出されている。出土遺物から、弥生時代後期の遺物を中心とし、長野県を中心とする分布域を持つ頸部に羽状の刻みを持つ後期前半の吉田式や、頸部から胴部上半に櫛描波状文を伴う後期後半の箱清水式を中心とし、後期前半～後半の東海系の菊川式の土器も数点見られる。箱清水式については、敷島町金の尾遺跡の集落は著名である。また、２点ほど菊川式の高坏と考えられる土器片もA区から出土している。また、磨製石鏃がＡ区の第２・３号住居跡をはじめとして合計６点ほど出土している。これについて県内の出土例を見ると、東八代郡中道町の東山北遺跡・上の平遺跡、八代町の儘ノ下遺跡・身洗沢遺跡、中巨摩郡敷島町の金の尾遺跡、韮崎市の坂井南遺跡、北巨摩郡長坂町の柳坪遺跡などでの出土例が知られているが、本遺跡のようにＡ区のみの出土でありながら６点出土している点で注目される。

もう一つ特筆すべきは、底部の布目痕を有する土器の出土である。Ａ区より12点（内10点図示）、Ｂ区より５点出土している。県内ではこれまで大月市宮谷遺跡出土の１点のみであった。これは、東海地方の条痕文系土器に伴出しており、１㎝あたりの経緯は14×11と報告されている。東日本では愛知県から宮城県までの地域で確認されているが、隣接する長野県では14遺跡、神奈川県では７遺跡から出土例がある。

**・奈良時代**

ここでは、Ａ区において出土している第５号住居跡の硯（須恵器甕転用硯）（第24図９）について県内の状況をふまえて若干ふれてみたい。本遺跡出土の硯は、楕円もしくは円形を呈すると思われるが、1/2が欠損している。側面には、整形時に打撃側面加工後、磨って整形した痕跡がみられる。内面には、墨を磨った痕跡や中心部には墨の痕跡もみられる。本遺跡から墨書土器などは１点も出土していない。これは、本遺跡が広範囲にまたがる音羽遺跡のほんの一部分であり、本遺跡の全体像をつかむに至っていないことから、周辺の資料の増加が望まれる。県内の出土状況をみてみると、東八代郡一宮町北堀遺跡・東原遺跡・大原遺跡・北中原遺跡、東八代郡石和町松本塚ノ越遺跡、韮崎市宮ノ前遺跡、敷島町天狗沢瓦窯跡、都留市牛石遺跡で出土例がある。北堀遺跡の出土品は、平安期のもので土師の風字硯で硯頭部分を欠損し、脚は２本存在していたと思われるが１本が現存し、使用の痕跡が明瞭に残る硯である。東原遺跡№313地点では奈良時代に位置づけられる須恵器坏蓋による転用硯が出土しているとされる。北中原遺跡では、平安期の須恵器甕・灰釉陶器を利用した転用硯が出土している。また、大原遺跡でも硯がいくつか出土しており、風字硯や須恵器甕の胴部破片を硯として使用した転用硯が出土し

ている。松本塚ノ越遺跡では、須恵器の四耳壺の破片を用いた転用硯１点が出土している。宮ノ前遺跡では須恵器円面硯３点、須恵器転用硯１点が出土している。天狗沢瓦窯跡では脚部片１点、硯面片１点出土しているが２点は同一個体とされ、円面硯としている。都留市牛石遺跡では第１次調査で奈良・平安時代の集落が検出されている。調査結果が公表されていないが、須恵器製円面硯脚部の破片が出土しているとされる。

**・おわりに**

現在の甲府市及びその周辺の平坦部は、宅地化や商業化が進み耕地として残されている部分はほとんど少ない。このため、遺跡の把握が非常に困難な地域であることは否めない。しかし、河川により形成された自然堤防上あるいは微高地上に遺跡が存在していることは、第１章の遺跡分布図からも伺える。本遺跡周辺部には弥生時代～平安時代にかけての遺跡が多く存在し、特に加牟那塚古墳や万寿森古墳に代表され「千塚」という地名が示すとおり、今は消滅しているものの、かつて相当数の古墳が存在していたとされ、このことからこの地域に相当根強い経済力や政治基盤をもった勢力の台頭が伺える。また、本遺跡の北西約1.2kmの1992年に発掘調査された榎田遺跡や、1995年に調査された塩部遺跡でも、前期末～中期初頭の土器片や黒曜石製の石鏃が僅かではあるが出土している。本遺跡からも、縄文時代前期末、中期初頭、中期末、後期の土器片が遺構には伴っていないものの検出されている。このことは、周辺に該期の集落や生活の痕跡を伺わせる貴重な資料であることは間違いなく、今後の周辺部における発掘調査に期待がもてる。

今回の発掘調査は、広範囲にまたがる遺跡として知られている音羽遺跡の僅かな一部で、本遺跡の全体像をつかむには至っていない。前にも述べたように本遺跡周辺には数多くの遺跡が確認されており、今後も開発などに伴い発掘調査が行われる可能性が高い。本遺跡が、前述の榎田遺跡や塩部遺跡などと共に、甲府盆地北部の「千塚・湯村地区」の古代を考えていく上で大きな役割を果たすものとなるであろう。

**【参考文献】**


奈良国立文化財研究所・埋蔵文化財センター　1983　『埋蔵文化財ニュース』「陶硯関係文献目録」

山梨県教育委員会ほか　1985　『北堀遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第７集

敷島町教育委員会ほか　1990　『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』

一宮町教育委員会ほか 1990　『大原遺跡発掘調査概報』

石和町教育委員会ほか 1990 『松本塚ノ越遺跡』石和町埋蔵文化財調査報告　第１集

韮崎市教育委員会ほか　1992　『宮ノ前遺跡』

甲府市教育委員会　　1992　『甲府市遺跡地図』

山梨県教育委員会ほか 1993　『東山北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第79集

新宿区区民健康村遺跡調査団　1994　『健康村遺跡』

山梨県教育委員会ほか　1995　『北中原遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第99集

山梨県教育委員会ほか 1995　『榎田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第105集

山梨県教育委員会　　1996　『塩部遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第123集

帝京大学山梨文化財研究所 1996　『帝京大学山梨文化財研究所研究報告　第７集』

宮沢公雄　「古代における山峡地域開発の一様相」－甲斐東辺部地域における土器様相から－p239～p265

中央自動車道考古学調査団　1966　『発掘調査の実施結果に基づく発掘調査報告書』

山本寿々雄　　1968　『山梨県の考古学』

大島慎一　　1996　『ＹＡＹ！（やいっ！）』「東日本の布目痕土器」

# 附　編

## 音羽遺跡より得られた昆虫群集について

森　勇一（愛知県立明和高等学校）

### 1　はじめに

昆虫はすべての生物群のなかで最も種数が多く、水中（水生昆虫）、地表面（地表性歩行虫）、植物上（樹上性昆虫）など、多様な生活空間に適応して生活している。食性も食植性から、食肉性・食糞性・食屍性など多岐にわたる。

先史～歴史時代における人間による自然改変によって、自然界に生息する動植物は多大な影響を受けた。とりわけ弥生時代以降、広域かつ組織的に実施された農耕地と居住空間の開発によって、そこに生息していた生物は新しく出現した人為環境に適応するため、食性を変化させて種の保存を図るか、他の生息場所に移動するかの二者択一をせまられたのである（森、1994・1997a・1997b）。

小論では、山梨県音羽遺跡の遺物包含層および遺跡基盤層中より得られた昆虫化石（昆虫遺体ともいう）の分析結果をもとに、甲府盆地における先史時代を中心とした昆虫相と、これらより推定される古環境について考察する。

### 2　分析資料および方法

音羽遺跡は甲府盆地北部の荒川左岸に位置し、標高約290mの弥生時代後期から奈良時代を中心とした集落遺跡である（第２図）。分析試料は、Ｂ区南東部の第12号溝状遺構覆土下位より採取した１試料（Ａ試料）、Ｃ区西側に分布する黒色粘土層およびその上面より採取した３試料（試料Ｂ～Ｄ）の計４試料である。試料Ａは弥生時代後期より以前とされ、生成年代の詳細は現時点では明かになっていない。試料Ｂ～Ｄは弥生時代より奈良時代に至る時期に堆積したとされる。分析試料は、試料Ａは暗褐色腐植質シルト層、試料Ｂ～Ｄはいずれも黒褐色の粘土質シルト層であった。分析試料の湿潤重量は試料Ａでは25.9kｇであったが、試料Ｂ～Ｄについては遺跡発掘の過程で産出したものであり、湿潤重量は測定されていない。第25・46図に、遺構配置図および試料採取地点を示した。

昆虫化石の抽出は主にブロック割り法によった。昆虫化石の検出にあたってはアサヒペンタックス単眼顕微鏡（20倍）を利用し、実体顕微鏡下でクリーニングののち、一つずつの節片について筆者採集の現生標本の各部位と顕微鏡下で比較・検討しながら同定した。

### 3　分析結果

音羽遺跡より産出した昆虫の抽出・分析作業は未完成であるが、これまでに同定された昆虫化石（節片ないしは破片数）は計178点、試料ごとでは試料Ａが158点、試料Ｂが5点、試料Ｃが12点、試料Ｄが３点であった。産出した昆虫化石のリストを表１に、主な昆虫化石の顕微鏡写真を図版１に掲げた。

検出された昆虫は、そのほとんどが鞘翅目（COLEOPTERA）に属する鞘翅（Shard）・前胸背板（Pronotum）等の節片よりなり、鞘翅目以外ではカメムシ目（HEMIPTERA）が８点、双翅目（DIPTERA）が４点、アリ科（FORMICIDAE)が２点含有される。

産出化石のうち、科レベルまで同定できたもの12科60点（33.7%）、４亜科９点（5.1%）、層レベル６層17点（9.6%）、種レベル25種64点（35.9%）であった。なお、目レベルでとどめたものは２目６点（3.4%）であり、不明甲虫としたものは22点（12.3%）であった。

生息環境および生態による分類では、食肉性および食植性の水生昆虫１科２亜科８種計15点（8.4%）、食糞性ないし食屍性昆虫１科２層３種計17点（9.6%）、雑食性および食肉性の地表性歩行虫３科３属４種計31点（17.4%）、

陸性の食植性昆虫１目６科２亜科１属10種の計91点（51.1％）であった。その他の昆虫片は24点（13.5％）であった。

試料ごとにみると、試料Ａでは食植性昆虫を主体に地表性歩行虫をまじえる群集組成であり、試料Ｂ～Ｄでは産出点数が少ないので群集組成の特徴を読みとることは困難であるが、止水性ないし湿地性の水生昆虫の出現率が比較的高かった。

種組成でみると、試料Ａではドウガネブイブイ　*Anomala cuprea*（18点）、ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea*（２点）、マメコガネ　*Popillia japonica*（２点）、サクラコガネ層　*Anomala sp.*（５点）など、主に樹葉や草本類などの葉を食害する食葉性昆虫が多数認められた。また、本群集にはアオカナブン　*Rhomborrhina unicolor*（１点）、クワガタムシ科　*Lucanidae*（８点）、オオクワガタ　*Dorcus hopei*（１点）、ルリクワガタ　*Platycerus delicatulus*（１点）、カブトムシ　*Allomyrina dichotoma*（２点）など、クヌギやコナラなどの樹液に集まる昆虫化石が含有されることが特筆される。これにオオマグソコガネ　*Aphodius haroldianus*（２点）、マグソコガネ *A. rectus*（５点）およびエンマコガネ層　*Onthophagus sp.*（５点）などの食糞性昆虫や、エンマムシ科　*Histeridae*（３点）、モモブトシデムシ　*Necrodes nigricornis*（１点）などの食屍性昆虫が伴われた。

試料Ｃでは、フトネクイハムシ　*Donacia clavareaui*（１点）、キヌツヤミズクサハムシ　*Plateumaris sericea*（１点）をはじめ計４点のネクイハムシ亜科 *Donaciinae*や、タマガムシ *Amphiops mater*（１点）、コガムシ *Hydrochara affinis*（１点）などの水生昆虫が出現した。

## ４　推定される古環境

試料Ａでは食植性昆虫の出現率が高く、とりわけクヌギやコナラなどの落葉広葉樹に依存して生活する昆虫化石が多数検出された。最も多く発見されたドウガネブイブイは本来、落葉広葉樹の葉を食する食葉性昆虫として知られ、随伴するヒメコガネ・マメコガネなども樹葉上にしばしば認められる植生依存型昆虫である。オオクワガタ・ルリクワガタ・カブトムシ・アオカナブンなどの食植性昆虫、およびキマワリ *Plesiophthalmus nigrocyaneus*・ユミアシゴミムシダマシ *Promethis valgipes*などの地表性歩行虫も、森林植生の存在を強く示唆する昆虫である。このため、試料Ａの堆積した弥生時代後期以前には、音羽遺跡の周辺にコナラやクヌギ、これにブナなどをまじえる落葉広葉樹林が成立していたものと考えられる。また、本群集に豊富な食糞ないし食屍性昆虫が伴われることより、この時期の林には草食獣（人を含む）がときおり訪れていたことが推定される。

その後、弥生時代から奈良時代にかけ、この地域の少なくとも一部は湿地化し水生昆虫の生活する舞台となった。試料Ｃには冷温帯に分布の中心を有するキヌツヤミズクサハムシ・フトネクイハムシなどのネクイハムシ類が認められることから、現在よりいくぶん冷涼な気候の時期があったと考えられる。そして、試料Ｄ（黒色粘土層）が堆積する頃には、撹乱環境を好むセアカヒラタゴミムシ　*Dolichus halensis*が出現するようになり、人為度の高い環境に移り変わったことが考えられる。

## 謝　辞

小文を草するにあたり、以下の方々にお世話になった。心よりお礼申し上げる。服部恵子（愛知県埋蔵文化財センター）・宇佐美美幸（同）・鬼頭　剛（同）・新津　健（山梨県埋蔵文化財センター）・田口明子（同）。

## 文　献

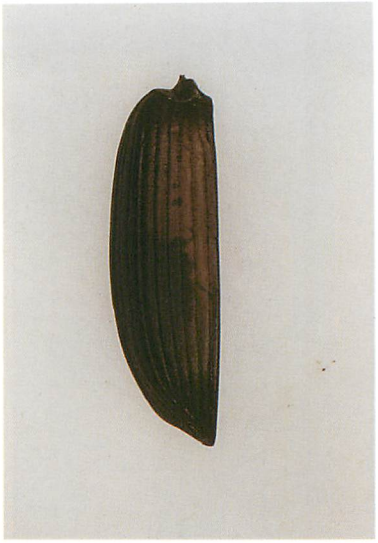
森　勇一（1994）　昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元.第四紀研究、33（5）、331-349.
森　勇一（1997ａ）　虫が語る日本史－昆虫考古学の現場から（１）－.インセクタリウム、34（１）、18-23.
森　勇一（1997ｂ）　虫が語る日本史－昆虫考古学の現場から（２）－.インセクタリウム、34（２）、10-17.

## 表1　山梨県音羽遺跡から産出した昆虫化石

| 生態 | | 和名 | 学名 | 試料A 12号溝覆土 | 試料B 黒色粘土層 (B-3G) | 試料C 黒土 (B-3G) | 試料D 黒色粘土層上面 (C-1G) | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 水生昆虫 | 食肉 | ゲンゴロウ科 | DYTISCIDAE | P1 | | | | 1 |
| | | ヒメゲンゴロウ亜科 | COLYMBETINAE | T1 | | | | 1 |
| | 食植性 | ガムシ | *Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY | | H1 | | | 1 |
| | | コガムシ | *Hydrochara affinis* (SHARP) | | | L1 | | 1 |
| | | ヒメガムシ | *Sternolophus rufipes* (FABRICIUS) | | W1 | | W1 | 2 |
| | | タマガムシ | *Amphiops mater* SHARP | | | W1 | | 1 |
| | | セマルガムシ | *Coelostoma stultum* (WALKER) | W1 | W1 | | | 2 |
| | | ヒメセマルガムシ | *Coelostoma orbiculare* (FABRICIUS) | W2 | | | | 2 |
| | | ネクイハムシ亜科 | DONACIINAE | | | W1 L1 | | 2 |
| | | フトネクイハムシ | *Donacia clavareaui* GOECKE | | | W1 | | 1 |
| | | キヌツヤミズクサハムシ | *Plateumaris sericea* LINNE | | | W1 | | 1 |
| 地表性歩行虫 | 食糞・食屍性 | エンマコガネ属 | *Onthophagus* sp. | P1 W1 A2 L1 | | | | 5 |
| | | マグソコガネ属 | *Aphodius* sp. | W1 | | | | 1 |
| | | オオマグソコガネ | *Aphodius haroldianus* BALTHASAR | W2 | | | | 2 |
| | | マグソコガネ | *Aphodius rectus* (MOTSCHULSKY) | P1 W4 | | | | 5 |
| | | エンマムシ科 | HISTERIDAE | P1 W2 | | | | 3 |
| | | モモブトシデムシ | *Necrodes nigricornis* HAROLD | P1 | | | | 1 |
| | 食肉及び雑食性 | ゴミムシ科 | HARPALIDAE | H1 P1 W3 A7 | | W1 | | 13 |
| | | セアカヒラタゴミムシ | *dolichus halensis* (SCHALLER) | | | | W1 | 1 |
| | | ツヤヒラタゴミムシ属 | *Synuchus* sp. | W1 | | | | 1 |
| | | アオゴミムシ属 | *Chlaenius* sp. | | P1 | | | 1 |
| | | ハネカクシ科 | STAPHYLINIDAE | H1 P1 W1 A2 | | | | 5 |
| | | キマワリ属 | *Plesiophthalmus* sp. | W2 | | | | 2 |
| | | キマワリ | *Plesiophthalmus nigrocyaneus* MOTSCHULSKY | W4 L1 | | | | 5 |
| | | ゴミムシダマシ科 | TENEBRIONIDAE | L1 | | | | 1 |
| | | ユミアシゴミムシダマシ | *Promethis valgipes* (MARSEUL) | P1 | | | | 1 |
| | | ナガニジゴミムシダマシ | *Ceropria induta* (WIEDEMANN) | W1 | | | | 1 |
| 陸生の植生依存型虫 | 食植性 | コガネムシ科 | SCARABAEIDAE | W3 A1 L3 | | | | 7 |
| | | スジコガネ亜科 | RUTELINAE | S1 L2 | | | | 3 |
| | | サクラコガネ属 | *Anomala* sp. | A1 L4 | | A1 | H1 | 7 |
| | | ドウガネブイブイ | *Anomala cuprea* HOPE | H1 P4 W5 A7 L1 | | | | 18 |
| | | ヒメコガネ | *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY | W2 | | W1 | | 3 |
| | | マメコガネ | *Popillia japonica* NEWMANN | P1 W1 | | | | 2 |
| | | ハナムグリ亜科 | CETONIINAE | P1 A2 | | | | 3 |
| | | アオカナブン | *Rhomborrhina unicolor* MOTSCHULSKY | L1 | | | | 1 |
| | | カブトムシ | *Allomyrina dichotoma* (LINNE) | W1 L1 | | | | 2 |
| | | クワガタムシ科 | LUCANIDAE | W3 A4 L1 | | | | 8 |
| | | オオクワガタ | *Dorcus hopei* (E.SAUNDERS) | W1 | | | | 1 |
| | | ルリクワガタ | *Platycerus delicatulus* LEWIS | P1 | | | | 1 |
| | | ハムシ科 | CHRYSOMELIDAE | W11 | | | | 11 |
| | | コメツキムシ科 | ELATERIDAE | W3 | | | | 3 |
| | | アカアシオオクシコメツキ | *Melanotus cete* CANDEZE | P1 | | | | 1 |
| | | ゾウムシ科 | CURCULIONIDAE | W4 L1 | | W2 | | 7 |
| | | タマムシ科 | BUPRESTIDAE | P1 | | | | 1 |
| その他 | | カメムシ目 | HEMIPTERA | A2 | | | | 2 |
| | | ツノアオカメムシ | *Pentatoma japonica* (DISTANT) | P1 | W1 | | | 2 |
| | | ヒメマルカメムシ | *Coptosoma biguttulum* MOTSCHULSKY | S3 A1 | | | | 4 |
| | | 双翅目 | DIPTERA | 囲蛹 4 | | | | 4 |
| | | 不明甲虫 | COLEOPTERA | N1 W2 A7 L4 囲蛹 1 部位不明 6 | | A1 | | 22 |
| | | アリ科 | FORMICIDAE | H2 | | | | 2 |
| 総計 | | | | 158 | 5 | 12 | 3 | 178 |

(検出部位凡例)
W (Wings)：翅翅　H (Head)：頭部　T (Thorax)：胸部　A (Abdomen)：腹部　P (Pronotum)：前胸背板　S (Scutellum)：小楯板　L (Legs)：腿脛節　M (Mandible)：大腮

1. セアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* (Schaller)
左鞘翅　長さ9.8mm（試料D-標本1）



2. セアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* (Schaller)
左鞘翅　長さ9.8mm（試料D-標本1）

3. ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus sp.*
左鞘翅　長さ8.7mm（試料A-標本1）

4. キマワリ *Plesiophthalmus nigrocyaneus Motschulsky*
左鞘翅　長さ12.4mm（試料A-標本77）

5. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky)
右鞘翅　長さ3.2mm（試料A-標本74）

6. オオマグソコガネ *Aphodius haroldianus Balthasar*
右鞘翅　長さ5.1mm (試料A-標本134)

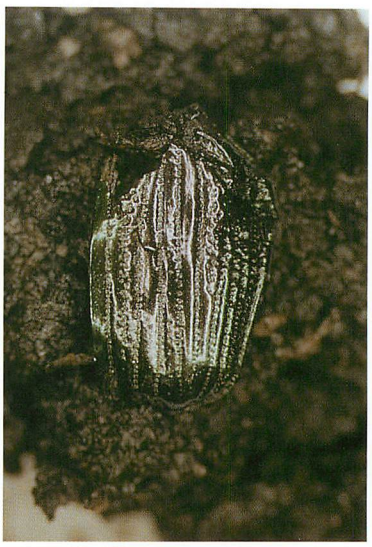
7. エンマムシ科　*Histeridae gen.et sp.indet.*
左右鞘翅　長さ3.2mm (試料A-標本37)

8. マグソコガネ　*Aphodius rectus* (Motschulsky)
前胸背板　最大幅1.8mm (試料A-標本75)

9. ゾウムシ科　*Curculionidae gen.et sp.indet.*
左右鞘翅　長さ7.8mm (試料A-標本23)

図版 II

1. ドウガネブイブイ　*Anomala cuprea* Hope
右鞘翅　長さ12.2mm (試料A-標本58)



2. マメコガネ　*Popillia japonica* Newmann
右鞘翅　長さ5.0mm　(試料A-標本133)

3. カブトムシ　*Allomyrina dichotoma* (Linne)
左前脛節　長さ11.0mm (試料A-標本41)

4. ハムシ科　Chrysomelidae gen.et sp.indet.
左右鞘翅　長さ3.1mm (試料A-標本122)

5. キヌツヤミズクサハムシ　*Plateumaris sericea* Linne
左鞘翅　長さ3.6mm (試料C-標本6)

6. フトネクイハムシ　*Donacia clavareaui* Goecke
左鞘翅　長さ4.2mm (試料C-標本8)

7. アカアシオオクシコメツキ　*Melanotus cete* Candeze
前胸背板　最大幅5.2mm (試料A-標本17)

8. ツノアオカメムシ　*Pentatoma japonica* (Distant)
前胸背板片　幅4.2mm (試料A-標本14)

9. ヒメマルカメムシ　*Coptosoma biguttulum* Motschulsky
小楯板ほか　幅4.0mm (試料A-標本111)

# 音羽遺跡出土植物遺体の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1　はじめに

音羽遺跡（山梨県甲府市音羽町所在）は荒川中流の左岸に位置する、古墳時代後期～奈良時代初頭を中心とした集落である。今回の発掘調査でも、同時期の住居跡、土坑、溝などが検出されており、その遺構覆土中から微細な植物遺体が出土している。今回は、当時の人間が利用した植物の利用状況や生業活動の一端に関する情報を得ることを目的として、出土した植物遺体や遺構覆土を対象として種実同定および材同定を行う。

## 2　試料

試料は、土壌、炭化物片、種実に分かれる。土壌は、各遺構の覆土を採取したもので、18点存在する。これについては、水洗選別による種実遺体の抽出、同定を行う。炭化物片は、発掘調査の際にとりあげられたもので、水洗されているもの、土壌ごと採取されているものなどが50点ある。これらの質を調べ、同定可能な炭化材や種実遺体が含まれているものは、試料を約40℃で乾燥させたあと、材と種実を抽出し、それぞれの分析に用いる。一方、炭化材同定が難しい微細な炭化物片や、大部分が土壌で、明瞭な炭化物が認められない試料は、土壌試料と同様に処理した。また、樹種同定、種実同定ともに抽出不能な試料も４点存在した。種実試料は、水浸の状態であったため、水洗後、同定に用いた。（中略）

## 3　方法

### （１）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて、木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### （２）種実同定

試料には、液浸のもの、土壌が付着した炭化物、土壌の３つに分かれる。液浸のものとそれ以外のものでは異なる方法で、抽出・同定を行った。液浸試料は、軽く水洗したあと、双眼実体顕微鏡下で同定し、種類毎にホウ酸・ホウ砂水溶液に保存する。その他の試料に関しては、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、土壌を泥化させる。その後、0.5㎜の篩を通して水洗するが、炭化物はもろいので、水流を弱くかつ短時間で行うよう努めた。残渣を1.8に調整した塩化亜鉛水溶液中に投入し、浮遊してくる炭化物のみを回収することにより、砂分と炭化物を分離する。炭化物を風乾後、双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の抽出と同定を行う。

## 4　結果

### （１）樹種同定

樹種同定結果を表１に示す。試料番号35、37、40、41は樹皮であるため樹種の同定には至らなかった。また、試料の中には保存状態の悪いものが多数認められた。それらの試料については、観察できた範囲での広葉樹・針葉樹の別を記し、組織の観察が全く行えなっかた場合には不明とした。その他の試料は、針葉樹４種類（ツガ属・サワラ・ヒノキ科・カヤ）、広葉樹８種類（ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ヤマグワ近似種・サクラ属・カエデ属）に同定された。（中略）

（2）種実遺体

結果を表2に示す。（中略）

## 5　考察

試料は、古墳時代後期～奈良時代初頭の遺構を中心に検出された。カマドおよび焼土跡から出土した木材は燃料材、住居床面付近から出土した木材は住居構築材に由来すると考えられるが、それ以外の試料については用途不明である。

住居構築材と考えられる炭化材は、いずれもＢ区３号住居跡から出土している。樹皮や保存状態が悪いなどの理由で同定に至らない試料もあるが、合計４種類が認められた。このことから、住居構築材は、比較的多くの種類で構成されていた様子がうかがえる。山梨県内では、長坂町健康村遺跡で平安時代の住居構築材について樹種同定が行われた例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994）。その結果では、コナラ亜属を主とした種類構成が確認されており、今回の結果とも比較的調和的である。

住居構築材は、関東地方の調査例から遺跡周辺の植生を反映する可能性が指摘されている（高橋・植木，1994）。このことを考慮すれば、本遺跡周辺にはコナラ亜属等の落葉広葉樹を主とする植生が見られた可能性がある。

燃料材と考えられる炭化材は、いずれも広葉樹で４種類が確認された。多く認められたコナラ属の木材（クヌギ節・コナラ節・アカガシ亜属）は、薪炭材として国産材の中で最も優良な種類である（平井，1979）。このことから、薪炭材として優良な木材を選択した可能性がある。しかし、住居内のカマドは、日常の煮炊きをする場所であり、これまで各地で行われている調査結果を見る限りでは特定の木材を選択していたとは考えにくい。住居構築材の結果から、コナラ亜属は遺跡周辺で入手可能であったことが推定され、燃料材は遺跡周辺に生育していた種類を利用した結果とも考えられる。

一方、炭化種実は、イネとマメ類である。いずれも可食部位で炭化したために残存したとみられる。炭化米や炭化マメ類は各地で多くの検出例がある。今回のものは各１個体づつであるので、貯蔵されていたものかどうかは定かではないが、当時利用されていたものの一部であると思われる。

なお、今回検出されたものの中には、炭化していない材や種実も含まれる。これらの検出された場所は、いずれも遺構からはずれた位置であったり、また、遺構面よりも大幅に上位から検出されている。また、種実遺体をみると、ヒルムシロ属などの水生植物が含まれている。さらに、本遺跡は河川に近いことなどから、非炭化の材・種実は、後代の影響によってもたらされた可能性が高い。特にブドウ属の種子が大きく、現在の栽培種に形状が近いことなどからしても、新しい堆積物が混入している可能性がある。

## 引用文献

平井信二（1979）　木の事典　第２巻.かなえ書房.

南木睦彦（1991）　栽培植物.「古墳時代の研究　4　生産と流通」，石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編，ｐ.165-174，雄山閣.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）健康村遺跡自然科学分析調査報告.「山梨県北巨摩郡長坂町　健康村遺跡－（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書－」，ｐ.116-128，新宿区区民健康村遺跡調査団.

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択.PALYNO，２，ｐ.５-18.

## 表1　樹種同定結果

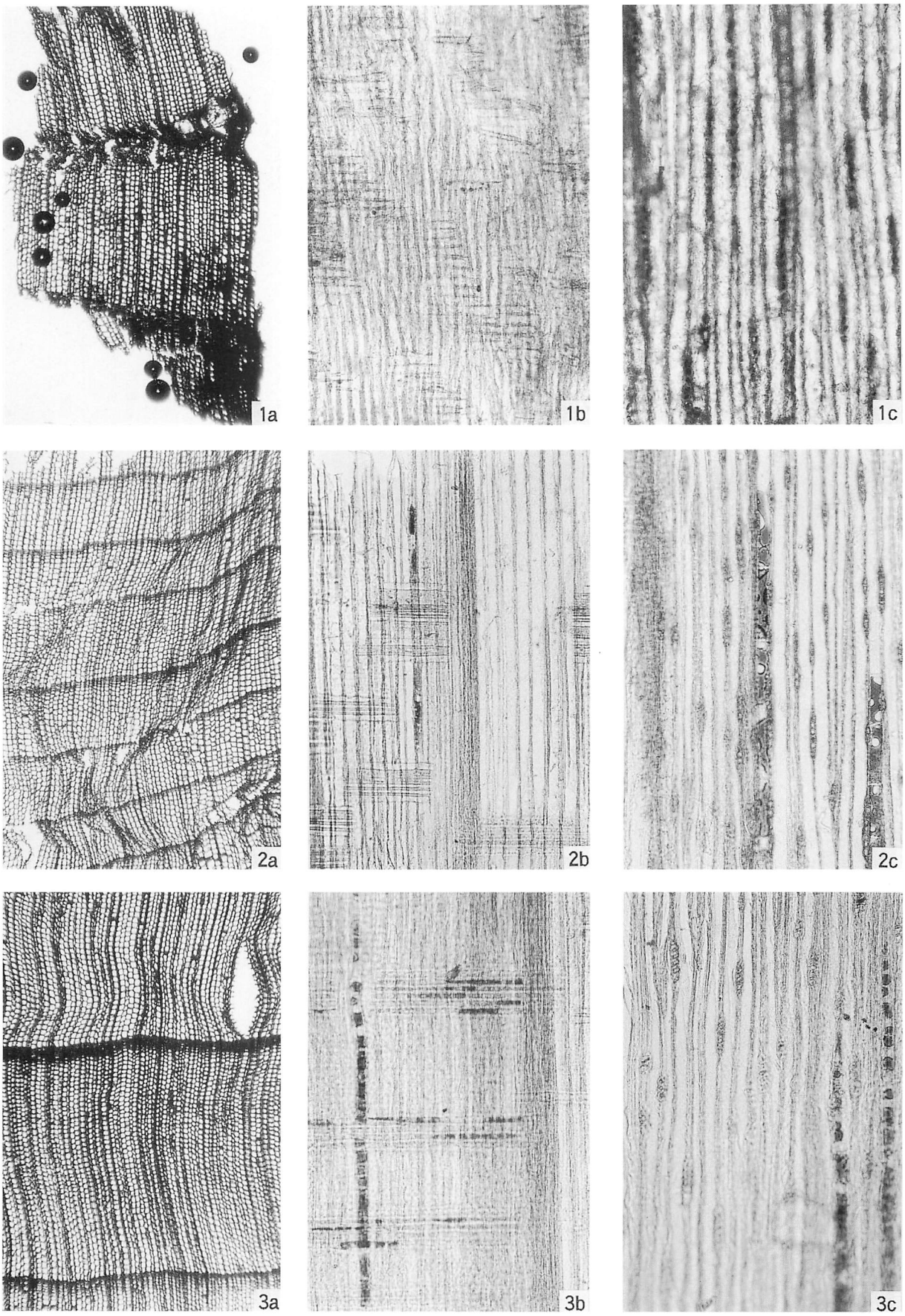
| 番　号 | 試　料　名 | 質 | 用途など | 樹　　種 |
|---|---|---|---|---|
| No. 1 | B区　D-2G　No. 1 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 2 | B区　D-2G　No. 2 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| No. 3 | B区　D-2G　No. 3 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| No. 4 | B区　D-2G　No. 4 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| No. 5 | B区　D-3G　No. 1 | 炭化材 | 不明 | 広葉樹（環孔材） |
| No. 6 | B区　E-2G　No. 1 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| No. 7 | B区　E-5G　No. 1 | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 8 | B区　E-6G　No. 1 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 9 | B区　E-7G　No. 1 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 11 | B区　E-7G　No. 4 | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 12 | B区　E-7G　No. 5 | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 13 | B区　E-7G　No. 6 | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 14 | B区　E-7G　No. 7 | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 15 | B区　E-7G　No. 8 | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 16 | B区　E-8G　No. 1 | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 17 | B区　第1号土坑　No. 1 | 炭化材 | 燃料材？ | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 18 | B区　第8号土坑　No. 1 | 炭化材 | 燃料材？ | ヤマグワ近似種 |
| No. 19 | B区　第2号住居跡カマド | 炭化材 | 燃料材 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| No. 20 | B区　第3号住居跡カマド | 炭化材 | 燃料材 | 広葉樹 |
| No. 21 | B区　第1号焼土跡 No. 1 | 炭化材 | 燃料材 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 22 | B区　第1号焼土跡 No. 2 | 炭化材 | 燃料材 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 23 | B区　E-2G　No. 2 | 炭化材 | 不明 | サクラ属 |
| No. 24 | B区　B-4G | 炭化材 | 不明 | マツ科 |

| 番　号 | 試　料　名 | 質 | 用途など | 樹　　種 |
|---|---|---|---|---|
| No. 25 | C区　第3号住居跡 | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 27 | C区　第1号住居跡カマド | 炭化材 | 燃料材 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 28 | C区　B-3G | 炭化材 | 不明 | 不明 |
| No. 29 | B区　撹乱内 | 炭化材 | 不明 | コナラ属アカガシ亜属 |
| No. 30 | B区　第3号住居跡 No. 1 | 炭化材 | 住居構築材？ | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| No. 31 | B区　第3号住居跡 No. 2 | 炭化材 | 住居構築材？ | 不明 |
| No. 32 | B区　第3号住居跡 No. 3 | 炭化材 | 住居構築材？ | カエデ属 |
| No. 33 | B区　第3号住居跡 No. 4 | 炭化材 | 住居構築材？ | クリ |
| No. 35 | B区　第3号住居跡 No. 6 | 炭化材 | 住居構築材？ | 樹皮 |
| No. 36 | B区　第3号住居跡 No. 7 | 炭化材 | 住居構築材？ | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| No. 37 | B区　第1号焼土跡 木片 No. 2 | 生　木 | 燃料材 | 樹皮 |
| No. 38 | B区　D-4G | 炭化材 | 不明 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 39 | C区　B-5G | 炭化材 | 不明 | クリ |
| No. 40 | B区　第1号焼土跡 No. 1 | 生　木 | 燃料材 | 樹皮 |
| No. 41 | B区　第1号焼土跡 No. 3 | 炭化材 | 燃料材 | 樹皮 |
| No. 42 | B区　第1号焼土跡 No. 6 | 生　木 | 燃料材 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節 |
| No. 43 | B区　第1号焼土跡 No. 7 | 生　木 | 燃料材 | コナラ属アカガシ亜属 |
| No. 44 | B区　第1号焼土跡 No. 8 | 生　木 | 燃料材 | コナラ属アカガシ亜属 |
| No. 46 | B区　C-8G | 生　木 | 不明 | ブナ属 |
| No. 47 | C区　第2号溝状遺構 No. 1 | 生　木 | 不明 | ヒノキ科 |
| No. 48 | C区　B-3G No. 1 | 生　木 | 不明 | カヤ |
| No. 49 | C区　B-3G トレンチ内 | 生　木 | 不明 | ツガ属 |
| No. 50 | C区　B-4G No. 153 | 生　木 | 不明 | サワラ |

## 表2　種実同定結果

| 番　号 | 試　料　名 | 同定結果（個数） |
|---|---|---|
| | B区　第1号土坑　P-2 | 検出されない |
| | B区　第1号土坑 | 検出されない |
| | B区　第3号土坑　P-1 | 検出されない |
| | B区　第4号土坑　P-2 | 検出されない |
| | B区　第4号土坑　P-3 | ナデシコ科（1） |
| | B区　第4号土坑　P-4 | 検出されない |
| | B区　第4号土坑 | 検出されない |
| | B区　第1号住居跡　2層 | マメ類（1） |
| | B区　第1号住居跡　4層 | 検出されない |
| | B区　第1号住居跡　焼土 | 検出されない |
| | B区　第2号住居跡　カマド | 検出されない |
| | B区　第2号集石 | 検出されない |
| | B区　第5号溝状遺構 | 検出されない |
| | B区　E-3G　P-34 | 検出されない |
| | B区　第1号焼土跡 | 検出されない |
| | B区　第3号住居跡　カマド | イネ（1） |

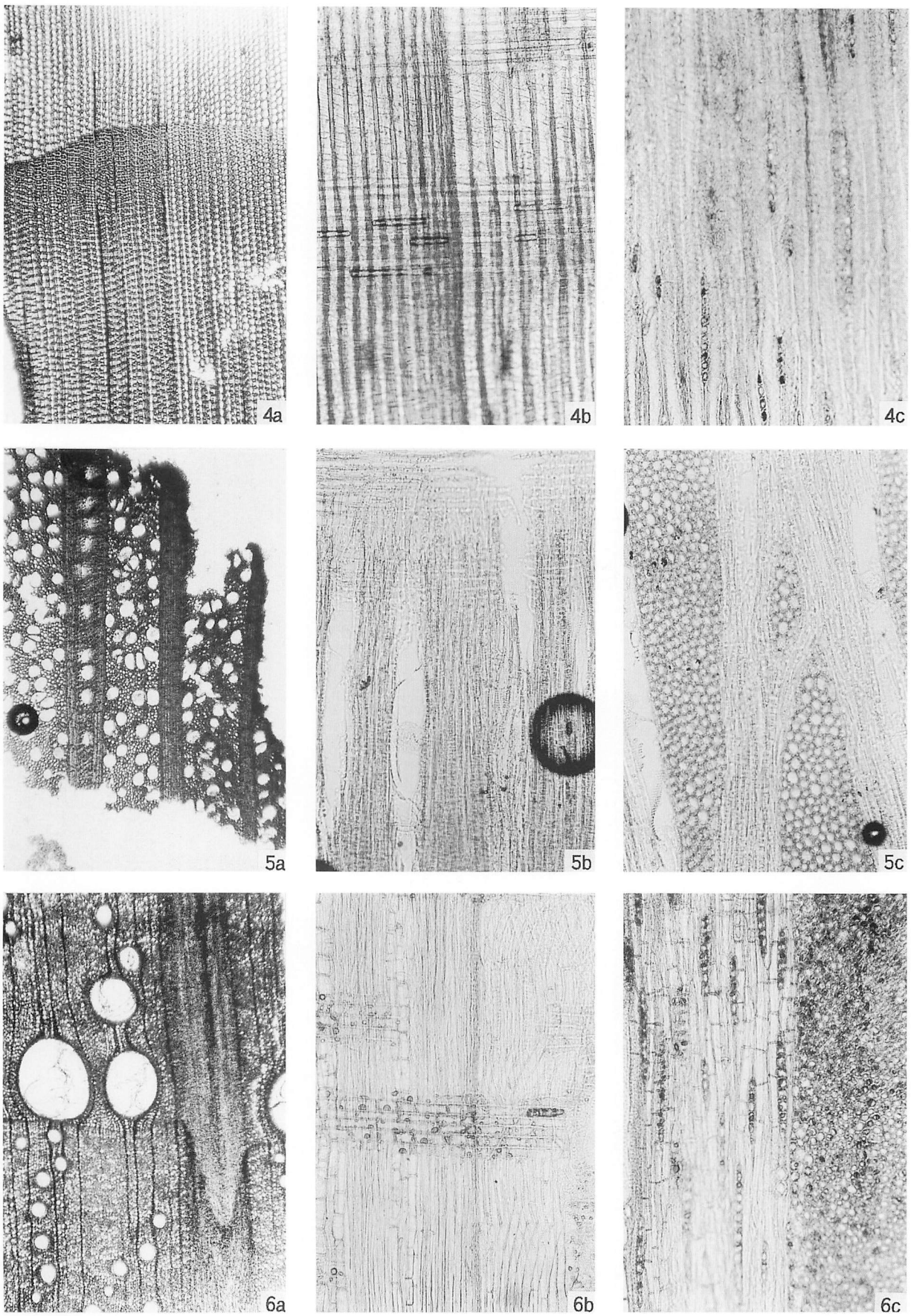
| 番　号 | 試　料　名 | 同定結果（個数） |
|---|---|---|
| | B区　第3号住居跡 | 検出されない |
| | B区　第3号集石 | 検出されない |
| No. 10 | B区　E-7G No. 3 | 検出されない |
| No. 26 | C区　第1号住居跡　カマド | 検出されない |
| No. 27 | C区　第1号住居跡　カマド | 検出されない |
| No. 34 | B区　第3号住居跡　No. 5 | 検出されない |
| No. 1 | B区　A-6G | 検出されない |
| No. 2 | B区　B-2G | ブドウ属（1） |
| No. 3 | B区　F-3G No. 1 | 検出されない |
| No. 4 | B区　F-3G No. 2 | 検出されない |
| No. 5 | C区　A-5G | 検出されない |
| No. 6 | C区　B-3G No. 1 | ホタルイ属（約100）、ヒルムシロ属（2）、キンポウゲ属（1）、タデ属（1）、オトギリソウ属（5） |
| No. 7 | C区　B-3G No. 2 | ヒルムシロ属（1） |
| No. 8 | C区　B-3G No. 3 | 検出されない |
| No. 9 | C区　C-1G | ナデシコ科（4） |




1. ツガ属（試料番号49）
2. サワラ（試料番号50）
3. ヒノキ科（試料番号47）
　a：木口、b：柾目、c：板目

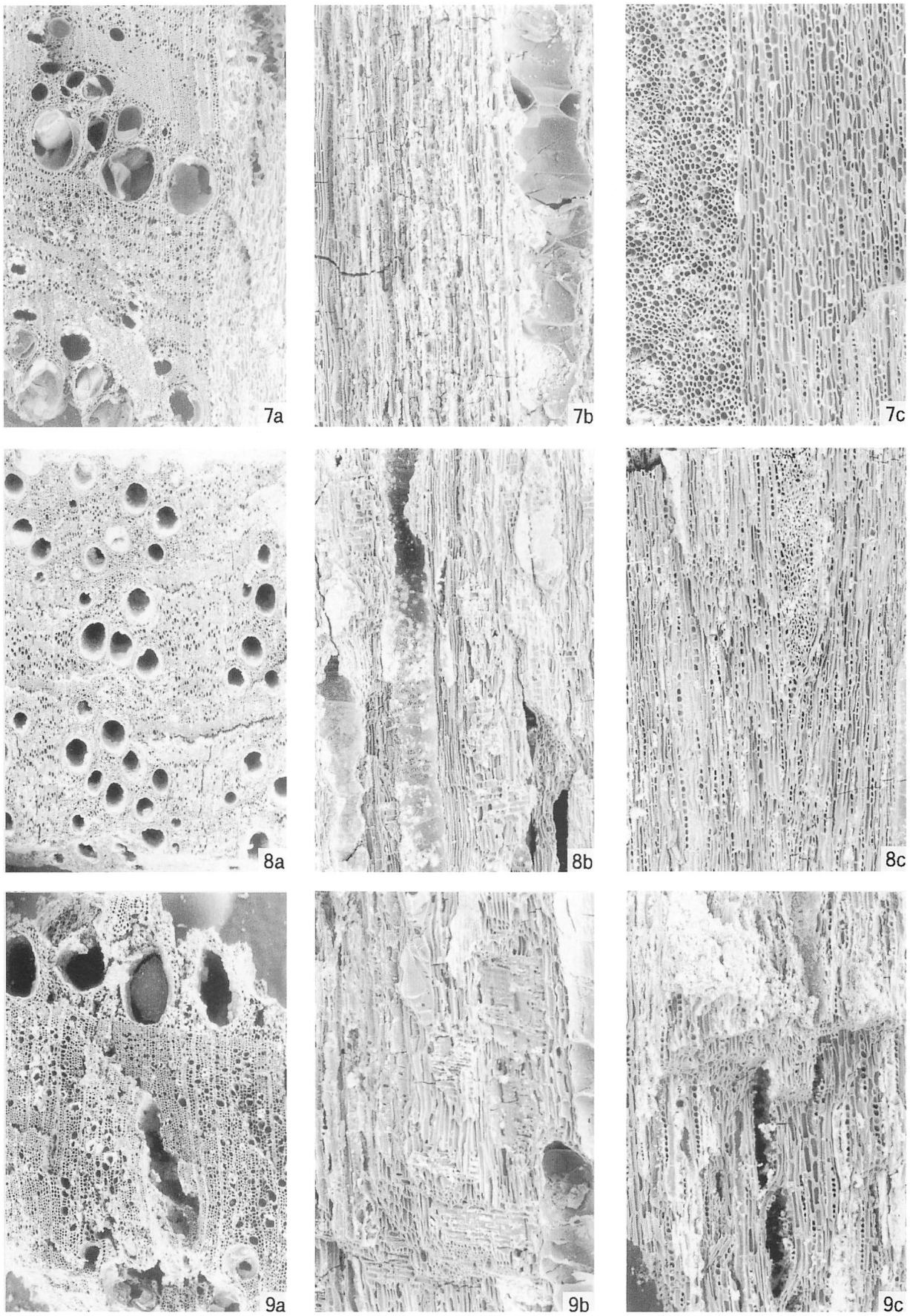
200μm：a
200μm：b、c

図版２　木材・炭化材（2）




200μm：a
200μm：b、c

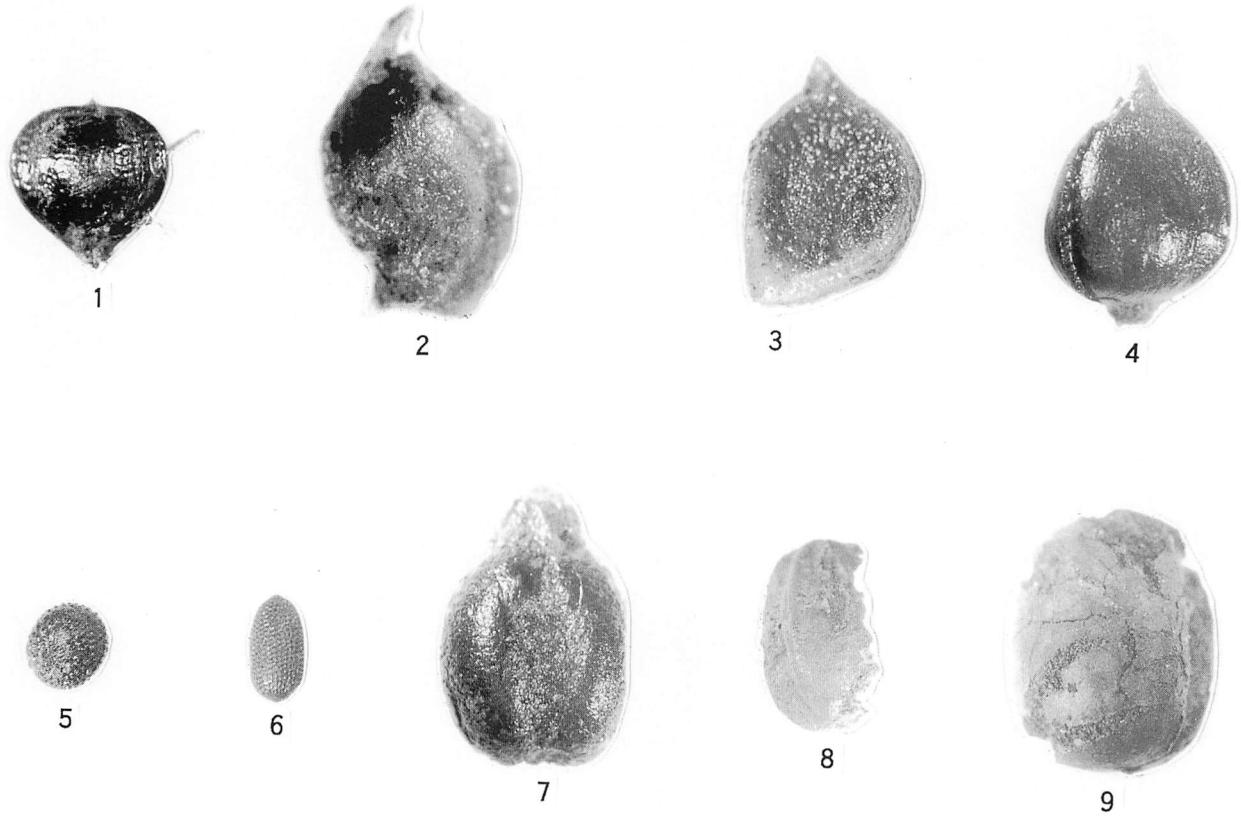
4. カヤ（試料番号48）
5. ブナ属（試料番号46）
6. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号42）
a：木口、b：柾目、c：板目




200μm：a
200μm：b、c

7. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号6）
8. コナラ属アカガシ亜属（試料番号29）
9. クリ（試料番号39）
a：木口、b：柾目、c：板目

図版４　種実遺体




1. ホタルイ属（B-3G）　2. ヒルムシロ属（B-3G）
3. キンポウゲ属（B-3G）　4. タデ属（B-3G）
5. ナデシコ科（C-1G）　6. オトギリソウ属（C-1G）
7. ブドウ属（B-2G）　8. イネ（B-2G）
9. マメ類（1号住セクションベルト2層）

2mm (7-9)　1mm (1-6)

第１号住居跡

第１号住居跡完掘状況

第２号住居跡完掘状況

第３号住居跡凹み石出土状況

第３号住居跡磨製石鏃出土状況

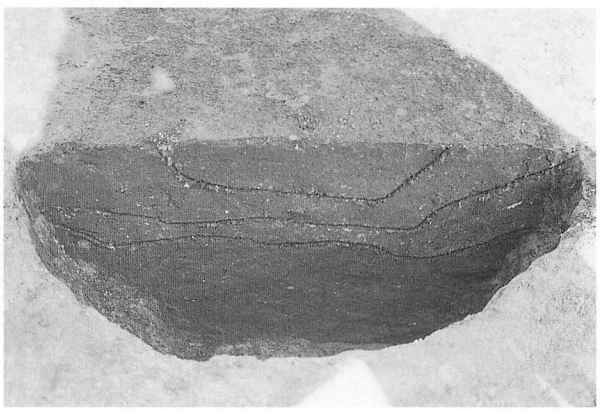
第３号住居跡完掘状況

図版２　Ａ区

調査風景

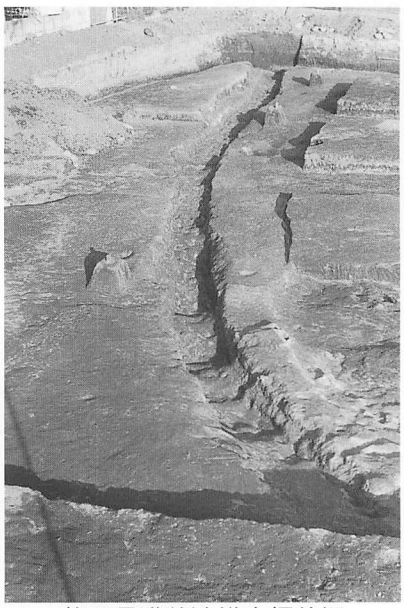
第２号住居跡調査風景

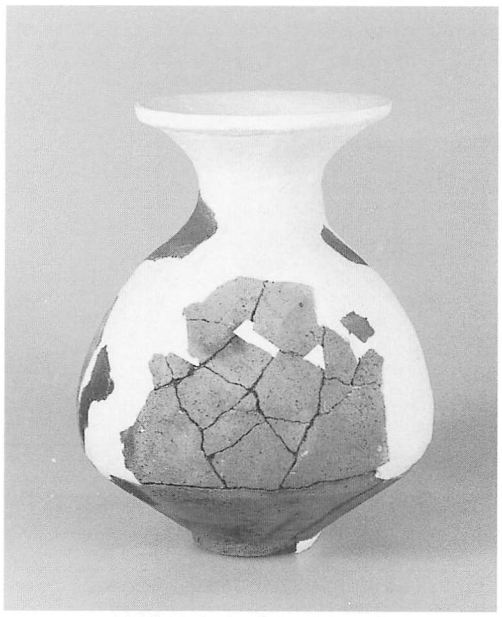
第１号溝状遺構土器出土状況


第１号土坑

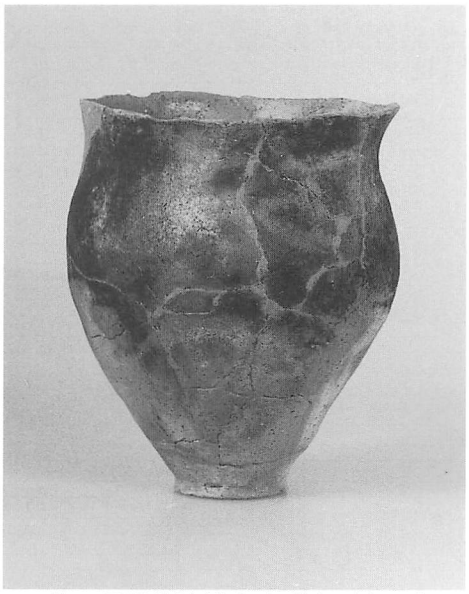
第４号溝状遺構甕出土状況

遺跡近景

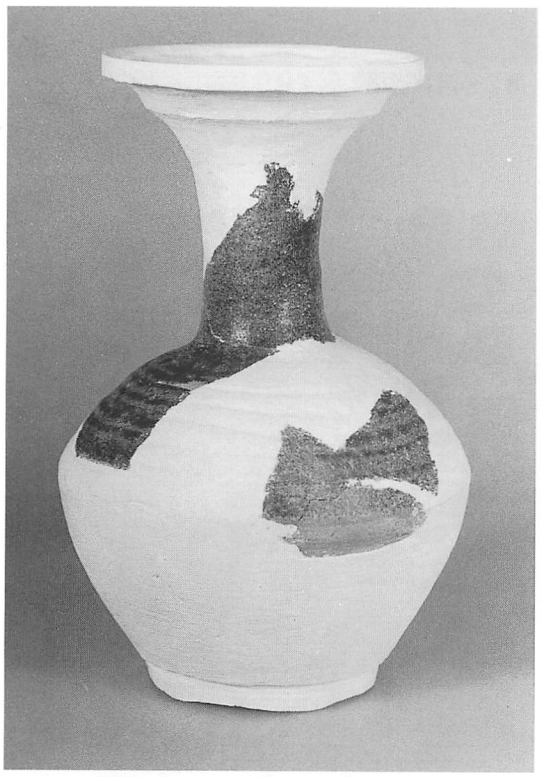

第２号溝状遺構完掘状況



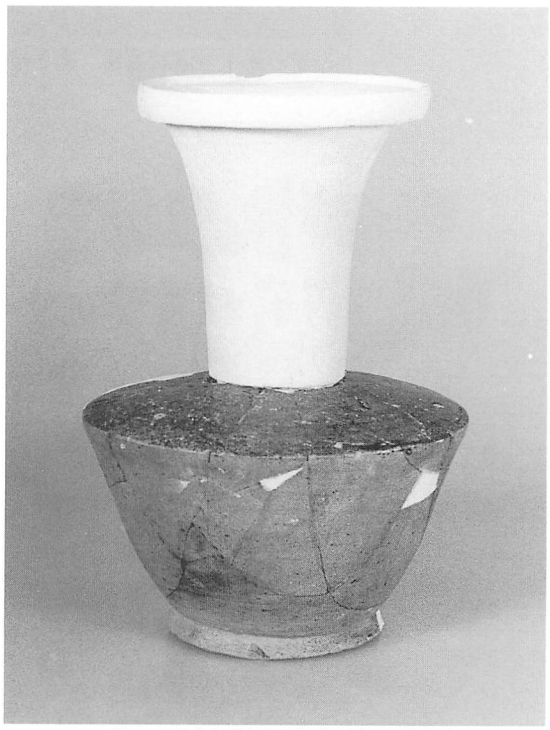
遺構外出土「壺型土器」



第４号溝状遺構出土「甕型土器」



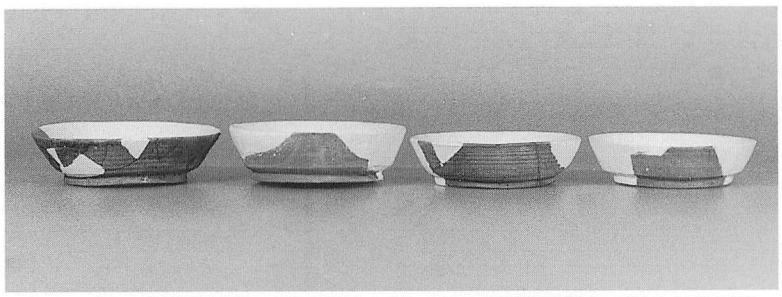
第６号溝状遺構出土「長頸壺」



第２号溝状遺構出土「長頸壺」

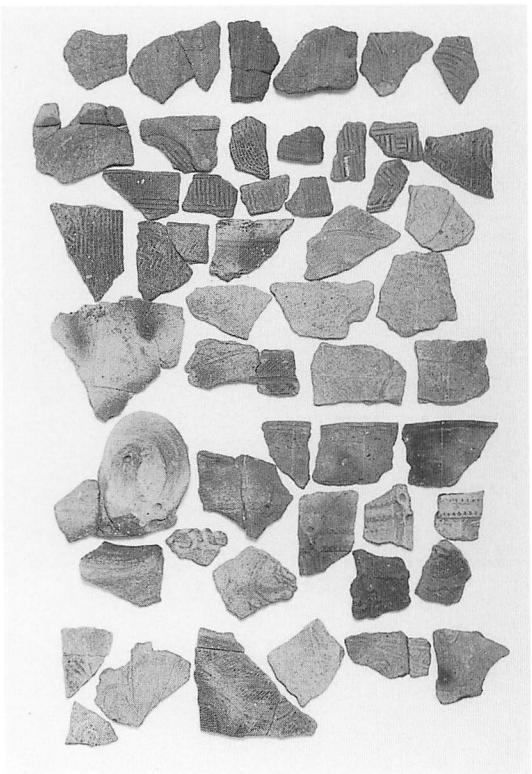
図版４　Ａ区

左　第１号住居跡土師器「坏」　　右　第３号住居跡「甕形土器」

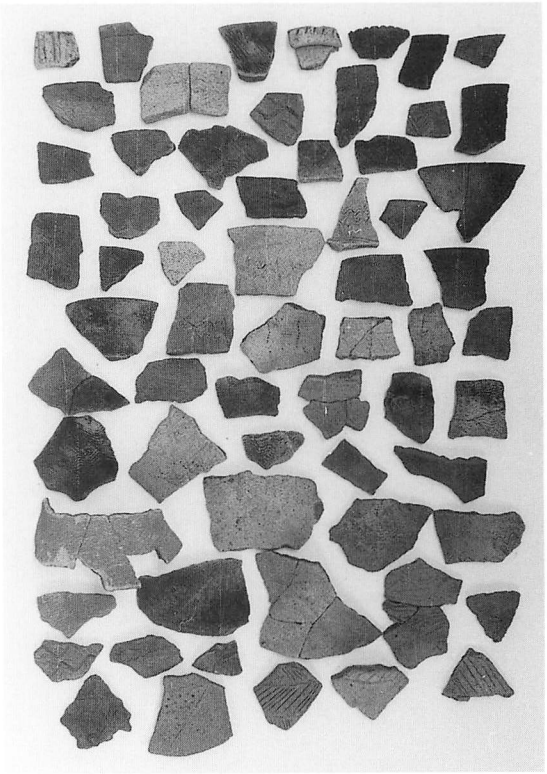


須恵器高台付坏

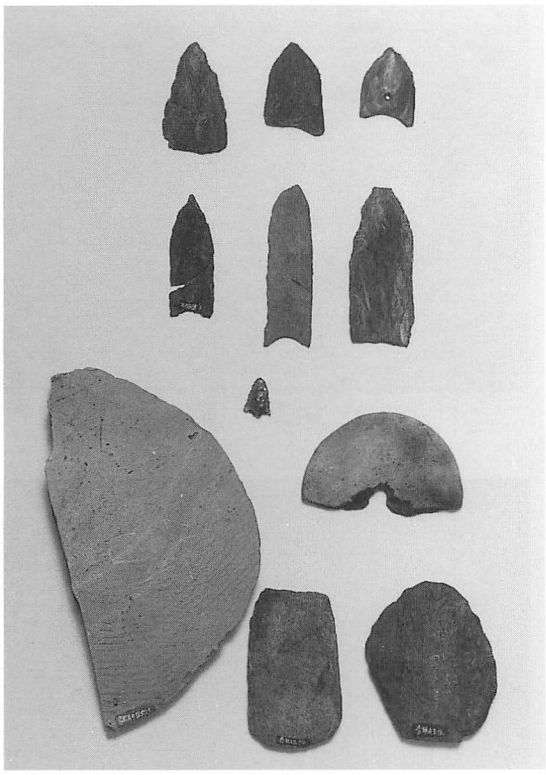
左から第１号溝状遺構、第５号住居跡、第２号溝状遺構、第４号住居跡



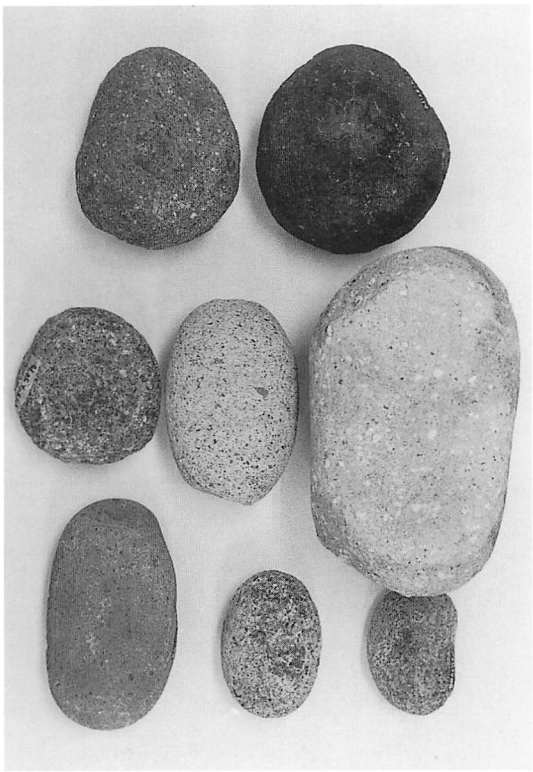
遺構外出土縄文土器　一括



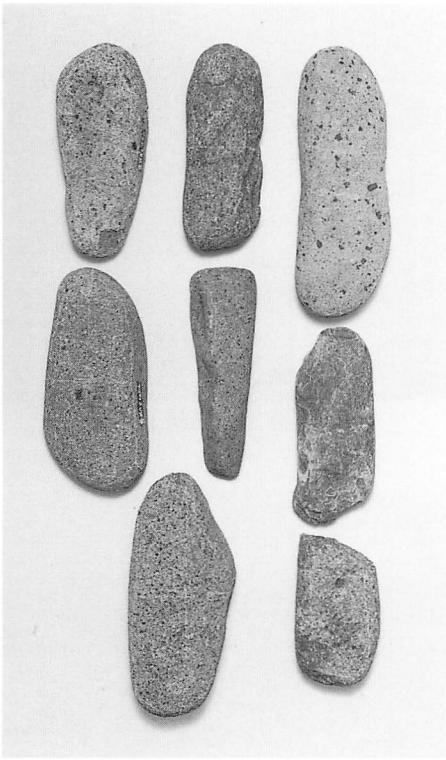
遺構外出土弥生土器　一括



磨製石鏃、石鏃、紡錘車、硯、打斧



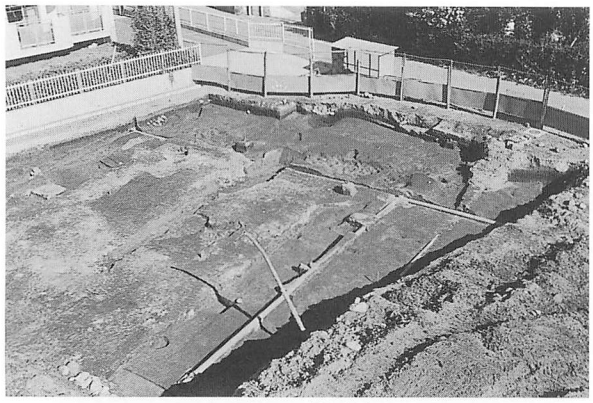
磨石、凹み石



石錘

石錘

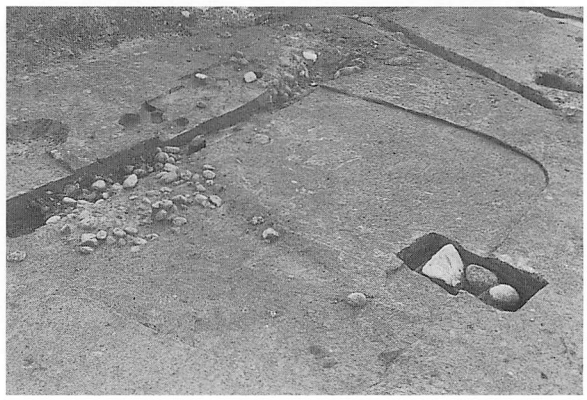
図版６　Ｂ区



調査区（北側）

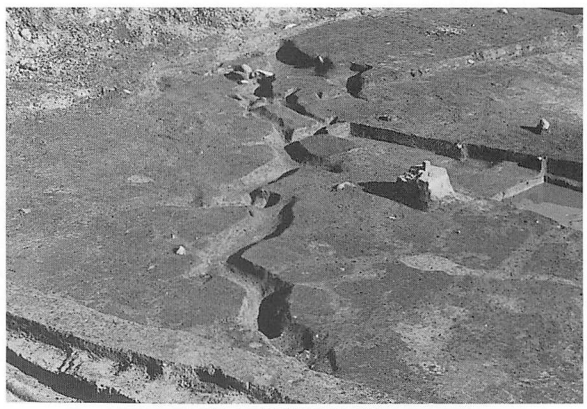
調査区（南側）

第２号住居跡



第３号住居跡

第１号焼土跡



第８号溝状遺構

第10～12号溝状遺構

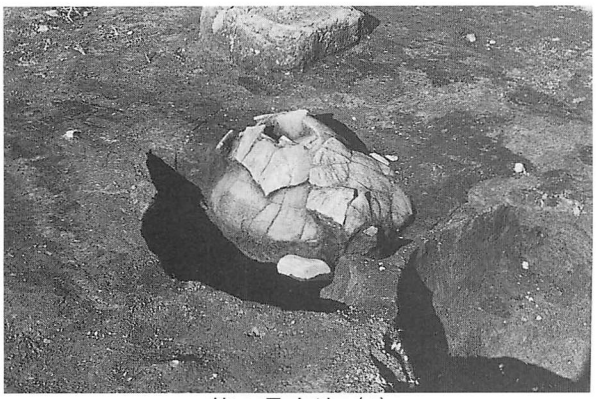
第12号溝状遺構

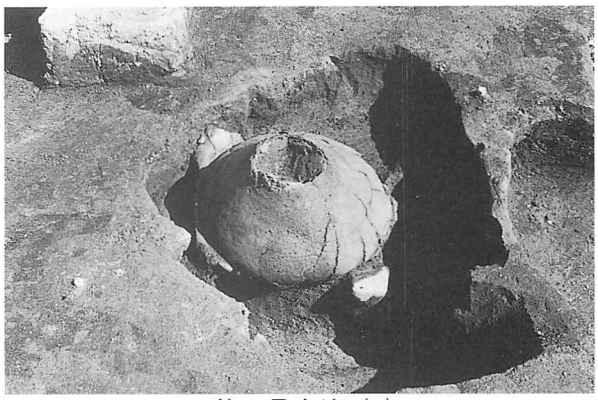
第１号集石

第２号集石

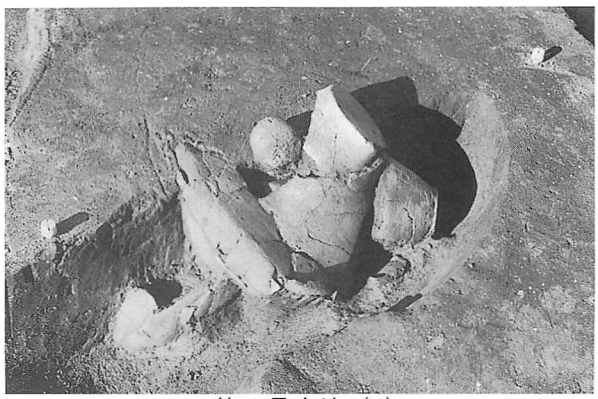
第３号集石（1）

第３号集石（2）


第１号土坑（1）

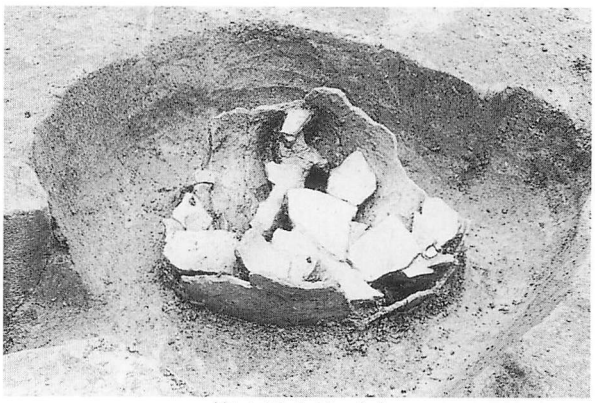

第１号土坑（2）

第３号土坑

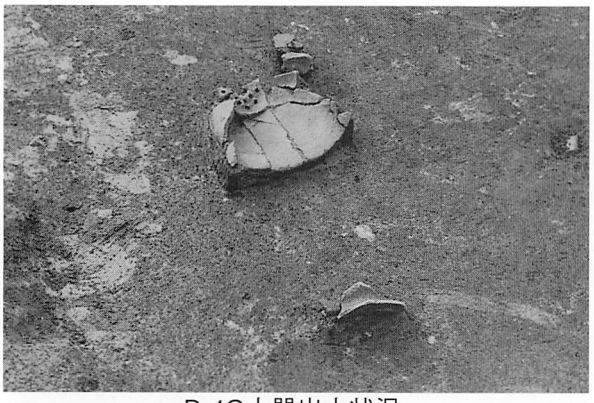

第４号土坑（1）

図版８　Ｂ区

第４号土坑（2）

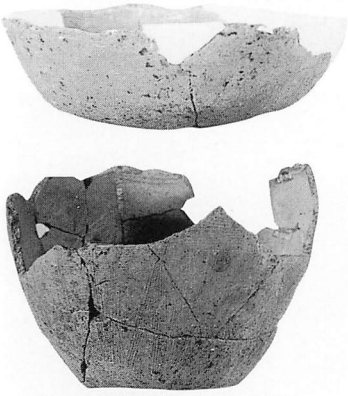


第４号土坑（3）

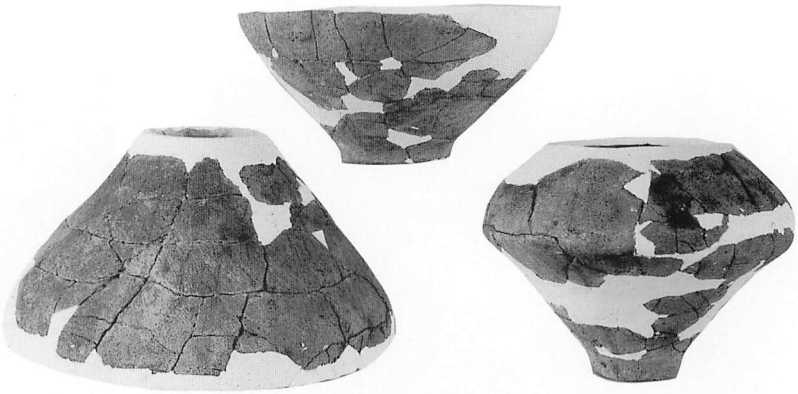


D-4G土器出土状況

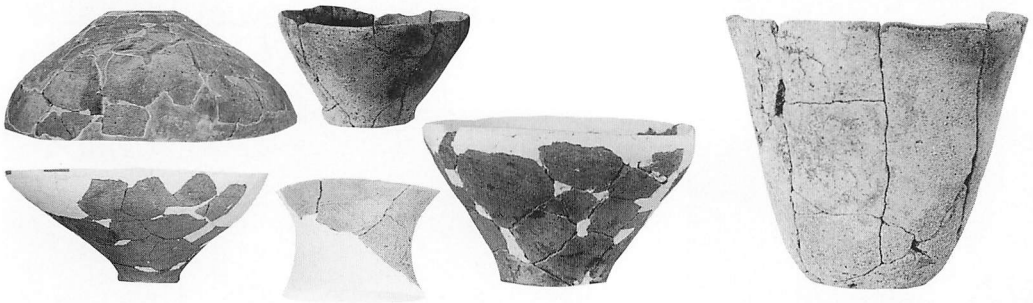
E-3G土器出土状況



第３号住居跡出土土器



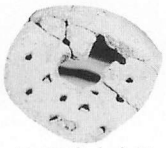
第１号土坑出土土器



第４号土坑出土土器

第１号焼土跡出土土器

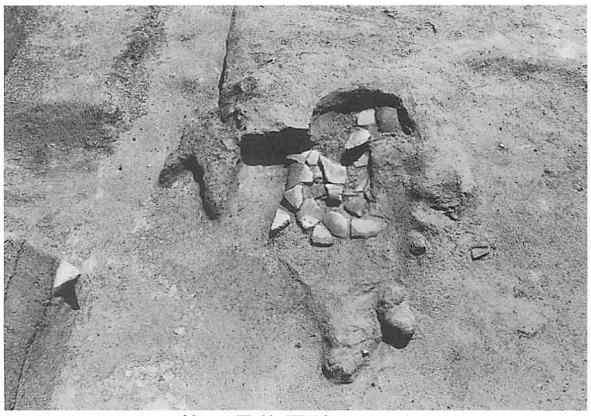
第３号土坑出土土器



D-4G出土土器

E-3G出土土器

第１号住居跡


第１号住居跡カマド

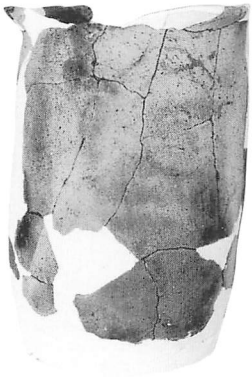
第２号住居跡

第３号住居跡土器出土状況

第４号住居跡土器出土状況

第２号溝状遺構（北西から）

第１号住居跡出土土器


第４号住居跡出土土器

第２号住居跡出土土器

# 報告書概要

| | | | |
|---|---|---|---|
| フリガナ | | | オトワ　イセキ |
| 書名 | | | 音羽遺跡 |
| 副題 | | | 音羽県職員宿舎建て替え事業に伴う発掘調査報告書（第1・2・3次調査） |
| シリーズ | | | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第125集 |
| 著者名 | | | 高野玄明・萩原孝一・田口明子・米山　真 |
| 発行者 | | | 山梨県教育委員会・山梨県総務部 |
| 編集機関 | | | 山梨県埋蔵文化財センター |
| 住所・電話番号 | | | 〒400-15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL 0552-66-3881・66-3016 |
| 印刷所 | | | 有限会社　新星堂印刷 |
| 印刷日・発行日 | | | 平成9年（1997）3月21日・平成9年（1997）3月28日 |
| 遺跡所在地 | | | 山梨県甲府市音羽町4番地内 |
| 地図名・位置 | | | 1/25,000　甲府北部　北緯35°40′10″　東経138°32′50″　標高286 m |
| 概要 | 主な時代 | A区 | 縄文時代前期・中期・後期、弥生時代後期、奈良時代 |
| | | B区 | 縄文時代前期・中期・後期、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代 |
| | | C区 | 縄文時代前期・中期、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代 |
| | 主な遺構 | A区 | 住居跡5軒（弥生時代後期2、奈良時代3）　土坑10基　溝状遺構7条 |
| | | B区 | 住居跡3軒（弥生時代後期・古墳時代後期～奈良時代）　焼土跡1基（弥生時代後期）　土坑8基　集石3基　溝状遺構11条 |
| | | C区 | 住居跡4軒（古墳時代後期～奈良時代）ピット4基　土坑4基　溝状遺構6条 |
| | 主な遺物 | A区 | 縄文時代前期末～中期初頭・中期末・後期、弥生時代後期、奈良時代の土器及び石器 |
| | | B区 | 縄文時代前期・中期・後期、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代の土器及び石器 |
| | | C区 | 縄文時代前期・中期、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代の土器及び石器 |
| | 特殊遺構・遺物 | A区 | 弥生時代後期（磨製石鏃・土製紡錘車）、奈良時代（須恵器甕破片・転用硯） |
| | | B区 | 昆虫・植物遺体、馬の歯 |
| | | C区 | 昆虫・植物遺体 |
| | 調査期間 | 試掘調査 | 平成4年（1992）10月　2日<br>平成5年（1993）10月13日 |
| | | 本調査 | A区　平成4年（1992）11月27日～平成5年（1993）　2月　5日<br>C区　平成7年（1995）　5月10日～平成7年（1995）　7月　7日<br>B区　平成8年（1996）　9月11日～平成8年（1996）12月25日 |


山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第125集
平成9年（1997）3月21日　印刷
平成9年（1997）3月28日　発行

音羽遺跡

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL 0552－66－3881・66－3016
発　行　山梨県教育委員会
山梨県総務部
印　刷　有限会社　新星堂印刷